

WADA, SAKURADA

松本市 和田遺跡・桜田遺跡

DŌDA, HIWATASHI

堂田遺跡・樋渡し遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1995.3

長野県松本市教育委員会



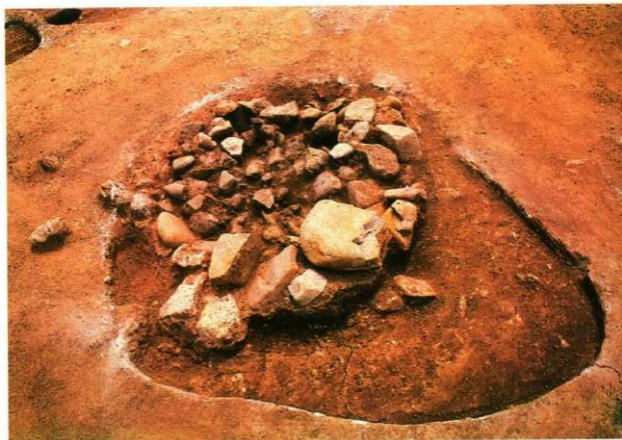
和田遺跡(右奥)・桜田遺跡(左手前)遺景(南から)  
桜田遺跡第1・2号住居址付近遺景(西から)



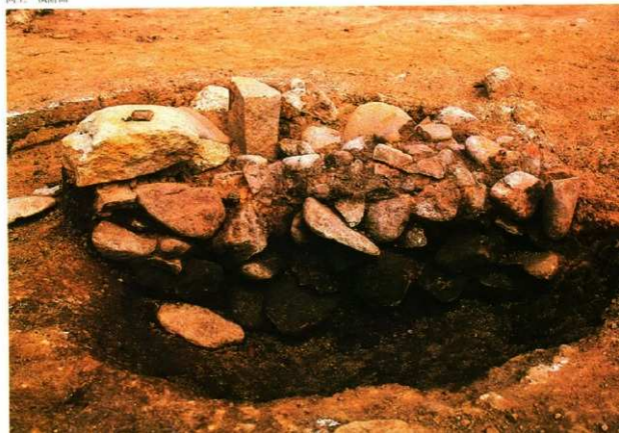


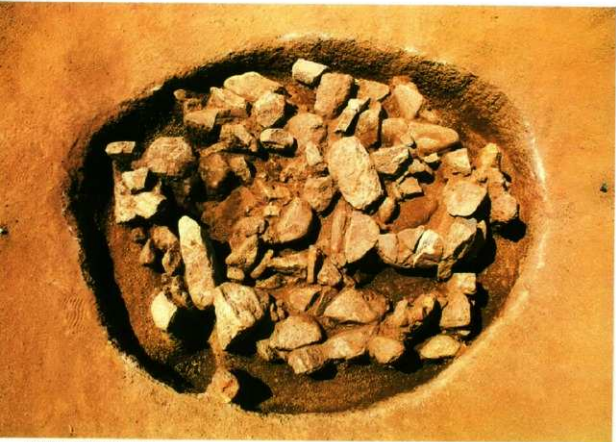
桜田遺跡第1号住居址(南から)  
同上 炉址





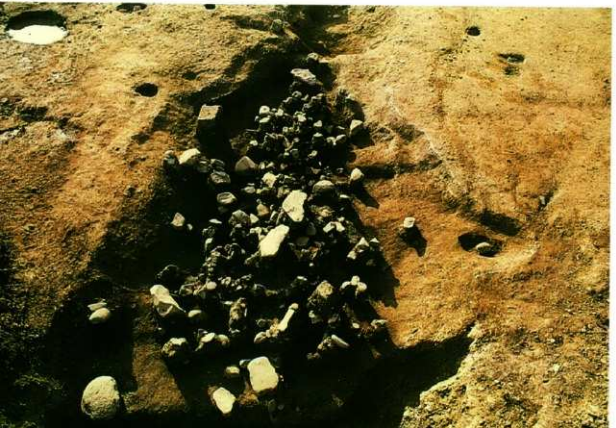
松田遺跡第25号土坑（集石坑）  
同上 横断面





桜田遺跡第18号土坑(集石坑)

同上 第2号遺物包含層





42

松田遺跡銅板土器(1)



27



31



6



13

桜川遺跡縄紋土器(2)



94



102



104



103





110



101



89



93



92

松田遺跡縄紋土器③



70







67



16



145

松田遺跡縄紋土器印・石器、樋渡遺跡出土石器(下右)



## 序

---

松本市の北部に位置する岡田本郷地区は、開発に伴う発掘調査が幾度となく行なわれ、遺跡が広範囲に分布していると知られておりました。

このたび当地の岡田伊深、稲倉、洞、および原に県営ほ場整備事業が計画されました。かねてより確認されていた堂田・和田・桜田・樋渡しという4つの遺跡を含む地域もその対象となったことから、文化財の保護を図るため、松本市が松本地方事務所より委託を受け、市教育委員会が事業に先立って発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行うことになりました。

発掘調査は市教育委員会の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団が、平成5年5月から8月に和田・桜田遺跡を、同年11月から12月にかけて堂田・樋渡し遺跡の調査を行いました。夏は猛暑、冬は厳寒に悩まされるなど大変な作業でしたが、参加者の皆様の並々ならぬご尽力により無事遂行することができました。その結果、縄紋と奈良・平安時代の集落遺跡であり、住居址総数20軒をはじめとする数多くの遺構と、同時期の土器などの遺物を得て、多大なる成果を収めることができました。これらは今後の地域史解明に大変役立つものになるでしょう。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾のなかで、文化財保護に携わる者の苦悩は絶えません。本書を通して、文化財保護へのご理解を深めていただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、過酷な状況のなか発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大なご理解をいただいた女鳥羽川土地改良区、地元関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成7年3月

松本市教育委員会 教育長 守屋立秋

## 例 言

- 1 本書は次の遺跡の緊急発掘調査報告書である。

和田遺跡(松本市大字稲倉字和田)	平成5年5月25日～8月24日調査
桜田遺跡(松本市大字稲倉字桜田)	5月25日～8月24日調査
堂田遺跡(松本市大字岡田伊深字堂田)	11月16日～12月24日調査
樋渡し遺跡(松本市大字洞字火渡し)	11月23日～12月24日調査

- 2 本調査は平成5年度県営は場整備事業に伴う発掘調査であり、長野県松本地方事務所より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が実施した。

- 3 本調査および本書の作成は松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。

- 4 本書の執筆はⅠ：事務局、Ⅱ-1：森 義直、Ⅲ-3-2～4・Ⅳ-3-2・3・Ⅴ・Ⅵ-3-1-(2)・2-(2)：関沢 聡、Ⅳ-3-1：島田哲男、その他を竹原 学が行った。

- 5 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。

遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物保存処理・復原：五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、村松恵美子

遺物実測・拓影：五十嵐周子、石合英子、大角けさ子、関沢 聡、竹原 学、田中正治郎、

平出貴史、MIN AUNG THWE、望月 映、吉沢克彦

遺構図整理：赤羽包子

トレース：開嶋八重子、関沢 聡、竹原久子、松尾明恵、望月 映

組 版：赤羽包子・石合英子・竹原久子・林 和子・中村恵子・百瀬二三子

写真撮影：市川 温・竹原 学・村田昇司(遺構)、宮嶋洋一(遺物)

- 6 本書で使用した遺構名の省略語は次のとおりである。

竪穴住居址→住、土坑→土、ピット→P、溝状遺構→溝、遺物包含層→包

- 7 遺構図中の土層名は記号化している。各記号の説明は第63図に示してある。

- 8 図中の方位は真北を表している。また和田・桜田・堂田の各遺跡については、国土地理院に基づき測量を行ったため、遺構配置図中に座標値を示している。

- 9 本文中で用いている奈良・平安時代の時期区分のうち、土器様相〇期、〇期と示したものは(財)長野県埋蔵文化財センターによる中央自動車道長野線関係調査遺跡の土器編年に拠っている。文献については以下のとおりである。

(財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』 総論編

- 10 本調査および本書作成に際し、学術的な面で以下の方々より助言・協力を得た。記して感謝申し上げる。

太田守夫、小口達志、小松 学、島田哲男、新谷和孝、竹内靖長、平林 彰、綿田弘実

- 11 本調査で得られた出土遺物および記録類は松本市教育委員会が保管している。

# 目次

---

巻頭図版

序

例言

目次

図版目次

## I 調査経過

- 1 文書記録…………… 1
- 2 調査体制…………… 2

## II 遺跡の環境

- 1 地質的環境…………… 3
- 2 歴史的環境…………… 5

## III 和田遺跡の調査

- 1 調査概要…………… 10
- 2 遺構…………… 15
- 3 遺物…………… 30
- 4 まとめ…………… 41

## IV 桜田遺跡の調査

- 1 調査概要…………… 42
- 2 遺構…………… 44
- 3 遺物…………… 54
- 4 まとめ…………… 91

## V 堂田遺跡の調査

- 1 調査概要…………… 92
- 2 遺構…………… 94
- 3 遺物…………… 102
- 4 まとめ…………… 103

## VI 繰渡し遺跡の調査

- 1 調査概要…………… 104
- 2 遺構…………… 107
- 3 遺物…………… 117
- 4 まとめ…………… 131

図版

## 挿図目次

第1図	遺跡付近の断面概念	5	第38図	板田遺跡	石器(3)	78
第2図	調査地の位置と周辺遺跡	7	第39図	板田遺跡	石器(4)	79
第3図	和田・板田・堂田遺跡 調査範囲	11-12	第40図	板田遺跡	石器(5)	80
第4図	和田遺跡 遺構配置(1)	13	第41図	板田遺跡	石器(6)	81
第5図	和田遺跡 遺構配置(2)	14	第42図	板田遺跡	石器(7)	82
第6図	和田遺跡 第1～3号住居址	23	第43図	板田遺跡	石器(8)	83
第7図	和田遺跡 第4・5・8号住居址	24	第44図	板田遺跡	石器(9)	84
第8図	和田遺跡 第6・7号住居址	25	第45図	板田遺跡	石器(10)	85
第9図	和田遺跡 第9～12号住居址	26	第46図	板田遺跡	石器(11)	86
第10図	和田遺跡 第1号竪穴状遺構・溝状遺構	27	第47図	板田遺跡	石器(12)	87
第11図	和田遺跡 土坑(1)	28	第48図	板田遺跡	石器(13)	88
第12図	和田遺跡 土坑(2)	29	第49図	板田遺跡	石器(14)	89
第13図	和田遺跡 土器(1)	34	第50図	板田遺跡	石器(15)・石製品	90
第14図	和田遺跡 土器(2)	35	第51図	堂田遺跡	遺構配置	93
第15図	和田遺跡 土器(3)	36	第52図	堂田遺跡	住居址・竪穴状遺構	98
第16図	和田遺跡 土器(4)	37	第53図	堂田遺跡	炭焼窯・土坑(1)	99
第17図	和田遺跡 土器(5)・金属製品	38	第54図	堂田遺跡	土坑(2)	100
第18図	和田遺跡 石器(1)	39	第55図	堂田遺跡	溝状遺構	101
第19図	和田遺跡 石器(2)・石製品	40	第56図	堂田遺跡	出土遺物	103
第20図	板田遺跡 遺構配置	43	第57図	樋波し遺跡	調査範囲	105
第21図	板田遺跡 第1・2号住居址	48	第58図	樋波し遺跡	遺構配置	106
第22図	板田遺跡 土坑(1)	49	第59図	樋波し遺跡	第1・4・5号住居址	112
第23図	板田遺跡 土坑(2)	50	第60図	樋波し遺跡	第2・6号住居址	113
第24図	板田遺跡 土坑(3)	51	第61図	樋波し遺跡	第3号住居址	114
第25図	板田遺跡 遺物包含層(1)	52	第62図	樋波し遺跡	土坑	115
第26図	板田遺跡 遺物包含層(2)	53	第63図	樋波し遺跡	遺物包含層	116
第27図	板田遺跡 土器(1)	66	第64図	樋波し遺跡	土器(1)	121
第28図	板田遺跡 土器(2)	67	第65図	樋波し遺跡	土器(2)	122
第29図	板田遺跡 土器(3)	68	第66図	樋波し遺跡	土器(3)	123
第30図	板田遺跡 土器(4)	69	第67図	樋波し遺跡	土器(4)	124
第31図	板田遺跡 土器(5)	70	第68図	樋波し遺跡	土器(5)・土製品	125
第32図	板田遺跡 土器(6)	71	第69図	樋波し遺跡	土器(6)	126
第33図	板田遺跡 土器(7)	72	第70図	樋波し遺跡	土器(7)・金属製品	127
第34図	板田遺跡 土器(8)	73	第71図	樋波し遺跡	石器(1)	128
第35図	板田遺跡 土器(9)	74	第72図	樋波し遺跡	石器(2)	129
第36図	板田遺跡 石器(1)	76	第73図	樋波し遺跡	石器(3)	130
第37図	板田遺跡 石器(2)	77				

## 表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	8	第5表	板田遺跡 石器・石製品出土一覧表	75
第2表	和田遺跡 土坑一覧表	22	第6表	樋波し遺跡 土坑一覧表	111
第3表	板田遺跡 土坑一覧表	47		発掘調査報告書抄録	132
第4表	板田遺跡 縄文土器一覧表	61			

## I 調査経過

### 1 文書記録

- 平成4年9月22日 平成5年度補助事業計画書提出。
- 9月28日 埋蔵文化財保護協議を市役所および現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 平成5年4月22日 和田遺跡および桜田遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 4月30日 平成5年度県営ほ場整備事業岡田本郷地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約締結。
- 5月10日 平成5年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。
- 5月20日 平成5年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 5月21日 平成5年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月24日 平成5年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 9月27日 平成5年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。  
平成5年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 12月6日 和田・桜田遺跡の埋蔵文化財拾得届および保管証、発掘調査終了届（通知）提出。
- 平成6年1月11日 平成6年度補助事業計画書提出。  
樋渡し遺跡の埋蔵文化財拾得届および保管証、発掘調査終了届（通知）提出。  
堂田遺跡の埋蔵文化財拾得届および保管証、発掘調査終了届（通知）提出。
- 3月31日 平成5年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）確定通知。  
平成5年度文化財保護事業補助金（県費）確定通知。
- 5月2日 平成6年度県営ほ場整備事業岡田本郷地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約。
- 6月24日 平成6年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）内定。  
平成6年度文化財保護事業補助金（県費）内示。
- 7月18日 平成6年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月29日 平成6年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 8月23日 平成6年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定。
- 9月26日 平成6年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。  
平成6年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 11月30日 平成6年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）計画変更承認申請書提出。  
平成6年度文化財保護事業補助金（県費）計画変更承認申請書提出。
- 平成7年 月 日 平成6年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）変更交付決定通知。  
平成6年度文化財保護事業補助金（県費）変更交付決定通知。

## 2 調査体制

---

調査団長 守屋立秋（松本市教育長）

調査担当者 関沢 聡・市川 温（堂田遺跡）、竹原 学・村田昇司（和田・板田・樋渡し遺跡）

調査員 太田守夫、佐々木 明、竹原久子、松尾明恵、三村 肇、宮嶋洋一、望月 映、  
百瀬 忠幸、森 義直

協力者 青木雅志、青木陽子、赤羽包子、赤羽森栄、秋山郁子、浅井信興、浅輪敬二、  
足木正幸、足立賢二、荒木 龍、飯田三男、飯沼 忠、五十嵐周子、石合英子、石合利加子、  
上野寧子、臼井秀明、内澤紀代子、内田和子、内山美紀、遠藤賢二、大久保たつ子、大崎悦正、  
大澤寅二、大澤武子、大角けさ子、太田千尋、大月みや子、大月八十喜、岡村行夫、開嶋八重子、  
久保田登子、久根下さやか、倉科祥恵、小池直人、小松正子、小林 隆、近藤高史、近藤忠美、  
斉藤政雄、坂口ふみ代、坂下義規、佐々木保二、鷺谷美紀、下谷亜希子、謝 衛平、瀬川長廣、  
関 敦志、滝沢龍一、高荷敏之、高山一恵、高山百合子、竹内里美、竹平悦子、田多井 亘、  
趙 鴻、土橋幸子、堤 加代子、鶴川 登、寺島貞友、遠山享史、戸田もえ子、鳥羽みゆき、  
直井由加理、中島新嗣、中村朝香、中村恵子、中村慎吾、中村次男、西村亜弓、根岸 功、  
林 和子、羽山佳乃、平出貴史、深井美登利、深井やすの、福嶋紀子、藤井源吾、藤井マツエ、  
藤井道明、藤本利子、布山 洋、洞沢文江、本澤 香、増澤 治、松居浩二、松尾さだ子、  
松本洋子、丸茂 新、丸山恵子、萬川晶子、獅子榮長寿、三沢元太郎、遠浦久美子、三村康子、  
宮田美智子、MIN AUNG THWE、村田 望、村松恵美子、村山牧枝、百瀬二三子、百瀬義友、  
矢崎寛子、柳沢孝子、藪下喜行、山下俊輔、横山小夜子、横山保子、吉江孝子、吉澤克彦、  
吉田 勝、米山禎典、LEE YEE MEE、渡部よし子

### 事務局

市教育委員会 鳥村昌代（社会教育課長～H6.3）、岩淵世紀（文化課長H6.4～）、木下雅文（課長補佐）、  
窪田雅之（主任）

### （財）松本市教育文化振興財団

事務局：大池 光（事務局長）、牟禮 弘（局次長）、青木孝文（次長補佐～H6.3）、上条恒嗣（次長補佐  
H6.4～9）

考古博物館：熊谷康治（館長）、松澤憲一（主査）、古幡昌史（主任H5.4～）、木下 守（主事～H5.3）、  
久保田 剛（主事）、遠藤 守（主事）、藤原美智子（～H6.3）、秋山桂子（H6.4～）

## 1 地質的環境

### 1 和田・桜田・堂田・樋渡し遺跡付近を中心とした女鳥羽川扇状地の概説

和田・桜田・堂田遺跡は、松本市北方の岡田地区を流れる女鳥羽川が、第三紀層の山地を南に開きして形成した細長い扇状地の扇頂付近で、右岸に三段ある段丘面のうち上位二面の標高725m～750mに分布している。また、樋渡し遺跡は三遺跡の下流約1200mの岡田町の東、標高695m～700m付近の最下位段丘面にある。

この扇状地を形成した女鳥羽川は、武石峠(1810m)付近から流れ出す中の沢と、三才山峠(1500m)から流れ出す本沢、袴越山(1752m)から流れ出す舟ヶ沢などが三才山の一の瀬で合流し西へ向かって流れ、稲倉から伊深へかけて流路を120°程向きをかえて南に流れて松本市内に流入する。

和田・桜田・堂田の三遺跡は、流路を大きく曲げる屈折点付近に位置しており、他の女鳥羽川流域の諸遺跡とは地形上異なった環境にある。

市内に入って90°流路を西に変え、白板付近で田川と合流している。延長は17.3km、標高差は1200mあり、稲倉より上流は120/1000の勾配をもつ急流で、下流は21/1000の勾配である。上流が急勾配のため年間降水量に対する年間流出量の比、すなわち出水率が大きで、そのうえ最少流量に対する最大流量の比、すなわち河況係数が極めて大であるという荒れ川であるため土砂の流出も多く、稲倉付近を扇頂として細長く広い扇状地を形成し、湯川の線を境として薄川の扇状地と接している。

地質的にみると、この扇状地は第三紀層の内村層および珩岩・各種安山岩の砂礫とその風化物にローム質の混入した排水の悪い堆積物により形成されている。

女鳥羽川を地史的にみると、現在稲倉～伊深付近で急角度に曲がっている女鳥羽川も、同様な堆積物が城山一帯にみられ、波田ロームを載せていることから、更新世末頃には西南方向に流れていたことがわかる。その後城山一帯の山地の隆起により流路を次第に東にとり、稲倉→岡田西→大門沢へと流れを変え、扇状地を形成するに至ったものと推定される。なお、注意すべき地形として、岡田町西の南北にのびる低地は扇状地の原形ができあがった後、流水が洪水時に伊深付近で曲がりきれずに、先の扇状地堆積物を切って流れてきた自然流路のあとで、岡田町西側の発掘により河川の跡や、それを利用した平安時代までの遺跡が見つかっている。

平安時代後期の大洪水により押し出された土砂により、流路はせき止められ首を大きく東へ振ったものとみられる。岡田町付近が南北に細長い微高地になっているのは、削り残しの結果であり扇状地の原形ができあがってから平安後期までに、このような流路の首振りとは2回以上あったことが地形的・考古学的に推定される。



## 女鳥羽川の流域の遺跡と段丘の関係について

この扇状地は形成後地盤の隆起により河岸段丘を形成し、右岸に三段の段丘が認められる。この地盤の隆起は一樣なものではなく、西側の方が東側より大きく傾斜した可能性があり、上段から、矢作・神沢の第一面、伊深・岡田・中原に至る第二面、現在の氾濫原とみられる第三面におよそ区別することができる。注意すべき点としては、第三面にも縄紋～平安の住居が存在することである。このことは、前述した如く女鳥羽川が伊深付近で第二面を切って岡田の西を流れていた時期には、岡田の東に広がる第三面は洪水の心配がなく安全とみられていたためである。少なくとも縄紋早期までには、第三面までの段丘の形成はなされており、岡田の西の第二面を流れたり、現在の如く東を流れたりした繰り返しにより現地地形ができあがったものとみられる。時間的には現在のように東側を流れた期間の方がはるかに長かったことは地形から見て当然である。但し第二面を流れていたことも何回かあるため、亜段丘的なものが第二面に幾つか見られる。

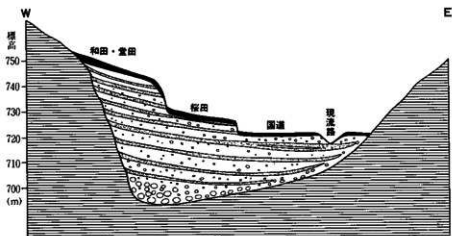
## 2 今回発掘の4遺跡群について

三段ある段丘面のうち、和田・堂田遺跡は上述した最上位の第一面に、桜田遺跡は第二面に、そして樋渡し遺跡は第三面に対比される。

このうち特に伊深より北にある和田・堂田遺跡と桜田遺跡は、女鳥羽川の屈折点にあるため、洪水時流水が曲がりきれずに大量の土砂を高所(750m)付近にまで押し上げて厚く堆積し、その結果層理面は水平とならず大きく東へ傾斜している。和田・堂田遺跡は750m～740mの第一段丘面に、桜田遺跡は730～725mの第二段丘面に、国道254号線の720m付近は第三段丘面となっている。このうち第一段丘面は縄紋以後一度も洪水を受けておらず、遺跡面の上に載る50～40cmの暗褐色～黒色土は、雨水による西からの流土である。第二段丘面は雨水による流土と、洪水による弱い冠水時の黒色土が西側で80cm、東側で約40cm載っているが縄紋の住居址を破壊する程の洪水は受けていない。

一方下流の岡田町東方の第三段丘面にある樋渡し遺跡(695m～700m)は、第二段丘斜面寄りに縄紋の敷石住居(6住)があり東へ平安時代の住居址が分布するが、平安後期の洪水により流路が岡田町の西から現在の東側の流路に変わるとき押し出された含巨礫黒色土層が載り、その後も小洪水の影響と雨水による土砂の流入等で、堆積・侵食を繰り返して現在に至っているが、地山は当時のまま保たれている。

なお、堂田遺跡面に残る溝については、馬飼峠より流出する沢の流路の跡である。



第1図 遺跡付近の断面概念

## 2 歴史的環境

和田・桜田・堂田・樋渡し遺跡の周辺、松本市岡田本郷地区には多くの遺跡が分布している。この地域は女鳥羽川の形成する扇状地地形をなしており、この扇状地面の微高地、段丘上に縄紋～中世の集落遺跡、古墳群、官道として東山道が、また東西に迫る山塊の末端に古墳、山間には古代の須恵器窯址群が展開している。(第2図・第1表参照)

ここでは過去の遺跡調査成果を踏まえながら、報告遺跡に関わる旧石器・縄紋・奈良・平安時代に絞って歴史的景観について触れてみたい。

### 1 旧石器時代

今のところ明確な遺跡は捉えられていないが、本報告の樋渡し遺跡(12)からナイフ形石器が出土し、塩倉池遺跡(49)では掻器が採集されている。この時代の終末期から縄紋時代草創期にかかる遺物としては和田・堂田遺跡を分ける深沢川を遡った沢筋の段丘上(5)から神子柴型石斧が採集され、桜田遺跡においても有舌尖頭器が1点出土している。また南下して芥子望主山塊末端の岡田神社西北付近からも有舌尖頭器が発見されている。これらの遺物出土地点はほとんどが扇状地周縁の山麓地形末端部にあたり、分布の特徴をなしている。

## 2 縄紋時代

遺跡数が急増する。主に女鳥羽川右岸の段丘上に集落が営まれ、時期的にも各期に及んでいる。

早期の遺跡は本報告の桜田遺跡(3)、塩辛遺跡(7)、矢作遺跡(22)等が知られ、いずれも末葉の条痕紋系土器が出土している。前期は今のところ堂田遺跡(4)から末葉の住居址が検出されているのみである。中期に入ると遺跡の分布も南に広がり、矢作遺跡で初頭～中葉、塩辛遺跡で中葉～後葉、樋渡し遺跡で中葉～後期初頭、岡田西裏遺跡(11)で初頭～後葉の遺構遺物が検出され、なかでも塩辛遺跡と樋渡し遺跡は比較的規模の大きい集落と考えられる。後期は樋渡し遺跡の他あまり知られていない。晩期に至ると遺構の確認はほとんどないもの、岡田町遺跡(8)、桜田遺跡で末葉の土器が出土している。

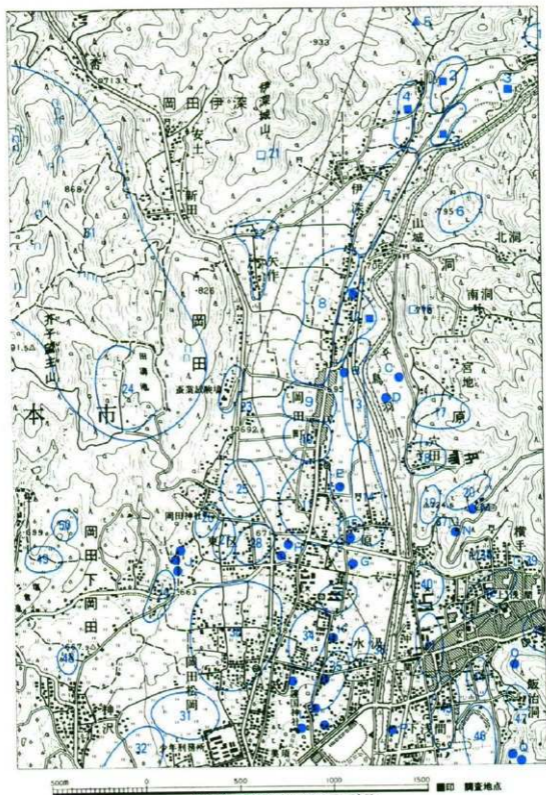
## 3 奈良・平安時代

この時代の集落址は女鳥羽川右岸の段丘上や微高地に安定的に営まれ、塩辛・岡田町・樋渡し・二反田・岡田西裏の各遺跡が調査されている。これらの遺跡は密接に関連した大集落址と受け取られ、最初古墳時代後期末に塩辛遺跡～岡田町遺跡北端部で集落が開始された後、時代の下降とともに南へ中心を移動させている。また9世紀中頃～後半には扇状地の各地に中小の集落が展開し、本報告の和田遺跡や宮の上(14)・原畑(13)遺跡等が調査されている。一方西側の大門沢左岸にも宮の前遺跡(25)等奈良・平安時代の集落址が見られる。

これらの集落址に共通していることは、いずれも9世紀代をもって突然集落が跡絶えること、各時期において土器生産との濃厚な関係が窺えることである。特に後者は宮の前・塩辛・岡田町・岡田西裏遺跡等7世紀末～奈良時代の遺構において、窯壁の破片や焼け歪みの著しい須恵器、瓦等の出土が目立ち、扇状地西側の山間部に所在する北部古窯址群での須恵器生産、あるいは流通に関わる集団の存在を、また宮の前遺跡の大形住居・建物址は窯業経営者層の存在を想起させる。

北部古窯址群における須恵器生産は9世紀半ばを過ぎると急速に衰退するが、この時期岡田町・岡田西裏遺跡や宮の上・原畑遺跡、宮の前遺跡では活発に土師器・黒色土器の生産が行われ、土器焼成坑や工房と考えられる建物、住居址内での粘土貯蔵等が検出されている。また他地域の同時期の集落に比較して土師器・黒色土器Aが量的に卓越し、多様な器形が見られる反面、灰釉陶器が少ない等の諸特徴を挙げることができる。

もう1点古代の岡田本郷地区を語る上で重要な点として東山道の存在がある。この地域のいずれかを通っていたものと推定されるが、これまでの調査では道路の遺構そのものの確認はなされていない。しかし、塩辛～岡田西裏遺跡に至る狭長な集落のあり方、地形の状況を考慮するならば、これらの集落に沿って近い位置を通過していたものと考えられ、今後道そのものの考古学的な調査が望まれるところである。



第2図 調査地の位置と周辺遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	旧跡	種別	跡地	古墳	奈良	平安	その他	発掘年・参考文献
1	稲倉鎮守		○						東筑P59
2	稲倉和田		○				○		本報告、発掘H5
3	稲倉核田(3':B地点)		○						本報告、発掘H5
4	堂田		○				○	○	本報告、発掘H5
5	御子柴型石斧出土地	○							表採
6	高山		○						東筑P59、信濃史料
7	塩辛		○		○	○	○		発掘H2・3、市No95・105
8	岡田町		○	○	○	○	○		発掘H3・4・5、市No99
9	二反田				○		○	○	発掘H3、市No99
10	下出口				○	○	○		
11	岡田西裏		○		○	○	○		発掘S54・58・60、H1・2・3
12	樋渡し		○			○	○		本報告、発掘H5
13	原畑		○			○	○	○	発掘H4
14	宮の上					○	○	○	発掘H4
15	下屋敷		○		○	○	○		東筑P503
16	早落城址							○	県教委報告
17	宮地(穴田峰)		○						
18	穴田前				○	○	○		東筑P503
19	北ノ窪		○						本郷村誌P323
20	根利尾		○						本郷村誌P323
21	伊深城址							○	県教委報告
22	矢作		○					○	発掘H2、市No105
23	向山(西光寺畑)		○	○			○		東筑P309
24	田溝		○		○				東筑P71
25	宮の前			○		○	○	○	発掘H2、市No94
26	岡田神社裏			○				○	松本市史
27	堀ノ内							○	
28	田中(中田)							○	
29	天神の木(矢崎)							○	
30	松岡(下り・山伏塚・上ノ段)		○		○	○	○		東筑P72、信濃史料P203
31	トウコン原		○		○	○	○		発掘H2・3・4、市No92
32	狐塚(白金)		○	○				○	東筑P72・309
33	杵坂		○					○	発掘S62、H2・5、市No66
34	七日市場(反目)				○		○		信濃史料P556
35	たて(反目)		○					○	東筑P503、本郷村誌P324
36	水汲西原(反目)		○	○	○				東筑P303

No.	遺跡名	旧名	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	発掘年・参考文献
37	茶臼山城址							○	県教委報告
38	神宮寺館址							○	
39	城之内館址							○	
40	本郷小学校敷地		○		○		○		発掘S62、H4、市No66
41	高田		○		○		○		東筑P72
42	鳥居前			○	○				東筑P516、信濃史料
43	大音寺		○	○					東筑P72
44	新湯南裏		○						
45	柳田(からおけ)		○			○	○		発掘S54、H2
46	大村(旧ベニシリン工場敷地)			○		○	○		発掘S61-62-63、H1
47	真観寺				○		○		
48	土田						○		東筑P503
49	塩倉池	○	○						東筑P35-71
50	御宝殿						○		信濃史料
51	北部古窯址群					○	○		東筑P723-724

※東筑：東筑摩郡・松本市・塩尻市誌の略。

※発掘年は1979(昭和54)年以降のものについて掲載した。

※県教委報告：長野県教育委員会編『長野県の中世城館跡分布調査報告書』の略。

※市No：松本市文化財調査報告Noの略。

#### 古墳名

A 山城	F 下屋敷	K 松岡	P 大屋敷
B 高根塚	G 塚畑	L 水汲1～5号	Q 妙義山1～3号
C 土取場	H 円筒埴輪出土地点	M 本社峯	
D 塚田	I 猫塚	N 茶臼山	
E 西原	J 矢崎1～3号	O 桜ヶ丘(中期末)	

## III 和田遺跡の調査

### 1 調査概要

和田遺跡は松本市稲倉に所在し、標高740～760m、北より女鳥羽川に注ぐ深沢川の左岸段丘上に立地している。本遺跡はこれまで学術的な調査が行われていないため、実態がほとんど知られていない。今回県営は場整備事業対象地が遺跡の全面に及ぶため、調査地点を決定するにあたり事前に現地の地形および遺物の分布調査を実施することとした。その結果遺物の散布状況や地形から見て、深沢川に面した段丘上に縄紋・平安時代の遺構の存在を予測した。さらに地形状況の良好な畑地2ヶ所を調査対象に選定し、調査を進めることとした。

調査区は北側をA地区、南側をB地区とし、バックホーにより表土除去を行った後検出作業、遺構調査を行った。調査地区の測量については、隣接する桜田遺跡、堂田遺跡にも調査が予定されていたため、第一系国家座標を基準に3遺跡を覆う30mの大区画を設定し、位置関係を把握できるようにした。さらに調査区内には3mの小区画を設定して実際の測量にあたった。

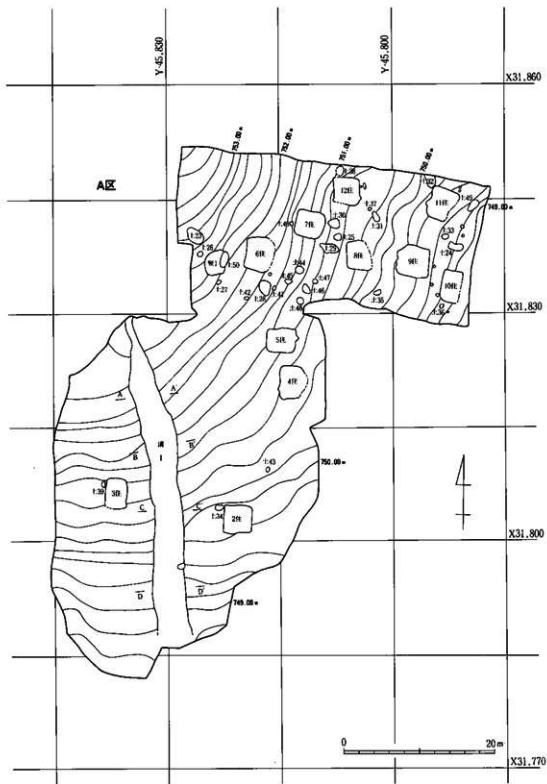
本調査の結果、遺跡の北側を中心に平安時代の集落址が存在することが判明、また縄紋時代の遺構も南寄りに広がっていることが確認された。以下、調査の規模および結果の概要を記しておく。なお遺構のうちピットに関しては報告に当たり番号、個々の遺構図の掲載は割愛した。

調査面積	A地区	1550m <sup>2</sup>
	B地区	2110m <sup>2</sup>
	合計	3660m <sup>2</sup>
検出遺構	竪穴住居址	12基（縄紋1・平安11）
	竪穴状遺構	1基（縄紋）
	土坑	50基（縄紋・平安）
	ピット	12基（時期不明）
	溝状遺構	2基（平安）
出土遺物	縄紋時代	土器 石器（石鏃・石錐・ピエスエスキュー・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨石類）
	平安時代	土器・陶器類（土師器・黒色土器・須恵器・灰軸陶器） 墨書・刻書土器 石製巡方 鉄製品（刀子）
	中世	銭（嘉祐通宝・景德元宝）

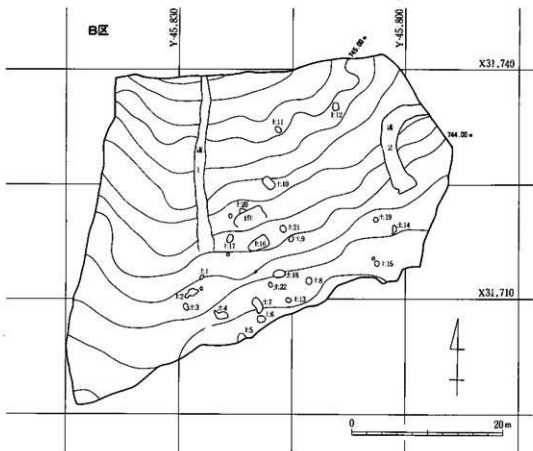


第3図 和田・桜田・堂田遺跡 調査範囲





第4圖 和田遺跡 遺構配置(1)



第5図 和田遺跡 遺構配置(2)

## 2 遺構

### 1 竪穴住居址

#### (1) 第1号住居址 (第6図、図版2)

位置 B区 平面形 (隅九方形) 規模 長408×短?×深14cm

床面積 不明 東西軸方位 N-65°-E 炉 不明

遺構 黄褐色土中に構築される。南～西壁を失い、礫混じりの黒色土が堆積していた。床面は平坦だが堅緻な部分は認められない。残存部分では炉は確認されず、東壁下に長楕円形の、北壁下に円形のピットが掘り込まれている(P1・2)。

遺物 床面・覆土中からの一括遺物の出土はない。わずかな縄紋土器片、石錐(27)が覆土中から出土したのみである。

時期 縄紋時代 備考 土20を切る。

#### (2) 第2号住居址 (第6図、図版2)

位置 A区 平面形 方形 規模 長400×短400×深36cm

床面積 11.5m<sup>2</sup> 主軸方位 N-0° カマド 北壁東隅・石組

遺構 黄褐色土中に構築される。四壁とも完周し、やや傾斜して掘り込まれる。覆土は礫混じりの黒色土・黒褐色土が上層に、炭片を含んだ暗褐色土が下層に堆積しているが、当初暗褐色土面が平坦なため床面と誤認した。

床面は平坦でカマド周辺を中心に堅緻な部分が認められた。カマドは袖石の一部が残存するものの大半は除去され、構築材が焚口前方の床面上に散乱していた。またカマドと東壁の間にも遺物と混在して煤けた礫の集中があり、意図的に行われた状況を呈していた。その他床面上には柱穴等存しないが、西壁下にわずかな焼土面が認められた。

遺物 カマド周囲、とりわけ東側の礫集中に混在して完形あるいはそれに近い遺物が認められ、廃絶時にカマド構築材とともに遺棄されたものと受け取られた。

出土土器の内訳は土師器鉢(8)・小型甕(12-13)・甕(10-11-14)、黒色土器A杯(2-4)・皿(1)・鉢(9)、須恵器長頸壺、軟質須恵器杯(7)、灰釉陶器碗(5-6)等である。

1の体部側面には判読不明の墨書が施される。6の碗は体部以上を意図的に打ち欠いている。見込み部分に磨耗が見られることから転用碗と考えられよう。8の底部には粗い亀目状の敷物の圧痕が残される。

土器以外にはカマド南方から鉄器(1)が1点出土している。

時期 土器群の様相から7～8期の遺構と考えられる。

(3) 第3号住居址 (第6図、図版2)

位置 A区 平面形 隅丸長方形 規模 長400×短292×深25cm  
床面積 (10.1)㎡ 長軸方位 N-0° カマド なし

遺構 黄褐色土中に構築される。南側1/3の壁を失うが、床面はほぼ完存する。覆土は礫混じりの暗褐色土、茶褐色土が堆積する。火処と思しき焼土面は見られないが、北西隅に遺物、礫の集中があり、あるいはカマドの残痕かとも考えられた。その他床面の大半は南側に存する大形ですり鉢状に掘り込まれる円形ピット(P1)、それに接して床面中央に掘り込まれる楕円形のP2で占められており、通常の住居址とは性格の異なる建物を暗示している。なおこれらのピットの覆土は黒色を呈し、礫が多く見られた。

遺物 北東隅を主体に床面、ピットから軟質須恵器杯、須恵器壺等の破片が出土しているが、小破片のため図示するに至らない。

時期 遺物に乏しいが、軟質須恵器の存在から7～8期の遺構と考えたい。

(4) 第4号住居址 (第7図、図版3)

位置 A区 平面形 (方形) 規模 長428×短?×深20cm  
床面積 不明 南北軸方位 N-0° カマド 不明

遺構 黄褐色土中に構築される。壁は東半を失い、床面も全貌は不明である。覆土は暗褐色土が主体で礫を混じえる。床面は平坦だが特に堅緻な部分は認められない。床面上の施設もカマドを含め検出されなかった。なお西壁中央部に接して覆土中に中世の遺構が存したものと考えられ、西壁に接して銭が1点出土した(5)。

遺物 出土量は大変少なく、中世の遺構に係る銭として景徳元寶1点(5)の他、図化提示できるものはない。

時期 わずかな遺物から平安時代7～8期頃と推察される。

(5) 第5号住居址 (第7図、図版3・4)

位置 A区 平面形 隅丸方形 規模 長364×短324×深26cm  
床面積 8.5㎡ 主軸方位 N-0° カマド 北壁中央・石組

遺構 黄褐色土中に構築される。東壁はわずかに残存している。覆土は礫混じりの黒色土が中央部の上層に、炭片を含んだ暗褐色土が下層に堆積し、カマド～北西隅にかけての床面上に礫の集中が見られる。

床面は平坦でカマド周辺は堅緻な面をなす。カマドは袖石が残存し、天井構築材は内部に落ち込んで(あるいは意図的に置かれて)いた。火床面は良好な焼土面を残し、支脚石が中央に見られる。カマド東側には浅い楕円形の貯蔵穴があり、底面中央に大形の平石、周囲に土師器・黒色土器A・

軟質須恵器の杯類が置かれていた(15・16・19・22～24)。その他、南東隅付近に浅い楕円形ピットが、また東壁には壁外に張り出してやや深い楕円形ピットがある。後者は黒色の覆土に礫を混じえ、本址を切る土坑の可能性もある。その他主柱穴と思しきピット等は見当たらない。

遺物 カマド内(20・29～31)、貯蔵穴、礫集中付近から完形あるいはそれに近い遺物が多数出土した。土器類には土師器杯(18～20)・椀(25)・小型甕(29)・甕(30・31)、黒色土器A杯(16・17)・椀(21～24)、軟質須恵器杯(15)、須恵器杯・四耳壺(28)、灰釉陶器皿(27)・段皿(26)等の器種器形がある。19は灯明に用いたのか、口縁部にタール状の付着物が見受けられる。

時期 土器様相から8期の遺構と考えられる。

#### (6) 第6号住居址(第8図、図版4・5)

位置 A区 平面形 方形 規模 長452×短386×深42cm

床面積 13.7m<sup>2</sup> 主軸方位 N-80°-W カマド 西壁中央

遺構 黄褐色土中に構築され、東壁を失う。覆土は礫混じりの黒褐色～暗褐色土が堆積し、西壁下では地山の流入土が観察された。覆土中への礫の投げ込みは見られなかった。

床面は平坦で全体に堅緻な面をなす。カマドは中央やや南に存在し、薄く板状に割られた砂岩を袖石に用いている。その他の構築石材は廃絶時にカマド南脇に置きかためられている。火床面は良く被熱しており、支脚石が残存する。他の住居址に比較してやや大きいカマドである。本址では明瞭に柱穴が捉えられ、P1～4が主柱穴と考えられる。

遺物 北壁中央下のP6上面から石製巡方(43)が1点出土した。カマド内には黒色土器A杯(32・35)、刀子3点(2～4)が遺棄され、右袖脇の床面には土師器杯2点(33・34)・小型甕(39)、やや北に離れて珍しい形態の土師器盤(38)が置かれていた。さらに南西隅に置かれたカマド石材と南壁の間には須恵器長頸壺(40)が壁上あるいは石材の上に置かれていたものが転落した状態で、カマド南脇の隙間には土師器甕(45)が横倒しに出土した。主柱穴P1脇にも黒色土器A椀(36)が置かれていた。他、覆土中からも比較的多くの土器片を得た。

土器類の器種は土師器杯(33・34)・鉢(37)・盤(38)・小型甕(39)・甕(45)・羽釜(42)、黒色土器A杯(32)・椀(35・36)、須恵器長頸壺(40)・短頸壺(41・43・44)・甕等が見られる。

時期 土器様相から8期に帰属する遺構と捉えられる。

#### (7) 第7号住居址(第8図、図版5)

位置 A区 平面形 隅九長方形 規模 長404×短352×深32cm

床面積 10.7m<sup>2</sup> 主軸方位 N-100°-W カマド 西壁やや南・石組

遺構 黄褐色土中に構築され、四壁とも完存する。覆土は礫混じりの黒褐色～暗褐色土が堆積する。西～北壁下では地山の流入土が観察され、覆土中への礫の投げ込みは見られなかった。

床面は平坦で非常に堅緻である。カマドは両袖、火床面、支脚石を残し、天井構築材はカマド周囲の床面に散乱している。柱穴はP2・3が該当し、カマドの主軸線上に並ぶやや特異な在り方である。その他南西隅には浅い楕円形のピットがあり、また北東隅には深さ45cmに達する大形の楕円形ピットがある。後者の覆土は下層ほど砂利質で、上層は黒色の粘性を帯びている。

遺物 全体にカマド周辺から南壁沿いに遺物が多い。カマド手前の床面には構築材の礫と混在して土師器杯(51・52)が4枚重ねて置かれ、カマド内にも多くの土師器甕片(56・57・59)、黒色土器A杯(49)が遺棄されていた。また南壁下には同一個体の灰軸陶器短頸壺(60)の破片が東西の2ヶ所に集中し、さらにその間に土師器杯(50)が1点遺されていた。

土器類の器種は土師器杯(50・51)・皿(47)・甕(56～59)、黒色土器A杯(48・49・52)・碗(53)、軟質須恵器杯(46)・壺(55)、灰軸陶器碗(54)・短頸壺(60)がある。52は見込み部分に焼成後「本」の刻書がなされている。

時期 土器様相から8期の遺構と考えられる。

#### (8) 第8号住居址(第7図、図版6)

位置 A区 平面形 方形 規模 長352×短326×深26cm

床面積 ?㎡ 東西軸方位 N-90° -W カマド 不明

遺構 黄褐色土中に構築され、東壁を失う。覆土は礫混じりの黒色土が堆積し、礫の投げ込みは観察されない。床面は平坦で良好に検出され、中央部では堅緻な面をなす。中央東寄りの床面には直径70cm内外の円形ピットがあり、すり鉢状に掘り込まれている。内部には炭を多く含んだ暗褐色土が堆積し、被熱した角礫や黒色土器Aの杯等が遺存していた。カマドの可能性も考えたが、位置的に疑問が残る。このピットの周囲には円形の小ピットが4基あり、P1～3は主柱穴の可能性もある。その他、北西隅にはやや大形の楕円形のピット(P6)があり、深さ32cmを測るものの内部に遺物は見られない。

遺物 出土量は少ないが、P3から床面中央にかけて比較的集中する様子が窺えた。土器類は土師器甕・小型甕(73)、黒色土器A杯(71)・碗(72)等がある。

時期 出土土器の様相から7～8期の遺構と推定される。

#### (9) 第9号住居址(第9図、図版6)

位置 A区 平面形 不整形 規模 長436×短432×深23cm

床面積 (15.8)㎡ 主軸方位 N-100° -W カマド 西壁中央やや南・石組

遺構 黄褐色土中に構築され、東半の壁を失うものの床面はほぼ完存する。北西隅はやや歪んだ形態をなしている。覆土は礫混じりの黒色～暗褐色土が堆積し、礫の投げ込みはあまり観察されない。床面は良好に検出されたが、それほど堅緻な面はなさない。カマドは残りが悪く、わずかな袖

の張り出しと火床面が認められた。床面上には大小5基の円形ピットが検出されたがいずれも浅く、柱穴とは捉えにくい。

遺物 カマド内より土師器甕・小型甕、黒色土器A杯(61)、カマド南側より黒色土器A杯(63)が出土した他まとまった出土はない。土器類の器種は土師器杯(64)・甕(67)、黒色土器A杯(61～63)・碗(65)、灰軸陶器碗(66)がある。

時期 土器から見て8期の遺構と推定される。

#### (10) 第10号住居址 (第9図)

位置 A区 平面形 (方形) 規模 長416×短?×深18cm

床面積 不明 南北軸方位 N-10° -E カマド 不明

遺構 黄褐色土中に構築され、東半部の壁・床を失う。床面は平坦で明瞭だが、堅くはない。覆土は暗褐色土が堆積する。礎の投げ込みは見られない。カマドは東壁に存するものか、残存部分には見当たらない。北壁下床面には円形のやや大きなピットが検出されたが、掘り込みは浅い。

遺物 覆土内より少量の土器片が出土したのみで、図示するに至らない。

時期 わずかな遺物から7～8期頃の遺構と判断される。備考 土36を切る。

#### (11) 第11号住居址 (第9図)

位置 A区 平面形 隅九方形 規模 長424×短360×深20cm

床面積 不明 主軸方位 N-105° -W カマド 西壁中央南寄り・石組

遺構 黄褐色土中に構築され、東壁を失う。床面は平坦で、明瞭に検出された。覆土は暗褐色土が堆積し、礎等の投げ込みは見られない。カマドは火床面のみ残り、袖は失われる。北壁中央下の床面上には炉址状の浅い円形ピットがあり、土師器甕片(70)とともに焼土が堆積していた。またピットの周囲には大小の礎が存在し、本施設に関するものと推察される。その他床面上から検出されたP1・2・3・5は掘り込みが浅いものの、位置的に見て柱穴であろう。

遺物 炉址状のピット内より土師器の甕片がまとまって出土した以外、大変少ない。土器類は土師器小型甕(69)・甕(70)、軟質須恵器杯(68)等の器種器形が見られる。

時期 平安時代7～8期

#### (12) 第12号住居址 (第9図)

位置 A区 平面形 隅九方形 規模 長356×短356×深30cm

床面積 (10.4)m<sup>2</sup> 東西方位 N-85° -W カマド 西壁中央?

遺構 黄褐色土中に構築され、西壁下の床面を後世の配管埋設に伴い失う。床面は平坦で、明瞭・堅緻に検出された。覆土は黒褐色～暗褐色土が堆積し、礎等の投げ込みは見られない。

カマドは西壁中央に存したものと推察されるが、擾乱で破壊されており不明である。支柱穴はP 2・4・6の3基で、北西の1基は擾乱で失われる。P 2・4は壁外に張り出す形態である。

遺物 南壁下床面に須恵器短頸壺(79)が遺存していたが、出土遺物は非常に希薄である。

土器類は土師器小型甕(77)・甕(80)、黒色土器A杯(74)・碗(75・76)、須恵器短頸壺(78・79)が出土している。

時期 平安時代7～8期

## 2 竪穴状遺構

### 第1号竪穴状遺構 (第10図)

位置 A区 平面形 不整形

規模 長308×短304×20cm 底面積 6.7m<sup>2</sup>

遺構 黄褐色土中に構築される。覆土は暗褐色土が堆積するが、漸移的に変化するため、壁・底面は明瞭に検出されなかった。また後世の開墾、耕作により非常に堅く締まっており、掘り下げに難渋した。

底面は中央部を窪ませながら全体に東へ傾斜して下がっており、大小の礫が遺存していた。底面にピット等の施設は見られない。

遺物 覆土中、底面からの遺物は全く出土せず、遺構のあり方と合わせその性格は不明である。

時期 不明 備考 土50に切られる。

## 3 土坑 (第11・12図、第2表、図版7)

### (1) 形態

検出総数50基のなかには様々な形態が存在する。これらについて詳述すると冗長となるため、ここでは特徴ある形態毎に分類を行い、概要を述べ、個々のデータについては一覧表に譲る。

土坑の大半は概ね以下の4つの類型に分けることが可能である。

a類 直径60～100cm前後の円形ないし楕円形プランで、内部に礫や遺物を伴うもの。とりわけ土11・21は角礫の集中が著しく、意図的に集積させている。底面は平坦で覆土も炭片等を含む場合が多い。

b類 直径50～90cm、円形プランの単純な形態。覆土中に礫等ほとんどない。底面は平坦ないしすり鉢状を呈する。

c類 長径70～248cm、楕円形基調の単純な形態。皿状の断面形態を呈する。特徴に乏しく、不整形な形態も多い。

d類 いわゆるロームマウンドの可能性が高いもので、三日月形や長楕円形のプランをなす。

各類型は数量的にはc・d類が最も多く、またc類には人為的掘り込みでない、腐植土のシミを



土坑として捉えたものがかなり存在すると考えられる。

## (2) 時期・分布

土坑の分布状況を見ると、A地区、平安時代の住居址群内、B地区1住付近から南側一帯に集中することが観察される。すべての遺構から確実な時期決定となる遺物が出土しているわけではなく、むしろ希なため断定できないが、A地区の一群は確実に遺物を伴う土45～48を筆頭に平安時代、B地区は遺構内外の遺物のあり方から縄紋時代に構築、あるいは形成されたものが大半であると考えられる。

## 4 ビット (第4・5図)

合計12基のビットが検出されたが、特に建物址を構成したり、遺物を多数伴ったりといった特徴に欠ける。明らかな柱穴と言えるものはほとんどない。従ってその性格は判然としなが、分布は土坑と傾向が概ね一致し、その形成時期も共にするものと考えられる。

## 5 溝状遺構

### (1) 第1号溝状遺構 (第4・5・10図、図版7)

A・B両地区の西寄りに位置し、南北方向、すなわち深沢川に臨む段丘と平行に走る。A地区では幅1～4m、底面は浅く平坦であるのに対し、B地区では幅1～2m、中央部が深くなる断面形態で流路的な様相を呈する。また後者程覆土が黒色に近く、遺物や礫の包含量も多い。位置、走向から同一遺構と判断したが、特徴をやや異にする点で疑問が残る。

时期的には縄紋、奈良・平安時代の遺物を含み、後者をその形成時期と看做したい。また段丘の頂部を走ることから自然形成とは考えにくく、人為的な遺構と判断したい。なお出土遺物、とりわけ土器類については図化可能なものがなく、提示し得ない。

### (2) 第2号溝状遺構 (第5・10図)

B地区東端より検出された。幅1.2～1.7mで大きく弧を描いて調査区外へ続いている。掘り込みは明瞭で、U字形の断面形を呈する。覆土は黒色を呈し、西側において須恵器片と共に多数の角礫・円礫を包含していた。

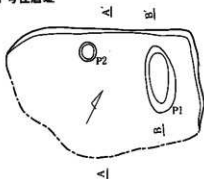
当初その形状から古墳の周溝の可能性も考えられたが、溝内より出土する須恵器から奈良～平安時代に構築された人為的な遺構と判断した。その性格は全貌が明らかでないため不明といわざるを得ない。

出土遺物は黒色土器A杯、須恵器杯(81)等があり、黒色土器A杯(82)はほぼ完形に復元された。

第2表 和田遺跡 土坑一覽表

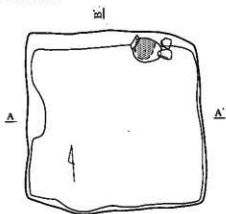
No.	坑口 縦×横×深 (cm)	形状	土質	位置	No.	坑口 縦×横×深 (cm)	形状	土質	位置
1	68×40×29	楕円形			26	76×64×15	円形	b類	
2	196×92×35	不定形	d類		27	72×44×15	不整楕円形		
3	92×52×5	不整楕円形			28	184×128×23	不定形	c類	
4	192×96×31	不定形	d類		29	268×112×79	不定形	d類	
5	112×92×17	楕円形	c類		30	140×120×47	不定形	c類	
6	100×88×16	方形			31	132×72×24	不整長方形	c類	
7	224×104×18	不整楕円形	d類		32	180×136×80	不定形	d類	
8	96×84×22	不整円形			33	80×64×16	不整円形	b類	
9	80×60×15	不整楕円形	c類		34	108×64×45	不整楕円形	d類	
10	168×108×19	隅丸方形			35	100×60×18	不整楕円形	c類	
11	92×60×25	不整楕円形	a類		36	92×48×30	楕円形	d類	10住より古
12	100×80×43	不整長方形	c類		37	44×44×14	隅丸三角形		
13	76×64×22	楕円形	a類		38	120×44×32	楕円形	c類	
14	109×44×35	不整楕円形	d類		39	72×52×16	楕円形	b類	
15	72×60×19	楕円形	b類		40	56×40×44	楕円形		
16	280×156×84	不定形	d類		41	52×36×9	楕円形		
17	108×68×32	不整楕円形	c類		42	60×36×26	楕円形		
18	160×96×12	楕円形	c類		43	56×44×15	楕円形		
19	64×56×14	円形	a類		44	116×100×23	円形	a類	
20	100×76×16	方形		1住より古	45	100×64×25	隅丸三角形	a類	
21	100×88×38	不整円形	a類		46	140×84×27	隅丸三角形	d類	
22	60×40×37	楕円形			47	68×52×15	楕円形	b類	
23	248×160×24	不整楕円形	c類		48	88×80×37	円形	b類	
24	164×96×31	不整長方形	d類		49	180×92×51	不整円形	d類	
25	96×92×11	不定形			50	208×94×41	不整楕円形	d類	

第1号住居址

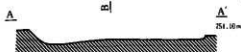
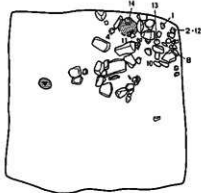


I : 2(1A)B  
II : 2(1A)B

第2号住居址

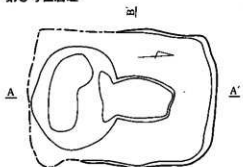


遺物出土状況



I : 2(1A)B  
II : 3(1A)B  
III : 2(1A)B

第3号住居址



遺物出土状況

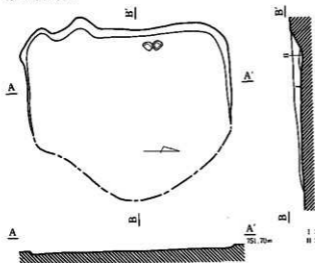


I : 2(1A)B  
II : 7(1A)B  
III : 19(1A)B, KM

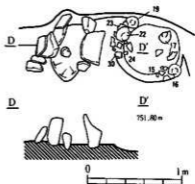


第6図 和田遺跡 第1~3号住居址

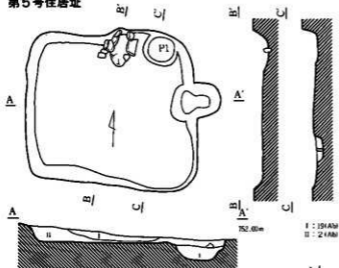
第4号住居址



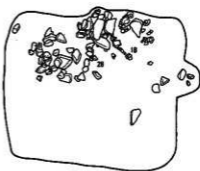
第5号住居址カマド



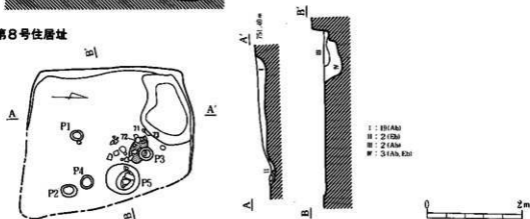
第5号住居址



遺物出土状況

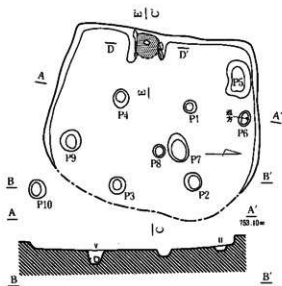


第8号住居址

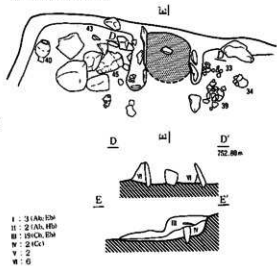


第7図 和田遺跡 第4・5・8号住居址

第6号住居址

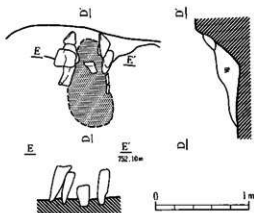


カマド・遺物出土状況

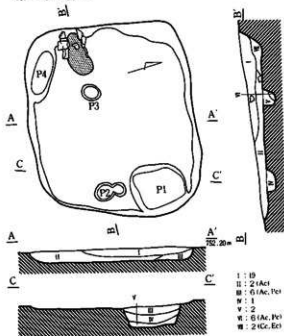


- I : 3 (Aa, Eb)
- II : 2 (Aa, Eb)
- III : 19 (Ca, Eb)
- IV : 2 (Ca)
- V : 2
- VI : 6

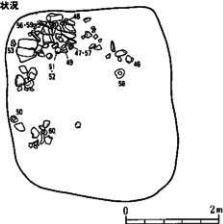
カマド



第7号住居址



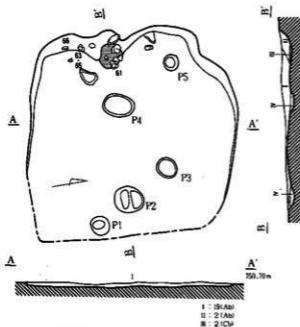
遺物出土状況



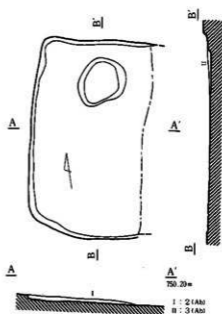
- I : 19
- II : 2 (Ac)
- III : 6 (Ac, Pb)
- IV : 1
- V : 2
- VI : 6 (Ac, Pb)
- VII : 2 (Ca, Ec)

第8図 和田遺跡 第6・7号住居址

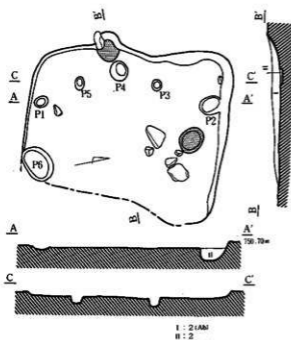
第9号住居址



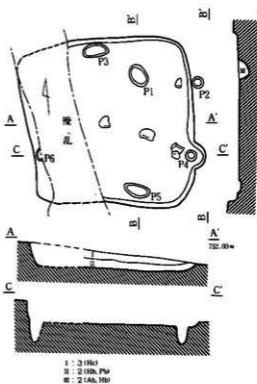
第10号住居址



第11号住居址



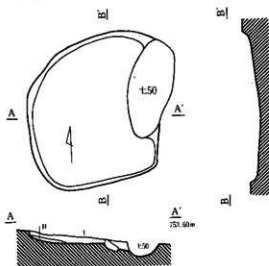
第12号住居址



第9图 和田遺跡 第9~12号住居址

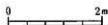
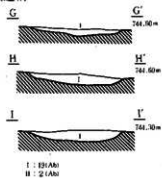
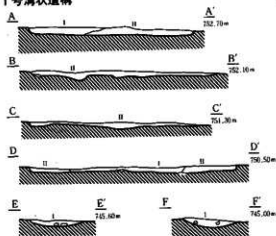
第1号竖穴状遺構

遺物出土状況

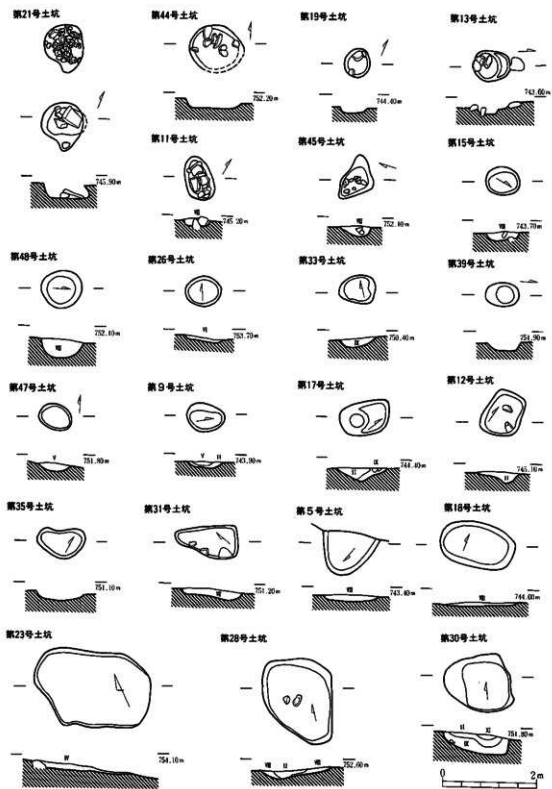


第1号溝状遺構

第2号溝状遺構

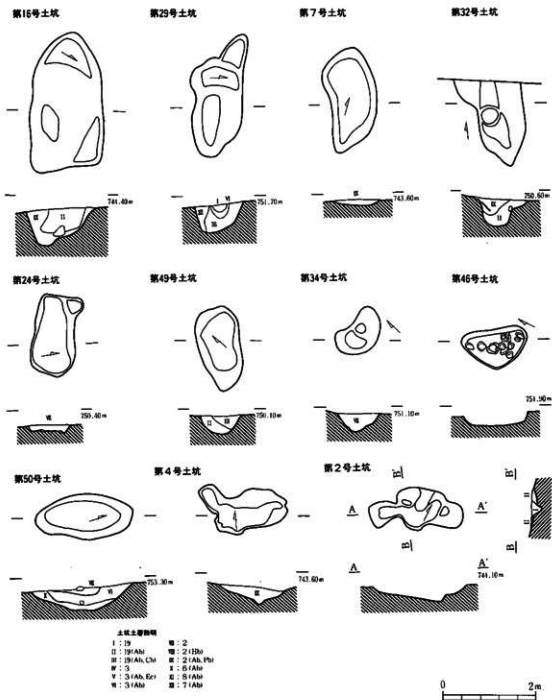


第10図 和田遺跡 第1号竖穴状遺構・溝状遺構



第11図 和田遺跡 土坑(1)





第12圖 和田遺跡 土坑(2)

### 3 遺物

#### 1 土器 (第13~17図、図版8・9)

今回の調査では縄紋時代、および平安時代の土器類が出土している。そのうち縄紋土器については磨滅した小破片ばかりで量的にも少なく、図示できるものはない。主体となるのは住居址出土の平安時代のものである。

ここでは松本平の奈良・平安時代土器編年として定着している長野県埋蔵文化財センター編年に依拠しながら土器群の内容について概観したい。

#### (1) 器種・器形

主体となる住居址出土土器群には以下の器種器形が認められる。

土師器 杯A(19等)・碗(25等)・皿(47)・盤(38)・鉢(8・37)・小型甕D(69等)・甕B(45等)・  
羽釜(或は甌、42)

黒色土器A 杯A(2等)・碗(24等)・皿(1)・皿B(65)・鉢A(9)・小型甕D(77)

須恵器 杯A・長頸壺A(40)・短頸壺(44等)・甕D(28)

軟質須恵器 杯A(15等)

灰軸陶器 碗(66等)・皿(27)・段皿(26)・短頸壺(60)

これらの大半は一般的な特徴を備えているが、一部長野県埋蔵文化財センターによる分類では認められなかった器形として土師器皿・鉢・盤、黒色土器A皿が存在する。皿はA形態から高台を取り去った形態で、あるいは浅い杯Aと理解すべきかもしれない。昨年報告の宮の上・原畑遺跡でも認められた形態である。鉢は2形態が認められる。一つは黒色土器Aの鉢Aとほぼ同形態のもので、体部の開きが直線的であったり、ロクロ目がやや粗い等の特徴を挙げることができる。もう一つは土師器小型甕Dと同一の技法によりながら口径が大きく外開する形態となるもので、岡田町遺跡、宮の上・原畑遺跡に類例を求めることができる。

#### (2) 土器群の組み合わせとその時期

各遺構における器種・器形の構成を見ると、以下の傾向を認めることができる。

- ・黒色土器A杯・碗が組成の主体となる。
- ・土師器杯・碗を保有する遺構が存在する。
- ・須恵器杯A・Bがほとんど伴わない。
- ・軟質須恵器杯Aが伴う。
- ・灰軸陶器碗・皿・段皿が伴う。

以上の特徴を編年に照らすと、概ね7~8期、9世紀後半に位置付けられ、土師器杯・碗類の伴

う5・6・7・9住出土土器群については確実に8期の様相を示すものと受け取られる。またその他の土器群についても食器における須恵器の割合が著しく低く、8期に下るものが多勢と考えられよう。

次に岡田本郷地区の当該期に共通して見られる特徴として、土師器・黒色土器Aの量・種類の豊富な反面、灰釉陶器が少ない点を挙げておく。宮の上・原畑遺跡報告でも指摘したが、やはり当地における土器生産と密接に関わる現象と捉えておきたい。

住居址出土土器群以外では溝2から土師器・黒色土器A・須恵器が出土している。細片が多く固化できたのは2点のみだが、須恵器杯A・B類が存在しており、住居址出土土器群より古い様相と考えられる。

## 2 金属製品 (第17図、図版10)

鉄製品が4点、銭貨2点が出土している。

1は2住から出土した棒状工具で、両側を破損しているため器種は特定できない。下方が方形断面で茎(なご)状を呈しているのに対し、上方が比較的偏平な断面を有してわずかに反っていることから鉋の可能性が考えられる。

2～4は刀子で、いずれも6住からの出土である。2は身の部分で、基部は破損により不明である。棟・刃側はともに直線的で、刃側を徐々に狭めながら切先を形成している。3は両側を破損しているが、身～茎の部分である。棟側はわずかに斜めに立ち上がる関が認められる。刃部の最大幅は関の部分にあり、徐々に刃幅を狭めながら切先に至ると推定される。4は基部で、3と比較して鋭い茎尻を呈している。莖被が観察されないため刀子として扱ったが、断面が厚みを帯びていることから鋸の可能性も考えられる。

5は4住から出土した景德元寶(初鑄1004年)で、直径24.8mmを計る。6は検出面から出土した嘉祐通寶(初鑄1056年)である。金属風化が激しく軟質化し、周縁を部分的に欠いているが、直径24.1mmを計る。

## 3 石製品 (第19図、図版10)

6住から石製帯飾りの巡方が1点出土している。粘板岩製のほぼ完形品で、下面の縁辺部をわずかに破損している。寸法は上面が36.8×35.3mm、下面が39.0×37.8mm、厚さ7.6mmを計る。

上面は丁寧に研磨されており、器面の色調が側・下面の暗灰色に対し、黒味が強い黒灰色を呈している。製作時の研磨痕はほとんど観察されないが、表面には不定方向の線状痕が多数観察される。この痕跡が巡方の着装時についた傷か、廃棄-発掘-整理の過程でついた傷かは特定できない。

側面は上面と同様に丁寧に研磨が行われており、研磨痕はほとんど観察されない。下面と接する部分には、下面側から施された整形加工のうち深く入った剥離面の一部が残存している。また、側

面と上・下面の間には研磨によって0.4～1mm程度に面取りされた部分が観察される。

下面は整形加工の剥離が深く入ったため、研磨されずに残された2枚の剥離面が観察される。研磨は他面と比較して粗く、長辺に対してわずかに右下がりの方向で行われている。四隅には内部で連結している2個一對の小孔が配置されている。三間沢川左岸遺跡(松本市)出土の巡方では、孔内に帯を固定するための銅製の針金が遺存しており、本遺跡の巡方も同形式のものと考えられる。

#### 4 石器 (第18・19図、図版10)

定形的な石器が42点出土している。このほかに2次加工を含む黒曜石・チャート等の剥片類が出土しているが、これらについては報告を割愛する。なお、本遺跡の石器群については隣接する桜田遺跡の石器群と一括して理解するべきものと考えられる。

実測図の右下には上段に通番、中段に出土地点、下段に石質を記載しており、文中の石器番号は通番に対応している。なお、石質の一部については太田守夫氏にご教示をいただいている。

##### (1) 石 鏃 (1～26)

26点が出土している。石材は黒曜石が16点、チャートが10点である。破損により基部が失われている8・26と未製品の14を除くと、すべて無茎鏃である。基部の形態には凹基が20点、円基が2点、平基が1点が認められる。

凹基は基部の挟り込みが全長の1/4未満の浅いものがほとんどである。なかでも6・10・18はごく浅い挟り込みで、平基鏃に近い形態を有している。特徴的なものとして、基部の挟り込みが深い鍔形鏃(2)がある。

円基はいずれも製作途上の未製品の可能性が考えられる。9は下端に平坦な自然面を残すため、基部は不整形で厚みを帯びている。12は整形加工が粗いため、両側辺は直にはならず不連続に外湾し、横断面は厚い。

平基の25は左側辺が内湾し、右側辺に対して基部が厚みを帯びていることから、片脚か片側辺が破損した凹基鏃を横位にして、破損面に新たに基部を作り出した可能性が考えられる。

##### (2) 石 鏃 (27～30)

4点が出土している。石材はすべて黒曜石である。27は完形品で、縦長剥片の両側縁に両面加工を施して鏃部を整形している。28は完形品で、最大幅が頭部寄りにあり、そこから下部に両面加工を施して鏃部を整形している。背面に自然面を残し、腹面には比較的大きなネガティブな剥離面が観察されることから、残核を素材にしたものと推定される。

29は横断面が三角形を呈する縦長剥片を素材とし、両面加工で鏃部を整形している。しかし、鏃部の先端が平坦面を有して尖鋭でないことから未製品の可能性も考えられる。30はつまみを有する鏃で、鏃部の大半は破損により失われている。背面が自然面の不定形ないし縦長剥片を素材とし、片面加工でつまみ部分を整形している。

### (3) ビエス・エスキーユ (31)

1点が出土している。石材は黒曜石で、平面形は方形または長方形を呈する。平坦な自然面を打面にもつことから、縦断面は楔形を呈している。左側縁は直線的に調整されているが、右側縁は破損により失われている。

### (4) 石 匙 (32)

1点が出土している。頁岩製で、刃部の先端部が破損している。縦長剥片を素材とし、つまみは剥片の末端付近に作り出されており、刃部との位置関係は斜形である。刃部は上側縁にあり、腹面側から片面加工で片刃の直刃が作り出されている。また、下側縁は中央部に自然面を残すものの、両面加工が施され比較的鋭利な断面を有することから刃部の可能性はある。

### (5) スクレイパー (33~36)

4点が出土している。石材は33が粘板岩(ホルンフェルス)、34~36がチャートである。

33は片側を大きく破損しているが、背面の下部と上端に自然面を残していることから、いわゆる礫器と推定される。上端が最大幅となるため、縦断面は楔形を呈している。刃部調整は背面側から片面加工が施され、片刃の外湾刃が作り出されている。34はチャート製で、刃部の残片である。腹面側から片面加工を施して、片刃状の刃部が作り出されている。35はチャート製で、両極剥離された剥片を素材としている。刃部は2側縁に認められ、上側縁は片面加工の直刃、下側縁は両面加工の外湾刃を有している。なお、下側縁が不整で、細部調整が粗いことから未製品の可能性が考えられる。36はチャート製で、完形品である。整形加工が中央まで及んでいるため素材剥片は不明であるが、下端に自然面を残している。刃部は片側縁に両面加工で、両刃の外湾刃が作り出されている。

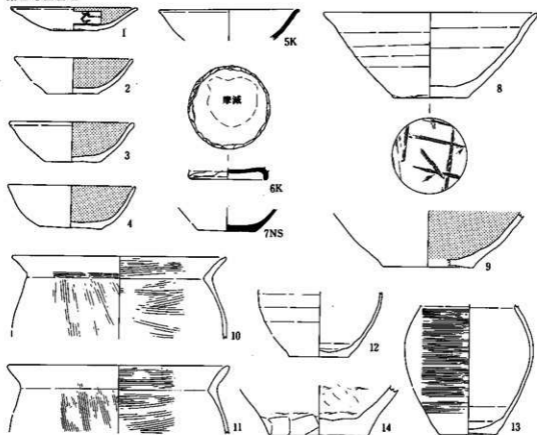
### (6) 打製石斧 (37・38)

2点が出土している。37は頁岩製で、背面に自然面を残す大形の横長剥片の周囲に、部分的に両面加工を施しただけの粗製品である。整形・刃部加工は粗く、不整形な刃部を有することから、未製品ないしはスクレイパーの可能性も考えられる。38は粘板岩製で、円刃と推定される刃部の残片である。

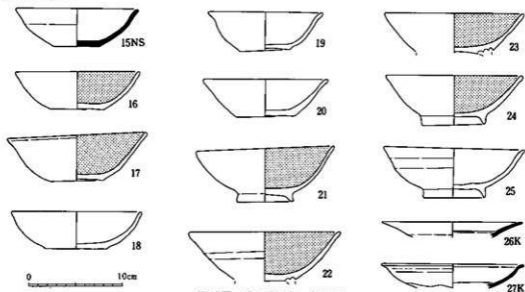
### (7) 凹・敲・磨石 (39~42)

4点が出土している。39は安山岩の楕円礫を素材とし、両面の中央に各2個の凹部を有する完形品である。40は砂岩の比較的偏平な円礫を素材とし、上面には凹部と磨面、下面に凹部を有する完形品である。なお、磨面は凹部に接した狭い範囲に観察され、平坦面を有している。上面の凹部は大きく深い、下面の凹部は浅いアバタ状のくぼみがまとまったものである。41は凝灰岩製の円礫を素材とし、片面に磨面を有する完形品である。42は砂岩製の方柱状の礫を素材としている。片側を破損しているが、表面に1個の凹部、裏面に2個のごく浅いアバタ状の凹部を有している。

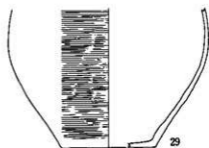
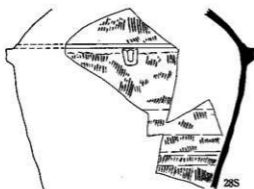
第2号住居址



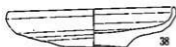
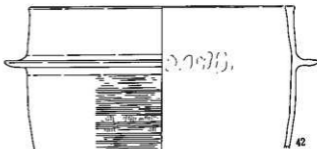
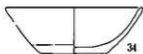
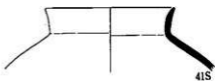
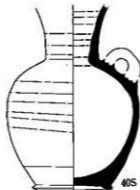
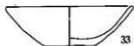
第5号住居址



第13图 和田遺跡 土器(1)

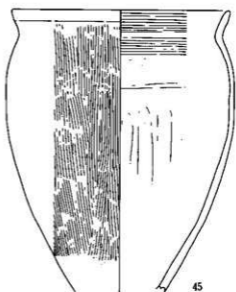
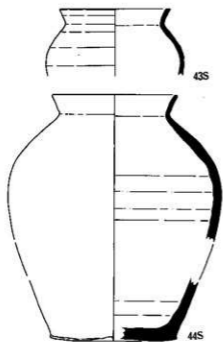


第6号住居址

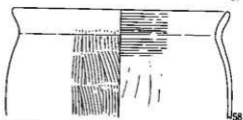
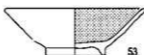
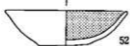
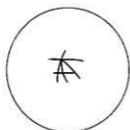
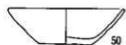
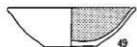
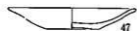


0 10cm

第14圖 和田遺跡 土器(2)

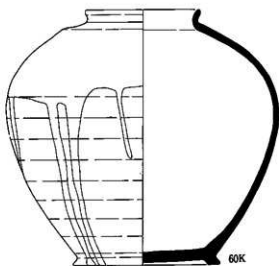
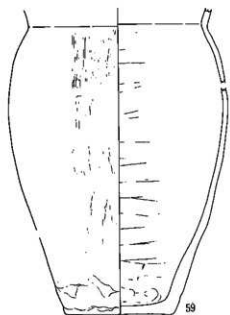


第7号住居址

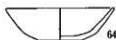


第15図 和田遺跡 土器(3)



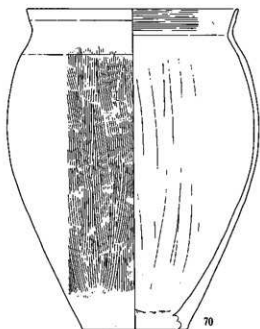


第9号住居址



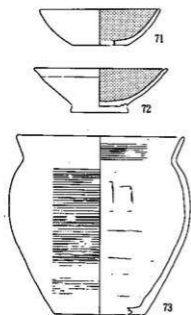
0 10cm

第11号住居址

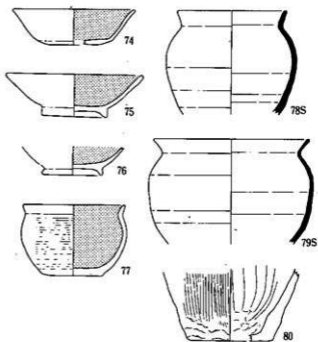


第16图 和田遺跡 土器(4)

第8号住居址



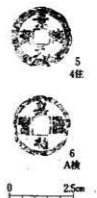
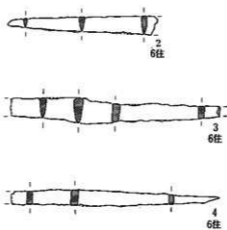
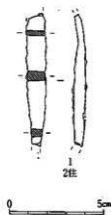
第12号住居址



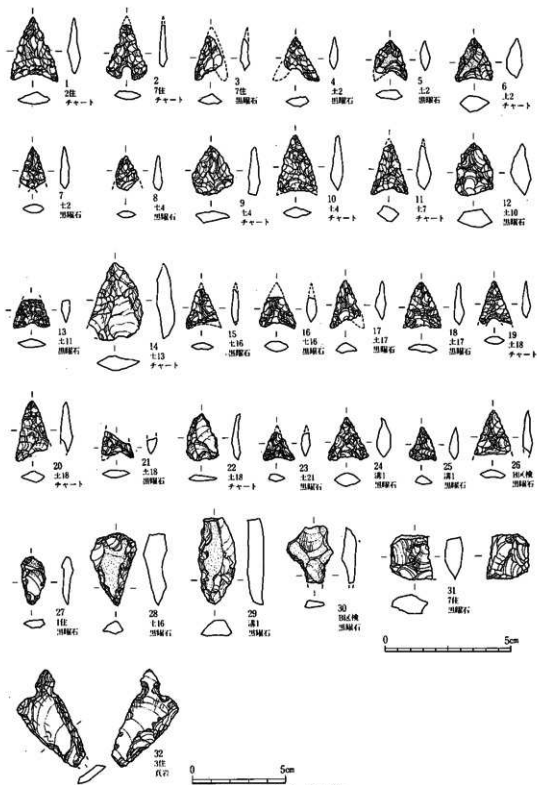
第2号溝状遺構



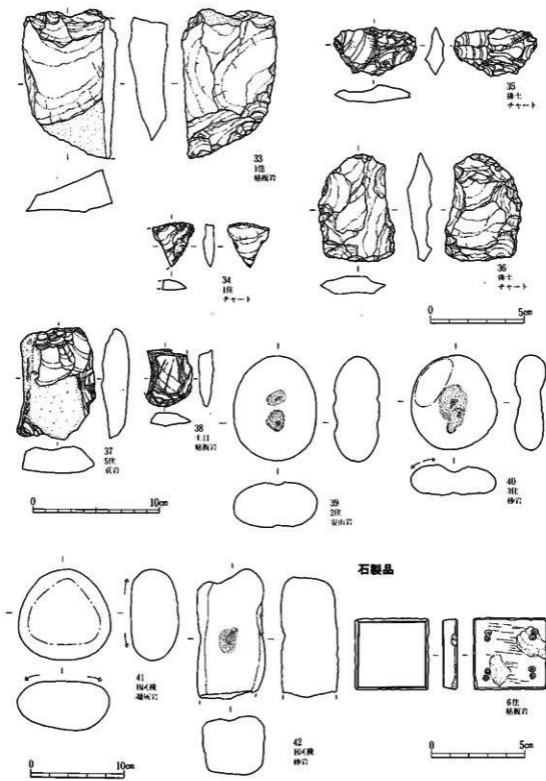
金属製品



第17図 和田遺跡 土器(5)・金属製品



第18回 和田遺跡 石器(1)



第19図 和田遺跡 石器(2)・石製品

## 4 まとめ

今回の調査では当初縄紋時代の集落址を想定して調査を行ったものの、結果的には平安時代の集落址を検出することとなった。

### 縄紋時代の遺構・遺物について

B地区南部を中心に住居址・土坑が検出された。おそらく調査区南側へ広がりを見せるものと考えられる。土器の出土がほとんどないため時期決定に苦しむが、石器の特徴等を考慮すれば早期末～前期初頭に位置付けられるものと判断され、南接する桜田遺跡と一体の遺跡と捉えられよう。なおA地区をはじめとする北側は居住域としての利用は認められないものの遺物は散在しており、生産活動の場としての利用も考えられよう。

### 平安時代の遺構・遺物について

整理の結果集落址は9世紀末のごく小期間に営まれた集落であることが判明した。集落は山麓沿いに東側へと展開してゆく模様で、地形的に安定しているにもかかわらず南側への広がりは見えない。住居址は大形建物こそ検出されなかったものの、6住において規模の卓越、確固とした柱穴の存在、石製巡方の出土等が認められ、位置的にも傾斜面上方にあることから中心的役割を果たしたものと受け取られる。集落南側に離れて存在する2・3住の2棟のうち3住についてはカマドがなく、床面の大半をすり鉢状の土坑が占めており、居住施設と言うよりは何等かの作業場あるいは貯蔵の施設と考えた方が良くもしいない。

岡田本郷地区の古代集落のあり方については宮の上・原畑遺跡の報告書で述べたことがあり、7世紀末、塩辛遺跡に始まる居住活動の開始から奈良時代における南側、岡田町遺跡への集落の拡大、さらに平安時代に至りより南方の西裏遺跡への集落の移動と宮の上・原畑遺跡等への集落の拡散、9世紀末をもって各集落が急速に消滅するという現象を捉えた。

和田遺跡についてもこの流れの中で捉えることが可能で、集落の発生・消滅とその時期に宮の上・原畑遺跡との強い共通性が認められるのである。さらに出土土器のあり方も当該期の岡田本郷地区に通有のあり方を示しており、土器生産地における様相をよく現しているものと捉えられよう。

しかしながら本集落の生産基盤は一体何であったのだろうか。岡田本郷地区の他の集落址に比べ高所かつ傾斜の強い地形に営まれており、水稲の可耕地は周辺に求められそうにない。一方近在に東山道が通過していた可能性が濃厚で、遺跡と桜田遺跡を分ける現市道にそれを求める見解も存在する。今回の調査で道路そのものの確認をすることは不可能であったが、こうした官道とのかかわりで成立した集落との見方も外的外れではないように考えられ、道路そのものを含めた今後の調査が望まれるところである。

## IV 桜田遺跡の調査

### 1 調査概要

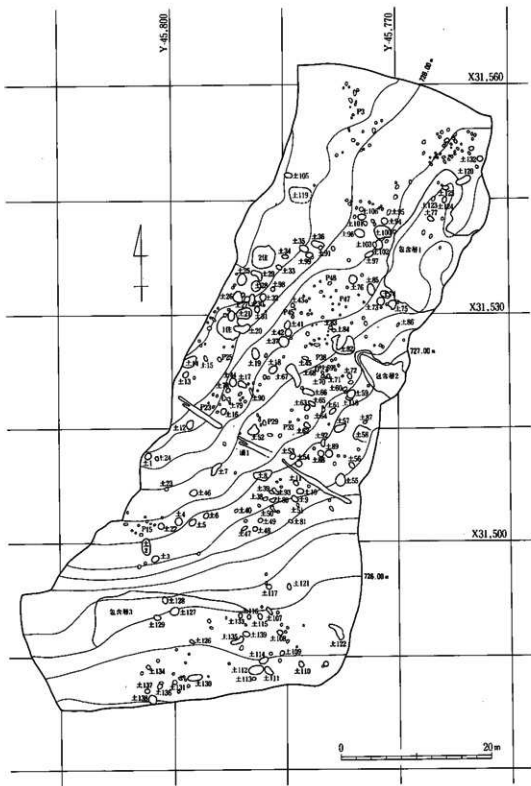
桜田遺跡は松本市稲倉に所在し、深沢川と女鳥羽川に挟まれた標高723~728mの段丘上、和田遺跡の南側に続く一連の遺跡である。遺跡の載る段丘からは女鳥羽川を見下ろすことができ、氾濫原まで落差8mの急崖をなしている。また河床との比高は10mを測る。また和田遺跡の載る段丘とは面が異なり、和田遺跡南端と当遺跡北端とは10mの段差を有している。

本遺跡もやはり過去において調査が実施されておらず、実態が不明であった。今回の調査にあたり、地図上では広範囲が遺跡として登録され、全面が県営ほ場整備事業の対象となったため、地形の状況からA・B2地点の水田を調査対象として選定、試掘調査を行った。その結果、B地点では何ら遺構・遺物も得られず、本地点には遺跡が及ばないことが判明した。一方A地点では各トレンチから縄紋時代の遺物を含む黒色土層が検出され、遺構の存在も確認された。従って遺構・遺物の確認されたA地点範囲を絞り、本調査を実施することとした。

調査の方法は和田遺跡に準じ、測量方法、座標も統一した。また調査区内に遺物包含層が広く検出されたため、グリッド法により遺構の確認をしながら掘り下げを行った。

調査の結果、ほぼ全域に縄紋時代早期末の遺構が存在することが判明、遺跡の主体部分が明らかとなった。詳細は以下のとおりであるが、報告に当たりピットについては煩雑になるため本文中で触れるもの以外の遺構番号は図中から省いた。

調査面積	2620㎡ (A地点のみ)	
検出遺構	竪穴住居址	2基 (縄紋)
	土 坑	139基 (縄紋)
	ピット	281基 (縄紋・近世)
	溝状遺構	1基 (近世)
	遺物包含層	3基 (縄紋)
出土遺物	縄紋時代	土器 (早期末・晩期) 石器 (有舌尖頭器・石鏃・石錐・ピエスエスキー ユ・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・ 磨石類・砥石) 石製品 (珠状耳飾)
	平安時代	土器類 (土師器・須恵器・灰軸陶器)



第20図 桜田遺跡 遺構配置

## 2 遺構

### 1 竪穴住居址

#### (1) 第1号住居址 (第21図、巻頭図版2)

位置 中央東端 平面形 楕円形 規模 長352×短325×深10cm

床面積 (8.5)m<sup>2</sup> 炉 南寄り・地床炉

遺構 暗黄褐色土中に構築される。床面はほぼ平坦だが、若干北方向に低まっており、炉の周囲では堅緻な面をなしていた。

炉は位置的にかなり南に寄り、124×72cmの楕円形の範囲を若干掘りくぼめ、火床としている。中央部の被熱が著しく、焼土・炭、および焼礫4個が遺存していた。また炉の外縁には3基の円形ピットが穿たれる。南側のピットはこれらの中では一番深く、内部からは焼礫1個とともに1個体分の深鉢破片がまとまって出土した(6)。柱穴は壁に沿って検出された小形の円形ピットが該当する。また北西では浅い不定形の掘り込みが見られる。

遺物 遺構の残存状況が良くないため総じて遺物出土量は少ない。傾向としては炉址内外からの出土が多く、周辺部程少ない傾向にあった。

土器は口縁部に刺突紋を施すもの(6)、内外条痕の行われるもの(7-9)、外面に縄紋を施すもの(1-5)等があるが、全形の窺い知れるものはない。

石器は尖頭器・石鏃・スクレイパー・磨石類が出土している。

時期 縄紋時代早期末葉 備考 土21・104、P19に切られる。

#### (2) 第2号住居址 (第21図、図版11)

位置 中央東端 平面形 円形 規模 長300×短288×深18cm

床面積 6.0m<sup>2</sup> 炉 なし

遺構 黄褐色土中に構築される。床面は若干南西方向に傾斜して低まるが、概ね平坦に構築される。特にタタキ状を呈する部分はないが、基盤の粘質土のため堅く締まっている。

覆土は上層が黒色土、下層に暗褐色土が堆積している。壁に沿って6基の小ピットが検出され、柱穴と捉えられる。炉と思しき焼土等は全く見られなかった。

遺物 覆土上層に少量の土器片・石器の他、微細な黒曜石片が多く見られた。しかし下層ではほとんど遺物が存在せず、床面に至っても同様であった。

土器はわずかに2点を図示し得たのみである(11・12)。いずれも縄紋を施す深鉢体部の破片である。石器は石鏃・石鏃・スクレイパー・が出土している。

時期 縄紋時代早期末葉



## 2 土坑 (第22~24図、第3表、図版12~15)

### (1) 形態

総数139基が検出され、本遺跡における遺構の主体をなしている。遺構個々のデータは表に示し、ここでは全体的な傾向について概観しておく。

土坑の形態は概ね以下の7類型に分類が可能である。

**a類** いわゆる集石炉である。土18・25が該当する。円形プラン、すり鉢状の掘り方で、内部に多量の焼石が伴う。底面~壁面は非常に強く熱を受けており、黒化した状態すら見受けられる。焼礫は壁・底面に接して比較的大きいものを整然と積み、内部により小形のものを詰める傾向が看取され、特に土25において顕著である。遺物はほとんど伴わない。

**b類** 大形の方形基調で、堅穴に近い形態のもの。土58・119が該当。底面は平坦で、土58では壁に沿ってピットが伴う。

**c類** 直径60~104cm、円形プランを基調とし、掘り込みが直で深いもの。底面は平坦で、覆土中に大小の礫、比較的多くの遺物を伴う。土10・54等を典型例とする。遺物は土96等で土器片が多く出土した他、土10では坑内から11点もの石鏃(未製品含む)が出土している。

**d類** 長径50~220cm、円ないし楕円形を基調とし、掘り込みが浅く平坦な底面のもの。内部に遺物や礫を伴うものが多い。土59・96等を典型例とする。遺物は土96で覆土中に微細な黒曜石片が多量に含まれていた。

**e類** 直径60~150cm、円形で単純な形態のもの。次のf類とともに土坑の主体をなす。底面は平坦で、礫は伴わない。

**f類** 長径100~220cm、楕円形で単純な形態のもの。底面は平坦ないしは緩く中央部が窪む形態で、礫は伴わない。

**g類** いわゆるローマウンドの特徴を備えるもの。三日月形ないし楕円形を呈する。

これらのうち、e・f類には人為的な遺構でないものも多く含まれていると考えられるが、その分別は困難であった。c類は貯蔵穴、ないしは墓塚の可能性もある。

### (2) 時期・分布

土坑の分布は調査区のほぼ全域に及ぶが、類型によっては一定の傾向が窺える。まずa類、すなわち集石炉は中央東寄り、1・2住の近在にあり、1住と土18、2住と土25が対になっているようにも見受けられる。c類は住居址からやや離れて南方の低い位置に4基が集中し、d類も住居址からやや離れ、周囲を取り巻くように分布する。その他の類はほぼ全域に広がっている。

最後に各土坑の時期についてだが、a・c・d類については遺物から見て縄紋時代早期末、e~g類についても確定はできないが該期以外の遺物が全く見られないことから大半がこの時期のものであろう。なお土坑59の検出面からは草創期の有舌尖頭器(1)が出土しているが、直接遺構の時期を

反映したものではないと考えられる。

### 3 ビット (第20図)

土坑同様調査区の全域で検出されている。建物や柱列を構成するような配列や掘り方のものはなく、黒色土のシミを遺構と誤認したものも多々ある。遺物は縄紋時代早期のものが出土しているが、1基のみP47からは晩期末の壺形土器口縁部片(41)が出土しており、該期の遺構と考えられる。

### 4 溝状遺構 (第20図)

調査区の中央やや南寄り、調査区を南北に区切るように北西-南東方向に走る第1号溝状遺構が検出されている。おそらく近世以降の水田あるいは畑地の区画をなしたものと考えたい。

### 5 遺物包含層 (第25・26図、図版15)

調査区の東-南縁、すなわち段丘端部に沿って3ヶ所に遺物包含黒色土層の広がりを確認した。

包含層2は他と異なりむしろ溝状遺構の形態をなす。埋土は上下2層からなり、上層には多量の礫・遺物・骨片が包含され、廃棄行為が行われた様相を呈している。層厚は最大で40cm前後を測るが、遺物・礫のあり方は均質的で層位の細分もできない。下層は遺物、礫ともに量は少なく、それ以前から存していた窪地にある程度自然堆積が行われた段階で廃棄行為が始まったことが窺えた。

包含層1・3は段丘縁辺部にできた窪地に黒色土の堆積と遺物・礫の廃棄が行われたもので、包含層1では西側縁辺部の上層を中心に、また包含層3では土127付近に遺物や礫が特に集中していた。覆土の黒色土は下層に行くに従い漸移的に地山へと変化し、遺物も希薄になる。底面からは数基の土坑が検出されたが、これらの多くは黒色土層中から掘り込まれたものである。

遺物は早期末のもののみ見られ、出土総量の大半を占めている。なかでも包含層2ではかなりまとまった量が得られ、土器では完形品こそないものの、図上復原可能なものが4個体あり、絡条体疋痕紋、刺突紋を伴った条痕紋系土器の他、東海系の粕畑式土器も見られる。石器では尖頭器・石鏃・石鎌・ピエスエスキュー・石匙・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石類等がある。

包含層1では絡条体疋痕紋を施した大形の深鉢(42)が出土した他、刺突紋、粕畑式土器等が含まれ、包含層2と同様な傾向を示す。石器も各種豊富である。

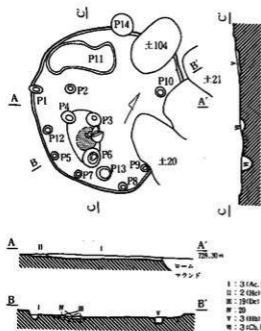
包含層3は量的に少ないが、絡条体疋痕紋や刺突紋等条痕紋系の土器が少ない反面、縄紋施紋の土器が目立つ。各種石器の他、玦状耳飾が1点出土している。

第3表 桜田遺跡 土坑一覽表

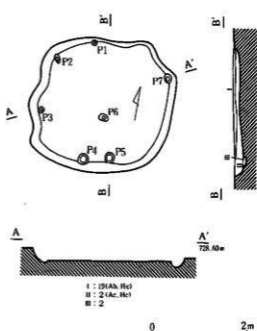
No.	縦・横 (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	坑口型	土器	No.	縦・横 (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	坑口型	備考
1	90×78×19	円形	d類	石器	53	64×60×20	円形	c類	
2	220×108×15	隅丸長方形	f類		54	88×76×44	楕円形	c類	
3	100×76×11	楕円形	e類		55	312×244×19	不整楕円形	e類	石器
4	100×92×13	円形	e類		56	76×56×29	楕円形		
5	92×88×25	不整長方形	d類	土器	57	172×92×15	不整楕円形	g類	石器
6	72×64×20	楕円形	e類		58	196×160×14	隅丸方形	b類	石器
7	196×72×47	不整楕円形			59	112×96×23	円形	d類	土・有蓋尖頭器
8	126×62×58	不整楕円形	g類	石器	60	68×44×12	楕円形	d類	
9	104×68×28	不整楕円形	c類	土器・石器	61	104×56×27	不整楕円形		土器・石器
10	86×66×50	楕円形	c類	石皿11・土器多	62	400×208×27	不整楕円形		
11	62×52×20	不整楕円形		石器	63	80×64×29	楕円形		
12	112×84×27	楕円形			64	56×36×25	楕円形		
13	84×68×27	楕円形	e類	土器・石器	65	96×44×15	楕円形		
14	220×120×71	不整楕円形	g類	土器・石器	66	148×72×15	不整楕円形	f類	土器・石器
15	72×36×15	楕円形			67	304×156×32	不定形	g類	
16	84×76×63	円形		土器・石器	68	64×40×13	不整楕円形		
17	112×76×26	不整楕円形		土器・石器	69	50×32×19	不整楕円形		
18	114×94×33	楕円形	a類	集石伊	70	60×44×18	楕円形		
19	124×88×13	楕円形	f類	石器	71	56×44×24	楕円形		
20	224×112×35	不定形	g類	石器	72	72×52×25	不整楕円形		
21	220×144×20	不整楕円形	f類	土器・石器	73	104×100×11	円形	e類	
22	80×72×14	円形	e類		74	156×88×11	楕円形	f類	
23	60×48×13	楕円形			75	100×80×32	楕円形	e類	
24	56×46×13	楕円形			76	112×80×6	楕円形	e類	
25	78×62×26	楕円形	a類	集石伊	77	88×60×14	不整楕円形		包1内
26	148×128×14	隅丸三角形	f類		78	64×40×17	楕円形		土器
27	80×76×14	円形			79	100×84×18	不定形		土器
28	144×128×9	不整楕円形		土器	80	92×40×17	隅丸三角形		土器
29	164×108×5	不定形			81	44×40×19	不整楕円形		土器・石器
30	160×96×16	不定形			82	288×252×98	不定形	g類	石器
31	72×68×16	円形	e類	土器	83	66×38×16	不整楕円形		
32	88×84×16	不整楕円形			84	56×36×20	楕円形		
33	80×36×7	楕円形		土91より古	85	166×92×6	不整楕円形	f類	
34	80×48×10	不整楕円形			86	56×32×16	楕円形		
35	124×80×33	楕円形	f類	土器	87	68×36×13	不整楕円形		
36	180×88×51	不整楕円形	f類	土器・石器	88	80×60×24	楕円形		
37	152×132×10	楕円形	e類	石器	89	96×84×21	不整楕円形		
38	68×38×10	楕円形			90	100×28×15	楕円形		
39	70×46×13	楕円形			91	60×44×20	楕円形		
40	54×42×17	楕円形			92	92×48×29	不整楕円形		土器・石器
41	104×76×12	楕円形	f類	土器	93	116×32×14	不整楕円形		
42	92×92×52	円形	c類	土器	94	88×84×14	円形	e類	土器
43	64×62×8	円形		石器	95	76×40×10	楕円形		
44	100×88×8	隅丸方形	e類		96	124×112×16	円形	d類	石器・土器多
45	86×40×20	不整楕円形			97	124×64×11	楕円形	f類	
46	94×76×72	不整長方形			98	56×48×10	不整楕円形		土器
47	80×42×17	楕円形			99	180×120×18	楕円形		
48	60×56×14	円形			100	220×168×21	不整楕円形	d類	土器・石器
49	52×52×16	円形		石器	101	104×68×11	楕円形	d類	
50	88×56×19	不定形			102	116×108×9	隅丸三角形		土103より古
51	44×32×20	楕円形		土器	103	68×48×9	不整楕円形		石器
52	156×124×30	不定形	f類	石器	104	128×84×24	楕円形	f類	石1住より新

No.	規格 (cm) 長軸×短軸×高さ	平面形	開口形	備考	No.	規格 (cm) 長軸×短軸×高さ	平面形	開口形	備考
105	106×68×8	隅丸方形	f 類		123	64×44×6	不整楕円形		包1内
106	56×56×5	円形	e 類		124	56×48×18	楕円形		包1内
107	116×44×21	不定形			125	88×52×14	不定形		包1内
108	76×56×12	不整楕円形		石器	126	64×44×5	隅丸長方形		
109	68×52×12	楕円形			127	104×104×12	不整円形	e 類	土器
110	76×60×12	隅丸長方形		土器	128	84×68×17	楕円形		
111	132×84×10	不整楕円形	f 類		129	88×80×23	不整楕円形		
112	192×104×12	不整楕円形	f 類	石器	130	196×80×12	楕円形	f 類	
113	56×56×14	円形			131	60×56×15	円形		
114	120×76×19	楕円形	f 類		132	72×72×16	不整楕円形		
115	60×52×8	楕円形			133	72×48×19	不整楕円形		
116	60×52×9	不整楕円形			134	72×48×12	不整楕円形		
117	76×60×10	不整円形			135	160×56×13	不定形	g 類	
118	96×56×8	楕円形		±59より古	136	72×64×13	楕円形		
119	260×200×18	不定形	b 類		137	60×56×7	不整円形		
120	212×76×41	楕円形	g 類	包1内	138	124×108×11	不整円形	d 類	
121	72×48×18	不整楕円形		土器	139	80×56×10	不整楕円形		
122	252×96×56	不定形	g 類						

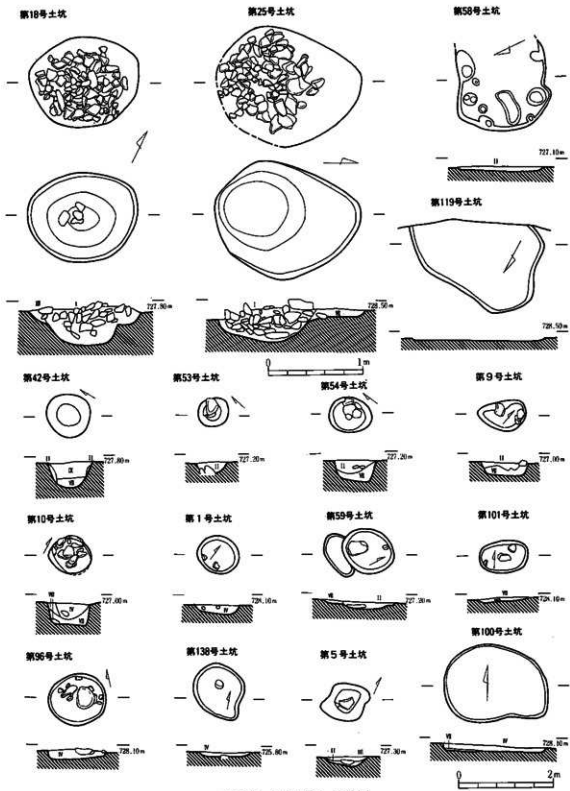
第1号住居址



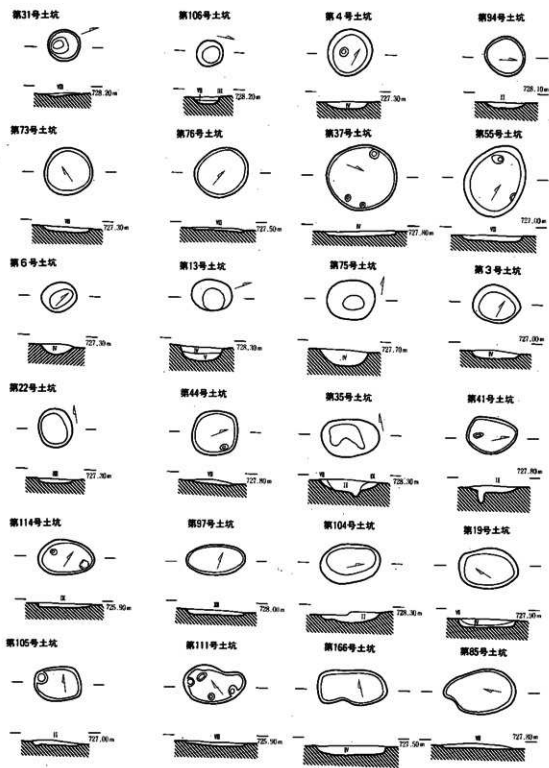
第2号住居址



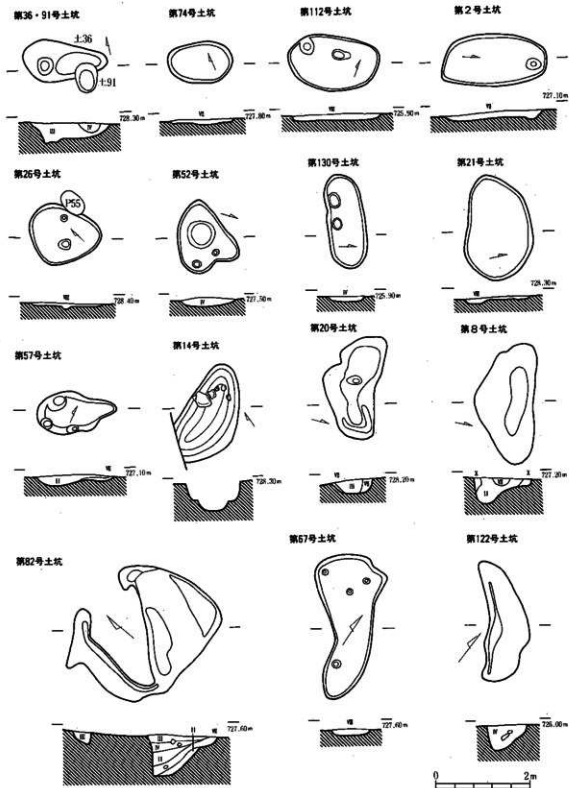
第21図 桜田遺跡 第1・2号住居址



第22图 桜田遺跡 土坑(1)

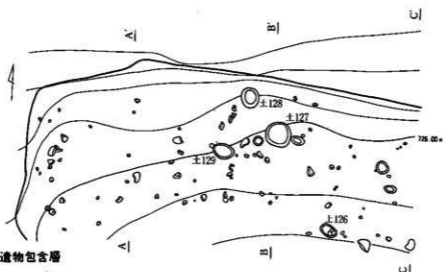


第23图 桜田遺跡 土坑(2)

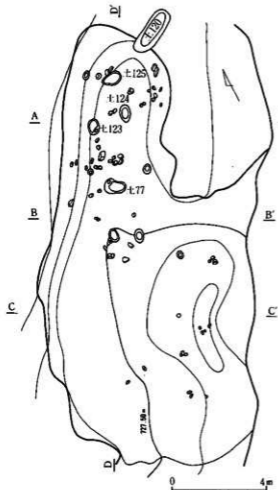


第24图 桜田遺跡 土坑(3)

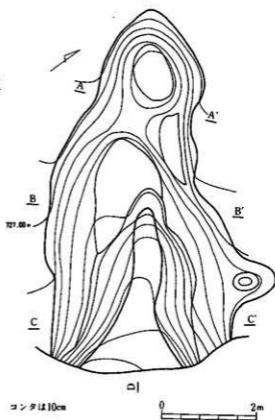
第3号遺物包含層



第1号遺物包含層



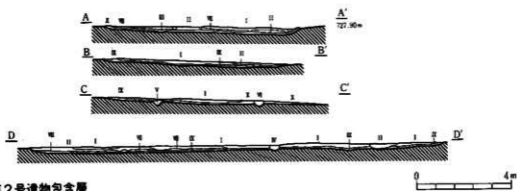
第2号遺物包含層



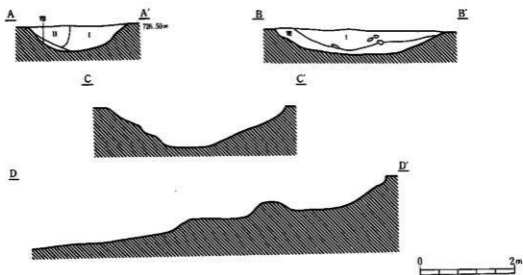
第25図 桜田遺跡 遺物包含層(1)



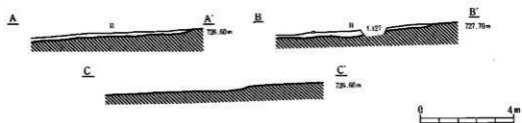
第1号遺物包含層



第2号遺物包含層



第3号遺物包含層



遺物包含層止層説明

I : 3 (Ac, Hc)	W : 3 (Ah, Hb)
II : 3 (Hc, Pc)	W : 2 (Hb, Pc)
III : 3 (Ah, Hb)	W : 1
IV : 3 (Ah, Lb)	W : 1 (Lc)
V : 3 (Ah, Bb, Pb)	X : 1 (Pc)

土坑止層説明

I : 19 (Ab, Ch, Bb)	W : 2 (Hb)
II : 19 (Bb, Hb)	W : 2 (Aa)
III : 19	X : 6
IV : 3 (Hc)	W : 0 (Ab)
V : 1	W : 7 (Hb)
W : 2 (Hb)	W : 11 (Hb)
W : 2 (Ah, Hb)	

第26図 桜田遺跡 遺物包含層(2)

### 3 遺物

#### 1 土器 (第27~35図・第4表・巻頭図版5~8)

今回の調査で出土した土器はそのほとんどが縄紋時代早期末葉に帰属するもので、わずかに縄紋時代晩期末葉、平安時代のもが出土している。このうち縄紋時代晩期の土器については1点のみ第29図に示した。41がそれで、大形壺の口縁部破片と考えられ、外折した口縁端部に押圧を行っている。同時期の遺物は近在では岡田町遺跡で出土している。わずか1点のみの出土とはいえ、見逃せない資料である。

平安時代の土器については細片のため図化・提示はできない。器種・器形は土師器および須恵器の杯類、灰軸陶器の碗等である。年代的には和田遺跡とほぼ同様平安時代、9世紀代と考えられる。

次に主体となる縄紋時代早期末の土器について概観することとする。

当該期の土器は第1・2号住居址、合計19基の土坑(集石炉)・ピット、3ヶ所の遺物包含層(土器集中)から出土しているが、遺構から出土したものはさほど多くない。そのほとんどは遺物包含層、特に第2号遺物包含層から出土しており、層位的には捉えられないものの、良好な資料である。しかし土器の遺存状況は悪く、包含されていた土壌の影響等から、磨滅したもの、ボロボロになったものも多い。また土器はすべて破片で、完形のものはないが、図上で復元できるものが10個体ほど存在した。

出土した縄紋時代早期末葉の土器は、含有量の多少はあるものすべて胎土に繊維を含んでいる。

器形はすべて深鉢で、口縁部は平縁と波状のものがある。底部は、尖底および丸底が主体で、他に尖底気味で小さなボタン状の平底になるものや平底のものも見られる。

調整は内外面ともに条痕が主体で、一部にナデやオサエのあるものも見られる。しかし、遺存状況が悪く判別の難しいもの、調整の痕跡が薄れているものも多い。

胎土は、先にも記したとおり、すべて繊維を含んでおり、また長石粒もすべて含んでいる。この他には、石英粒、褐色砂粒、チャート粒等を含むものも見られる。

色調は黒褐色、暗褐色、茶褐色、黄褐色等で、黒褐色、暗褐色、黒色等のものは土器焼成時についた黒斑的なものもあると思われるが、そのほとんどが使用時に煤や焦げが付着したり、染みたものであろう。

量量は口径20~30cmのものがほとんどであるが、42のように42.8cmと大形なものも見られる。

出土した縄紋時代早期末葉の土器群を、その型式がもつ紋様、調整、その他土器様相等の特徴から、量的に多い順に分類すると次のようになる。

#### 第1類 結条体圧痕紋の施紋される土器

18・24・27・30~32・42・45・47~49・55・57・65・66・76~88・119・140・141等が該当する。

内面に条痕紋が施される。外面には結条体圧痕紋が施され、その原体はほとんどが太いイモ虫状

のものである。モチーフは縦位・横位・斜位・矢羽状・弧状(眼状に組み合うものも含む)等が見られ、口縁端部に施すものもある。そして部位による違いとも考えられるが、隆帯・突帯の貼付されるもの、されないものの2種類に分けられる。器形は概してラッパ状に開くものが多い。内面に施される条痕は、磨滅してはつきりしないものも多いが、絡条体を用いたものが主体であり、貝殻条痕、その他の条痕と思われるものはない。

#### 第2類 刺突紋の施紋される土器

6・13・50・51・54・89・91～103・106・107等が該当する。

条痕紋が地紋として施されるもの、ナデ調整等によるものの2種類が見られる。刺突紋の施紋工具はすべて竹管、中でも半数竹管状工具がほとんどで、一部円形竹管を用い、縦に刺突するものがある。99のように口縁部・口縁端部に3条矢羽状に施紋するものもある。

#### 第3類 沈線紋・刺突紋の施紋される土器

104の1点のみである。内外面に条痕紋が施され波状口縁となるもので、これに近いものが男女倉遺跡C地点の土器群の中に見られる。

#### 第4類 隆帯・突帯の貼付される土器

22・39・67等がある。隆帯や突帯が貼付されるだけのもの、隆帯上に刻みが入るものの2種類がある。条痕紋で施紋・調整されるもの、ナデ等で調整されるものの2種類があり、ほとんどが平口縁である。

#### 第5類 条痕紋で施紋・調整される土器

7～10・17・19～21・23・26・33・35・36～38・40・52・53・56・58～63・68・118・120・121～139・143・144・148等が挙げられる。

単に条痕で施紋・調整されただけのものを一括したが、破片の中には他類の胴部を構成していたものも多いと考えられる。条痕の施紋は、磨滅が激しいものが多いため特定できるものが少ないが、絡条体を工具としたものが主流で、貝殻や刷毛状工具によるものは少ない。

#### 第6類 縄紋を施紋した土器

1～5・11・12・16・25・28・29・43・64・90・145～147・150・151等が挙げられる。

縄紋だけのもの、隆帯・突帯が貼付されるもの、凹線の施紋されるものの3種類がある。内面調整はほとんどがナデで、条痕の施されるものは少ない。

#### 第7類 東海系の土器

14・15・69・70・105・108～117等がある。東海地方の「粕畑式」に見られる楞痕状の刺突紋、波状口縁の頂上部に歪状の突起の付く土器群である。東海地方で作られたものは少ないと思われ、ほとんどが在産である。中には69・70等のように縄紋が施紋されるものも見られ、東海地方と在産の縄紋施紋の土器の折衷型であろう。

以上、ごく簡単に出土した早期末葉の土器を概観・分類してみたが、おそらくはこの土器群はほ

ほぼ一括して捉えられるものと考えられ、第7類の東海地方「柏畑式」系や第3類の男女倉遺跡C2地点出土早期末土器群に類似する土器等の存在から、茅山上層式期のほぼ一括できる土器群と考えられ、本遺跡出土土器群の中でも出土量が多く、編年の位置付けの難しい第1類の絡条体瓦痕紋の施紋される土器もこれに一括できるであろう。また、後出すると考えられる第6類の縄条施紋の土器も、第7類の土器群の中に縄紋が一緒に施紋される土器の存在が見られること等から、一時期の範囲の中でも後出するものの一括の時期に考えられるであろう。

## 2 石器 (第36~50図・第5表・図版16~18)

桜田遺跡の発掘調査で出土した石器群のうち、定形的な石器は570点があり、その内訳は以下のとおりである。

①尖頭器	3点 (0.5%)	⑦打製石斧	10点 (1.7%)
②石 鎌	278点 (48.8%)	⑧磨製石斧	3点 (0.5%)
③石 錐	61点 (10.7%)	⑨凹・敵・磨石	99点 (17.4%)
④ピエス・エスキュー	38点 (6.7%)	⑩砥 石	1点 (0.2%)
⑤石 匙	10点 (1.7%)	⑪研磨礫	1点 (0.2%)
⑥スクレイパー	66点 (11.6%)	総 計	570点 (100.0%)

このほかに、2次加工のある剥片、使用痕のある剥片、原石、剥片等が多量に出土している。桜田遺跡の石器群を理解するためには、これらを含めた総合的な分析が必要である。しかし、限られた整理期間の中では、定形的な石器しか扱うことができなかった。なお、実測は各器種の中でも完形品、またはそれに準ずるもの、製作痕・使用痕を残すもの、特殊な形態を有するものを中心にっており、頁数の関係で限定的な資料提示となっている。実測図の右下には上段に通番、中段に出土地点、下段に石質を記載している。なお、石質の一部については太田守夫氏にご教示をいただいている。

記述は石器の器種毎に行っており、出土点数が少ないものは個別具体的に、多いものは全体的な傾向・概要を述べるに留めている。文中の石器番号は通番に対応している。

### (1) 尖頭器 (1~3)

3点が出土している。1は有舌尖頭器である。頁岩製で、先端と基部端を僅かに破損している。身部の側辺はほぼ直で、最大幅は身の最下端にある。その直上には両側辺とも剝離によって抉りが施されている。この抉りは相対する位置にあることから、着柄用に意図的に作り出された可能性がある。基部は比較的短く、丸みを帯びた閃を有するため、逆刺は認められない。残存長5.84cm、最大幅1.83cm、最大厚さ0.63cmである。

2はチャート製で、下半部が破損している。残存長3.59cm、同幅1.99cm、厚さ0.66cmを計る。両面加工で、側辺は僅かに外湾している。

3は頁岩製で、上半部が破損している。残存長3.20cm、幅2.38cm、厚さ0.76cmを計る。両面加工で、残存している片側辺の湾曲状況から木葉形尖頭器の可能性がある。

## (2) 石 鏃 (4-169)

278点が出土し、166点を図化している。石材は黒曜石208点(74.8%)、チャート67点(24.1%)、頁岩3点である。有茎鏃が1点(24)あるだけで、他はすべて無茎鏃である。

有茎鏃の24は側辺が内湾する細身の鏃で、左側はごく浅い逆刺を有している。

無茎鏃は平基16点(5・11・34・46・65・74・85・96・100・120・127・153等)、円基12点(10・25・128・133・138・161・167・169等)があり、他は凹基で占められている。なお、平基の65・74は側辺の長さが異なるため、基部が斜行している。凹基鏃については、挟り込みが全長の1/4未満の浅いものがほとんどで、平基との区別が難しいほど浅いものがかなり認められる。なお、両端が僅かに突出しただけの逆刺をもち、その間が平な基部を有する12・47・75・103・105・139・165等があり、これらは凹基と平基の中間的な形態と位置づけられよう。

破損状況は先端と片脚を破損しているものが多い。しかし、これらは特に身の薄い部分なので、使用-廃棄-出土のいずれの間にも破損する機会があるため、使用に伴う破損と特定することはできない。なお、本遺跡では完形品と未製品がかなりの割合で出土しており、調査地付近で石器製作が行われていた可能性が高い。

特徴的なものとして素材剥片の縁辺にのみ調整加工が施されている113(両面加工)・156(片面加工)、五角形鏃の38、挟り込みが深く逆刺が方形を呈する鏃形鏃の142がある。また、144は縦長剥片の縁辺に腹面側から急角度調整が施されており、丸みを帯びた先端部-側辺は刺突の機能をほとんど果たさないほど鈍く作り出されている。

## (3) 石 鏟 (170-204)

61点が出土し、35点を図化している。石材は黒曜石40点(65.6%)とチャート19点(31.1%)、頁岩2点が出土している。これらのうち原石を素材とする182・194以外は、剥片を素材としている。一般的には縦長剥片を正位に、横長剥片を横位にして整形しており、上端や側辺の上部に自然面を残しているものが多く認められる。なお、185では縦長剥片を逆位にして、打面側に鏟部を作り出している。整形加工は両側縁に両面加工を施すものが大半で、片面加工は1点だけである。鏟部は横断面が三角形、紡錘形を呈するものが多く、四辺形は比較的少ない。使用痕では鏟部の側縁が摩耗しているものが9点見つまっている(177・183・189・192・193・195・196等)。特に、177・196は側縁に隣接する剥離面まで摩耗し、その部分に長軸に直交する方向の線状痕が観察されることから回転鏟と特定できるものである。

形態的には側辺のあり方から、明瞭なつまみを有するもの(A類)、上端に最大幅があるもの(B類)、中央からやや上寄りに最大幅がくるもの(C類)、五角形を呈するもの(D類)、棒状を呈するもの(E類)に分類できる。他に特異なものとして、片側縁が外湾する全長7.08cmの

チャート製の大形品(204)がある。

A類は173の1点だけである。B類は27点が出土しており、本遺跡で最も良くみられる石鏃である(171・172・175・178・192～194・196・199・203等)。側辺は直線的に幅を狭めて行くものと、僅かに外湾するものがある。平面は二等辺三角形を呈するものと、側辺の長さが異なるため上端が斜行するものの二者がある。前者の頭端部は平坦な打面をそのまま残すものと、整形加工が施されているものが認められる。

C類は最大幅を境に頭部と鏃部が分かれているもので、2点が出土している(180・191)。D類は11点が出土している(170・174・183・185・190・198・201等)。平面が五角形を呈するのは、整形加工が鏃部に集中して行われるため、頭部と鏃部の境界は明瞭である。

E類は9点が出土している(176・177・181・182・188・189・195・200・202)。このうち、189・195は両端に鏃部を有する両頭鏃である。

#### (4) ビース・エスキュー(205～234)

38点が出土し、30点を図化している。石材は黒曜石35点、チャート2点、頁岩1点である。原石を素材とするものが9点(205・214・219～221・224・225・227等)あり、自然面を打面としているものが多い。

平面は不整な方形・台形を呈するものが多い。このうち自然面ないし平坦な打面上端に残し縦断面が楔状を呈するものが6点ある(205・216・218・222・224・226)。

縦断面を有するものは14点あり(206・210～213・215・218・223・228～230・233・234等)、このうち223・229・230は両極打法の際に生じた削片と推定される。縁辺部のつぶれは208・233が上縁に、211・224が下縁に、209・214・221・222・231・234が上・下縁に認められる。側辺の調整については216・222・226・227が片側縁に、208が両側縁に認められる。

#### (5) 石匙(235～244)

10点が出土している。石材は黒曜石4点、チャート3点、頁岩3点が出土している。素材削片は横長削片(235)と縦長削片(236・237・240・241・244)があり、腹面側は主要剥離面を大きく残しているものが多い。つまみと刃部の位置関係は横形(235・239・243)、斜形(237・241)、縦形(236・240・244)がある。

刃部調整は両面加工がほとんどで、片面加工は1点(244)だけである。刃部の形態は239・240(右側辺)が直刃のほかは、外湾刃であり、このうち237・241・244は片刃である。

なお、244は大形の縦長削片を素材とし、背面側からの片面加工で平面が靴べら状に整形されており、片刃の外湾刃を有する特異なものである。

#### (6) スクレイパー(245～293)

連続する剥離を加えて刃部を整形しているもので、つまみのないものをスクレイパーとしている。66点が出土しており、このうち49点を図化している。本遺跡では概ね5cm未満の小形品と5cm以上

の大形品の2種類に分けられる。

小形品は52点が出土している。石材は黒曜石23点、チャート27点、頁岩2点である。素材は縦長剥片17点、横長剥片7点があるが、不定形な剥片を素材としたものが多い。刃部調整は片面加工37点、両面加工15点で、片刃28点、両刃24点がある。刃部は直刃(21点)と外湾刃(22点)がほとんどで、内湾刃は8点だけである(他の1点は不明)。

大形品は14点が出土している。石材は砂岩(硬砂岩・ホルンフェルスを含む)5点、頁岩3点、玢岩2点、緑泥片岩2点、粘板岩1点、紅藍片岩1点がある。素材は縦長剥片3点、横長剥片4点のほか、礫2点がある。刃部調整は片面・両面加工とも各7点であるが、片刃が3点に対し両刃は11点と多い。刃部は直刃4点、外湾刃8点、内湾刃2点がある。

特徴的なものとしては261と276の礫器がある。これらは砂岩礫を素材としたもので、両面ないしは片面に礫の自然面を大きく残している。いずれも平面は半月形を呈し、両面加工で両刃の外湾刃が作り出されている。なお、2点とも上端に平坦面を有することから、この面は破損によるものではなく、意図的に作り出された可能性がある。また、292は横長剥片を素材とし、平面が半月形を呈する両面加工の直刃をもつ大形品である。腹面側は刃縁に沿って幅7mmほどが摩耗しており、使用痕と考えられる。

#### (7) 打製石斧(294~303)

10点が出土している。石材は砂岩5点、粘板岩3点、玢岩1点、頁岩1点である。平面形は撥形5点(296・297・299・301・302)、短冊形2点(298・300)があり、295は短冊形ないしは分銅形と推定される。また、残存する刃部はすべて円刃(296・297・300・301)である。なお、297は刃縁部が部分的に摩耗しており、使用痕と考えられる。

破損状況は頭・刃部の破損が294・298・302のほか、刃部破損の295・299、胴~刃部破損の303、頭~胴部の片側破損の296があり、完形品は297・300・301である。

完形品の寸法は、297が(全長)12.16×(最大幅)5.33×(厚さ)2.07cm・重量134g、300が10.06×3.98×0.87cm・重量54g、301が9.60×5.10×2.25cm・重量101gを計る。

なお、301は横長剥片を素材としている。頭・刃部は剥片の縁辺部を利用して、部分的に剝離調整が施されるだけだが、両側縁は両面加工で入念に整形されている。なお、頭・胴部の縁辺部は刃部と同様の鋭利さを有しており、他の打製石斧とは様相を異にしている。

#### (8) 磨製石斧(304~306)

3点が出土している。いずれも石材は蛇紋岩であるが、定角式とは明らかに異なり、研ぎ出しによる側面の面取りが両側全面に及ぶものは認められない。刃部は片刃で僅かに外湾している。

304は頭部の残片である。横断面は扁平なカマボコ状を呈している。305は両端にノミ状の刃部をもつ両頭石斧の完形品である。全長4.60cm、最大幅2.41cm、厚さ0.80cm、重量12.85gを計る。右側はすべて面取りが施されて断面がコ状を呈しているが、左側は研ぎ出しによってく状に整形されて

いる。306は刃部の一部を破損しているが、全長10.70cm、残存幅5.44cm、厚さ1.81cm、重量169.2gを計る大形品である。

#### (9) 凹・敲・磨石 (307~352)

99点が出土しており、このうち46点を図化している。石材は砂岩46点、石英閃緑岩20点、玢岩15点、安山岩12点、凝灰岩4点、泥岩2点が出土している。

素材については、円・楕円礫がほとんどで、棒状礫は9点(特殊磨石は除く)が見られる。

使用痕については、単独で使用痕をもつものは凹部が25点、敲打痕が1点、磨面が46点ある。2つの使用痕をもつものは凹部+敲打痕が2点、凹部+磨面が25点ある。このことから用途は特定できないが、凹部と磨面の使用が一般的であったことがうかがえる。

特徴的なものとして特殊磨石があげられる。特殊磨石は13点(309・317・318・320・324・334・337・342・347・348・351・352等)が出土している。このうち完形品は1点(342)だけで、破損品が大半である。なお、破損品にはリングやフィッシャーは観察されず、切断されたようなものが大半である。調整磨面をもつものが多く、機能磨面の敲打により剥離面をもつものが多い。また、319は大形の板状礫を素材としたもので、片面に広い磨面と敲打痕が観察される。手で保持して使用するには大きすぎることから、置き砥石の可能性も考えられる。

#### (10) 砥石 (353)

1点が出土している。砂岩製で、約1/2を破損している。扁平な礫の片面中央に砥面を有し、ほぼ同方向の線状痕が観察される。裏面は器面が部分的に剥落しており、砥面の有無は不明である。

#### (11) 研磨礫 (354)

1点が出土している。チャート製で、片面の一部を破損している。楕円礫の表面は光沢を帯びるほど研磨されている。また、側縁には幅7mm前後の平坦な敲打面が上・下に認められる。この敲打面に接する表面には敲打の衝撃で生じた剥離面が観察される。

### 3 石製品 (第50図)

滑石製の塊状耳飾が1点出土している。下部の切込み部分と推定されるが、外側辺は失われている。断面は厚手で、両面は平であるが、内側辺は丸みを帯びている。



第4表 桜田遺跡 縄紋土器一覽表

標頭 番号	出土 遺物	器形	部位	法製	調整部	紋様	色調	備考
1	1住	深鉢	口縁部		縄紋?・隆帯	条痕(横位)	長石微粒	有 黒褐色 146と接合
2	1住	深鉢	胴部		縄紋(R L横)	ナデ	長石微粒	有 暗褐色
3	1住	深鉢	胴部		縄紋(R L横)	ナデ	長石微粒	有 暗褐色
4	1住	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	磨滅不明	長石微粒	有 暗褐色
5	1住	深鉢	胴部		縄紋(L R縦)	ナデ	長石微粒	有 黒褐色
6	1住	深鉢	口縁~ 胴部		条痕(斜~横) 斜突紋(3条)	条痕(横位)	長石微粒 石英微粒	有 暗褐色
7	1住	深鉢	胴部		縄紋?	磨滅不明	長石微粒	有 暗褐色
8	1住	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有 暗褐色
9	1住	深鉢	胴部		磨滅不明	条痕(斜)	長石微粒	有 茶褐色
10	1住	深鉢	胴部		条痕(横)・ナデ	条痕(斜位)	長石微粒	有 茶褐色
11	2住	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	ナデ	長石微粒	有 暗褐色
12	2住	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	ナデ	長石微粒	有 暗褐色
13	土10	深鉢	口縁~ 胴部	口径 26.0	条痕(斜~横) 斜突紋(2条) 端部刻目	条痕(横)	長石微粒	有 暗褐色
14	土10	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(斜)	長石粒 石英粒	有 黄褐色
15	土10	深鉢	胴部		ナデ・斜突紋(1条)	条痕(横)	長石微粒	有 暗褐色
16	土13	深鉢	口縁部		縄紋(L R横) 隆帯	ナデ・斜突紋	長石粒	有 黒褐色
17	土14	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(斜)	長石粒	有 暗褐色
18	土17	深鉢	胴部		隆帯・結条体圧痕紋 (横)	条痕(横)	長石微粒	有 黄褐色
19	土21	深鉢	胴部		条痕(斜)	条痕(斜)	長石微粒	有 暗褐色
20	土36	深鉢	口縁部		磨滅不明	条痕(横)	長石微粒	有 黒褐色
21	土36	深鉢	胴部		条痕(斜)	条痕(斜)	長石微粒	有 橙褐色
22	土41	深鉢	口縁部		条痕(斜)・ナデ 隆帯	磨滅不明	長石粒 褐色粒	有 暗褐色
23	土42	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕・ナデ	長石微粒	有 褐色
24	土59	深鉢	口縁~ 胴部		条痕(斜)・隆帯 結条体圧痕紋(隆帯 沿に上1条下2条)	磨滅不明	長石粒 褐色粒	有 暗褐色
25	土78	深鉢	胴部		縄紋(R L横)	ナデ	長石粒	有 暗褐色
26	土78	深鉢	胴部		磨滅不明	条痕(横)	長石微粒	有 茶褐色
27	土51	深鉢	胴部		条痕(横)・隆帯 結条体圧痕紋(斜~ 横)	条痕(縦)	長石粒	有 暗褐色
28	土79	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	ナデ	長石微粒	有 暗褐色
29	土98	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	磨滅不明	長石粒	有 黒褐色
30	土80	深鉢	胴部		隆帯・結条体圧痕紋 (横)	条痕(横)	長石微粒	有 黒褐色
31	土96	深鉢	口縁部		条痕(横) 結条体圧痕紋(横位 羽状)	条痕(横)	長石微粒	有 黒色 波状口縁
32	土96	深鉢	口縁部		条痕(横)・隆帯 結条体圧痕紋(斜)	条痕(横)	長石微粒	有 暗褐色 端部欠
33	土96	深鉢	胴部		ナデ(斜)	条痕(斜)	長石微粒	有 暗褐色

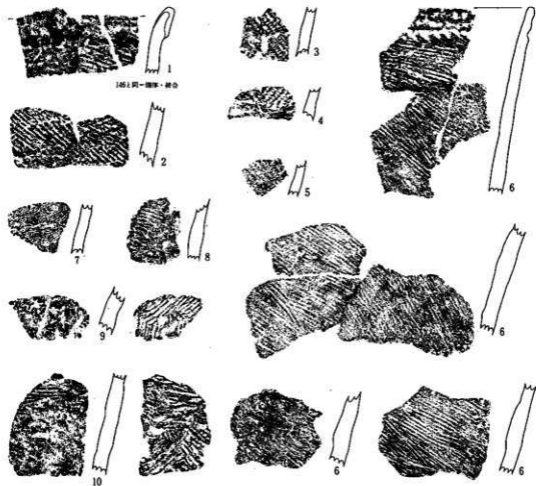
押出 番号	土 質	形状	部位	法量	調査土の模様		結晶	構造	色・調	備考		
					外面	内面						
34	土96	深鉢	胴部		ナデ・刺突紋	ナデ			長石微粒 石英微粒	有	暗褐色	
35	土96	深鉢	胴部		磨減不明	磨減不明			長石微粒 褐色微粒	有	茶褐色	
36	土127	深鉢	口縁部		磨減不明	条痕(横)			長石微粒	有	暗褐色	
37	土127	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)			長石微粒	有	暗褐色	
38	土127	深鉢	胴部		条痕(斜)	ナデ			長石微粒	有	黄褐色	
39	P 25	深鉢	胴部		隆帯・条痕(縦)	条痕(横)			長石微粒	有	暗褐色	
40	P 53	深鉢	口縁部		条痕(横)	条痕(横)			長石微粒	有	茶褐色	
41	P 47	壺	口縁部		肩部外折・刻目	ケズリ→ナデ			長石微粒	有	黄褐色	晩期末
42	包1	深鉢	口縁部 ~胴部	口径 42.8	条痕(横)・隆帯 絡糸体圧痕紋(隆帯 上羽状・口縁部縦) 肩部絡糸体押圧	条痕(横)			長石微粒	有	黄褐色	
43	包1	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	ナデ			長石微粒	有	黒褐色	
44	包1	深鉢	口縁部		沈線紋(2条)	ナデ			長石微粒	有	黒褐色	
45	包1	深鉢	胴部		隆帯・絡糸体圧痕紋 (隆帯沿いに横)	条痕(横)			長石微粒	有	黒褐色	
46	包1	深鉢	口縁部		磨減不明	条痕(横)			長石微粒	有	黒褐色	
47	包1	深鉢	口縁部 ~胴部		条痕(横) 絡糸体圧痕紋(横2 条・斜)	ナデ・条痕(横)			長石粒	有	暗褐色	
48	包1	深鉢	口縁部		絡糸体圧痕紋(縦)	条痕(横)			長石微粒	有	暗褐色	
49	包1	深鉢	胴部		隆帯・絡糸体圧痕紋	条痕(横)			長石粒	有	黒色	
50	包1	深鉢	口縁部		ナデ・刺突紋(3条)	条痕(横)			長石微粒	有	黄褐色	
51	包1	深鉢	口縁部		刺突紋(2条)	磨減不明			長石微粒	有	茶褐色	
52	包1	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)			長石微粒	有	暗褐色	
53	包1	深鉢	胴部		条痕(縦)	条痕(斜)			長石微粒	有	暗褐色	
54	包1	深鉢	口縁部		ナデ・刺突紋(3条)	条痕(横)			長石微粒	有	茶褐色	
55	包1	深鉢	口縁部		絡糸体圧痕紋	条痕(横)			長石微粒	有	茶褐色	
56	包1	深鉢	胴部		条痕(斜)	条痕(横)			長石微粒	有	茶褐色	
57	包1	深鉢	胴部		絡糸体圧痕紋(斜)	条痕(横)			長石微粒	有	粉褐色	
58	包1	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)			長石微粒	有	茶褐色	
59	包1	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)			長石粒	有	茶褐色	
60	包1	深鉢	胴部		条痕(縦)	条痕(横)			長石微粒	有	黄褐色	
61	包1	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)			長石微粒	有	茶褐色	
62	包1	深鉢	胴部		条痕(斜)	ナデ・条痕			長石微粒	有	黄褐色	
63	包1	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)			長石粒	有	茶褐色	
64	椀	深鉢	胴部		縄紋(R L横)	磨減不明			長石微粒	有	暗褐色	
65	椀	深鉢	口縁部		条痕(横)・隆帯 絡糸体圧痕紋(横)	条痕(横)			長石微粒	有	暗褐色	
66	椀	深鉢	口縁部		条痕(横)・肩部刻目 絡糸体圧痕紋(斜)	条痕(横)			長石微粒	有	黄褐色	
67	包2	深鉢	口縁部	口径 28.8	条痕(横)・ナデ 隆帯(2条・刻目) 肩部外面沈線紋(縦)	条痕(横)			長石粒	有	黒褐色	補修孔(横 成後内外よ り穿孔)
68	包2	深鉢	口縁部 ~底部	口径 28.2	条痕(斜~横)・隆帯	条痕(斜~横)			長石粒 チャート	有	暗褐色	尖底 外面磨減

標記番号	出所産地	形状	部位	注記	調整		繊維	色調	備考	
					表面	断面				
69	包2	深鉢	口縁部 ～胴部	口径 21.6	条痕(斜～横) 刺突起・縄紋(R L) 端部刻目・突起	条痕(斜) ナデ(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	波状口縁
70	包2	深鉢	口縁部 ～胴部	口径 25.7	条痕(斜～横) 刺突起・縄紋(R L) 端部刻目・突起	条痕(横) ナデ(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	波状口縁
71	包2	深鉢	底部		磨減不明	磨減不明	長石粒 褐色粒	有	暗褐色	尖底
72	包2	深鉢	底部		ナデ・オサエ	ナデ・オサエ	長石粒	有	黄褐色	尖底
73	包2	深鉢	底部		磨減不明	磨減不明	長石粒 ナヤート	有	黄褐色	尖底
74	包2	深鉢	底部	底径 7.4	磨減不明	磨減不明	長石粒 石英粒	有	黄褐色	平底
75	包2	深鉢	底部	底径 5.2	磨減不明	磨減不明	長石粒 石英粒	有	茶褐色	平底
76	包2	深鉢	口縁部		隆帯(結条体押圧) 結条体圧痕紋(斜)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
77	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)	条痕(横)	長石粒	有	黒褐色	
78	包2	深鉢	口縁部		結条体圧痕紋(斜)	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
79	包2	深鉢	口縁部		結条体圧痕紋(羽状)	結条体圧痕	長石粒 褐色粒	有	暗褐色	
80	包2	深鉢	口縁部		端部結条体押圧 結条体圧痕紋(羽状)	条痕(横)	長石粒 褐色粒	有	暗褐色	波状口縁
81	包2	深鉢	口縁部		条痕(横) 結条体圧痕紋(斜)	条痕(横)	長石微粒	有	黒褐色	
82	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・隆帯 結条体圧痕紋(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	波状口縁
83	包2	深鉢	口縁部		条痕(横) 結条体圧痕紋(斜)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	波状口縁
84	包2	深鉢	胴部		結条体圧痕紋(斜)	条痕(斜)	長石粒	有	暗褐色	
85	包2	深鉢	口縁部		結条体圧痕紋(羽状)	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
86	包2	深鉢	胴部		条痕(横) 結条体圧痕紋(斜)	条痕(横) 結条体圧痕(縦)	長石粒 褐色粒	有	暗褐色	
87	包2	深鉢	胴部		結条体圧痕紋(縦)	条痕(斜)	長石微粒	有	暗褐色	
88	包2	深鉢	胴部		条痕(横) 結条体圧痕紋(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
89	包2	深鉢	口縁部		条痕(横) 刺突起(2条)	条痕(横)	長石微粒	有	黒褐色	波状口縁
90	包2	深鉢	口縁部		隆帯(刻目) 縄紋(R L横)	ナデ	長石粒	有	暗褐色	波状口縁
91	包2	深鉢	口縁部		刺突起(2条) 端部刻目	刺突起(1条)	長石微粒	有	黄褐色	
92	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・刺突起	条痕(横)	長石微粒	有	黒褐色	
93	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突起(2条)	条痕(横)	長石微粒	有	黒褐色	
94	包2	深鉢	口縁～ 胴部		条痕(横) 刺突起(波状に2条)	ナデ	長石粒 石英粒	有	暗褐色	波状口縁
95	包2	深鉢	胴部		ナデ・刺突起(3条)	ナデ	長石微粒 石英微粒	有	暗褐色	
96	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突起(2条)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	

標本 番号	出 産 地	器形	部位	注	調整 部位	調整 内容	胎土	織 造	色 調	備 考
97	包2	深鉢	口縁部		ナデ・刺突紋(羽状) 端部刻目	ナデ	長石微粒	有	暗褐色	
98	包2	深鉢	胴部		条痕(横)・刺突紋	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
99	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突紋(3条)	条痕(横)	長石微粒	有	黒褐色	波状口縁
100	包2	深鉢	胴部		ナデ・刺突紋	ナデ	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
101	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・刺突紋 端部沈線紋	条痕(横)	長石微粒	有	橙褐色	
102	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突紋	条痕(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
103	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突紋(2条)	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
104	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突紋(2条) 沈線紋(斜)	条痕(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	波状口縁
105	包2	深鉢	口縁部		条痕(斜)・端部刻目 刺突紋(2条) 縄紋(R.L横)	刺突紋	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
106	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突紋(1条)	ナデ(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
107	包2	深鉢	胴部		条痕(横)・刺突紋	条痕(横)	長石粒	有	黄褐色	
108	包2	深鉢	胴部		条痕(横)・刺突紋	条痕(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
109	包2	深鉢	口縁部		沈線紋(縦) 端部刻目	ナデ・刺突紋	長石微粒	有	暗褐色	波状口縁
110	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・端部刻目 刺突紋(波状)	ナデ(横)	長石微粒	有	暗褐色	波状口縁
111	包2	深鉢	口縁部		端部突起、刻目 刺突紋(2条)	刺突紋(1条)	長石粒	有	暗褐色	波状口縁
112	包2	深鉢	口縁部		ナデ・刺突紋(2条)	ナデ・刺突紋(1条)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	波状口縁
113	包2	深鉢	口縁部		ナデ・刺突紋	ナデ	長石粒	有	黒褐色	
114	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)・刺突紋 端部刻目	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
115	包2	深鉢	胴部		条痕(斜)・刺突紋	条痕(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
116	包2	深鉢	口縁部		端部刻目、刺突紋	ナデ	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
117	包2	深鉢	胴部		条痕(横)・刺突紋	ナデ	長石微粒	有	暗褐色	
118	包2	深鉢	口縁部 ~胴部		条痕(斜~横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
119	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)	磨滅不明	長石微粒 褐色微粒	有	暗褐色	波状口縁
120	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
121	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
122	包2	深鉢	口縁部		条痕(横)	条痕(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	波状口縁
123	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
124	包2	深鉢	胴部		条痕(縦)	条痕(斜)	長石微粒	有	暗褐色	
125	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	

押印 番号	出志 通標	器形	部位	法要	調整方法		粘着	繊維	色調	備考
					外部	内部				
126	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
127	包2	深鉢	胴部		磨滅不明	条痕(斜)	長石粒	有	茶褐色	
128	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	ナデ	長石微粒	有	暗褐色	
129	包2	深鉢	胴部		条痕(縦)	ナデ	長石粒 石英粒	有	褐色	
130	包2	深鉢	胴部		条痕(斜)	条痕(横)	長石微粒	有	橙褐色	
131	包2	深鉢	胴部		条痕(斜)	条痕(斜)	長石粒	有	暗褐色	
132	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(縦)	長石微粒	有	暗褐色	
133	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
134	包2	深鉢	胴部		条痕(斜)	磨滅不明	長石粒 石英粒	有	暗褐色	
135	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	結条体圧痕	長石粒 褐色粒	有	暗褐色	
136	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(縦)	長石粒	有	暗褐色	
137	包2	深鉢	胴部		条痕(斜) 結条体圧痕紋	条痕・結条体圧痕	長石粒	有	暗褐色	
138	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
139	包2	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
140	包3	深鉢	口縁部		結条体圧痕紋(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
141	包3	深鉢	口縁部		縄紋?	ナデ	長石粒	有	暗褐色	
142	包3	深鉢	口縁部		沈線紋(縦・斜)	磨滅不明	長石粒	有	黒褐色	
143	包3	深鉢	胴部		条痕(斜)	磨滅不明	長石微粒	有	茶褐色	
144	包3	深鉢	口縁部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	暗褐色	
145	包3	深鉢	口縁部	口径 14.0	隆帯・縄紋(L R横)	ナデ(横)	長石微粒	有	黄褐色	
146	包3	深鉢	口縁部	口径 27.2	隆帯・縄紋?	ナデ(横)	長石微粒	有	茶褐色	1と接合
147	包3	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	ナデ	長石粒	有	暗褐色	
148	包3	深鉢	胴部		条痕(横)	条痕(横)	長石微粒	有	黄褐色	
149	包3	深鉢	胴部		隆帯(縦)・刺突紋 押引紋	条痕(横)	長石粒	有	暗褐色	
150	包3	深鉢	胴部		縄紋(L R横)	ナデ	長石粒	有	暗褐色	
151	包3	深鉢	胴部		縄紋(R L横)	ナデ(横)	長石微粒	有	暗褐色	

第1号住居址



第2号住居址

土坑10



土坑13

土坑14



第27図 桜田遺跡 土器(1)

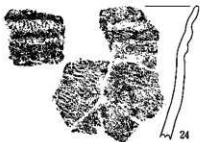
土坑17



土坑21



土坑59



土坑36



土坑41



土坑78



土坑51



土坑42



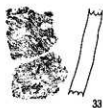
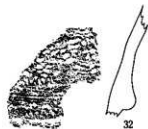
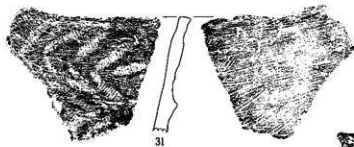
土坑79



土坑98



土坑96

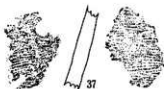


第28図 桜田遺跡 土器(2)

土坑127



ビット25



ビット53

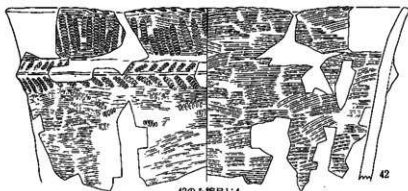


ビット47



焼明

遺物包含層1

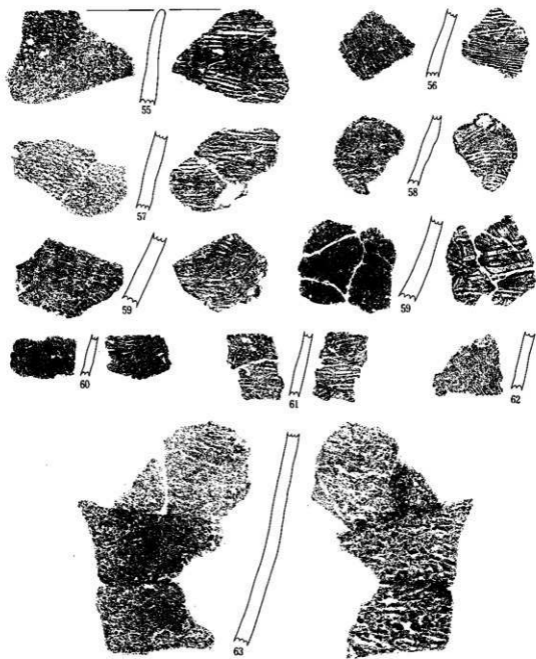


42のみ縮尺1:4



第29図 桜田遺跡 土器(3)



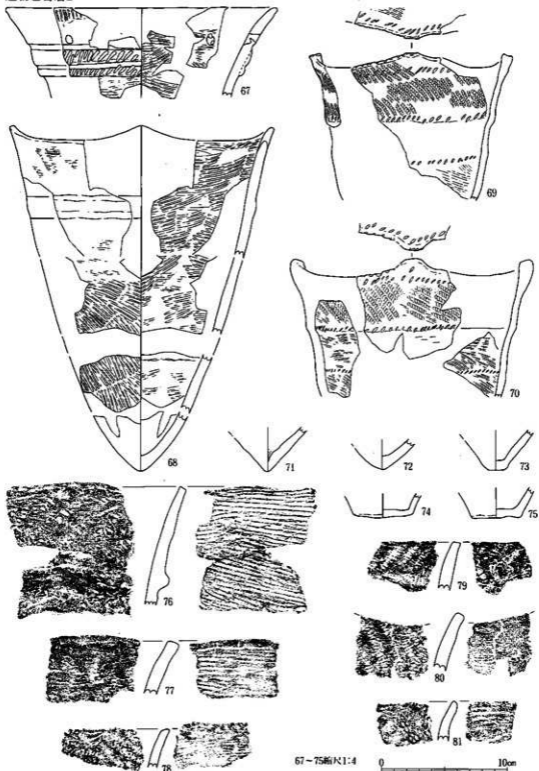


検出面



第30図 桜田遺跡 土器(4)

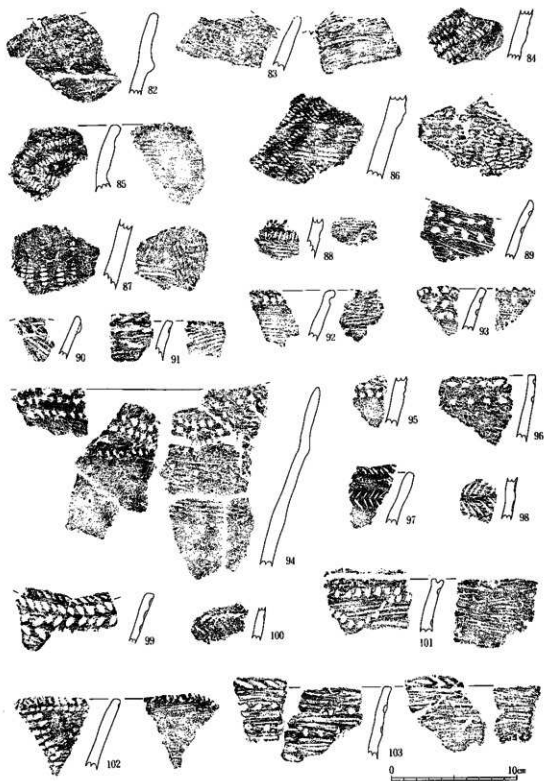
遺物包含層2



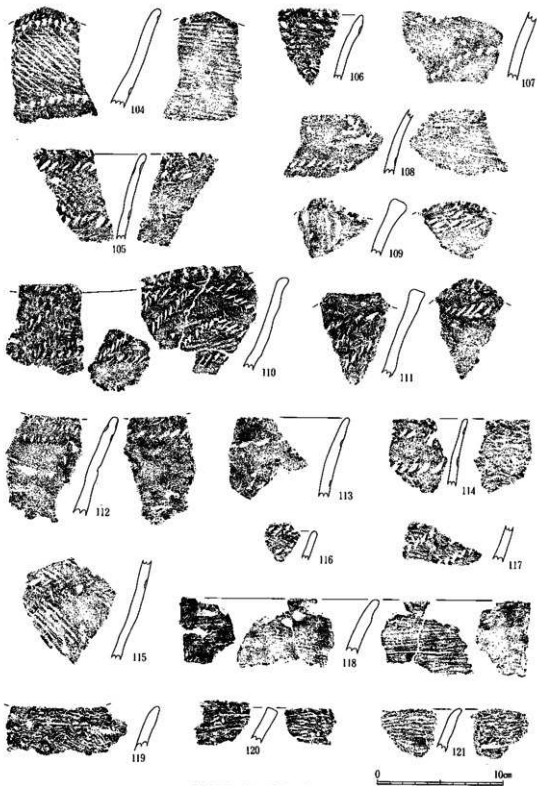
67-75縮尺1:4

0 10cm

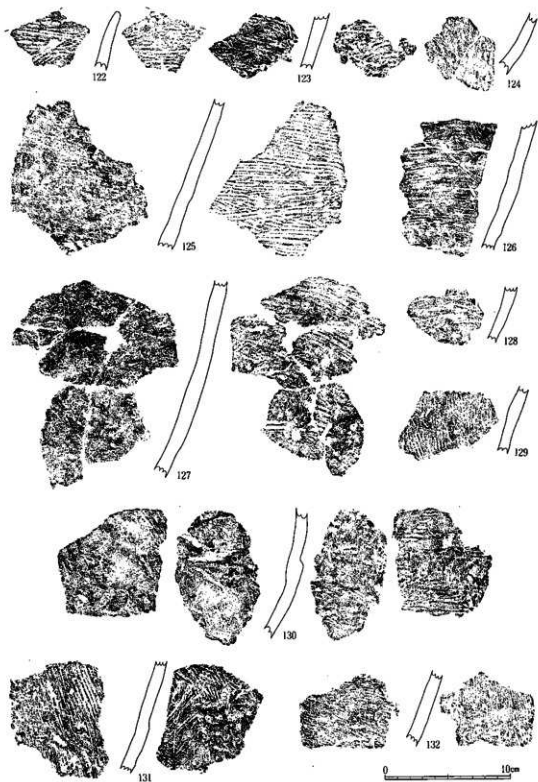
第31図 桜田遺跡 土器(5)



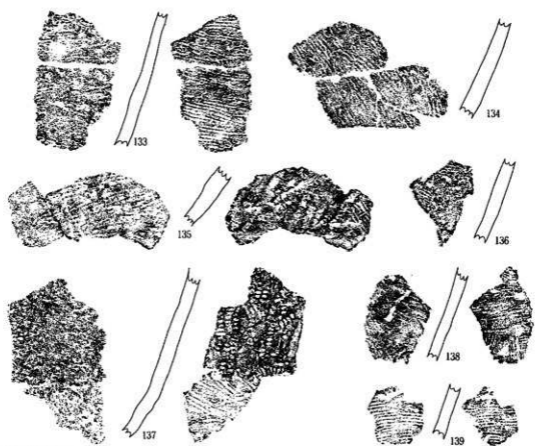
第32圖 桜田遺跡 土器(6)



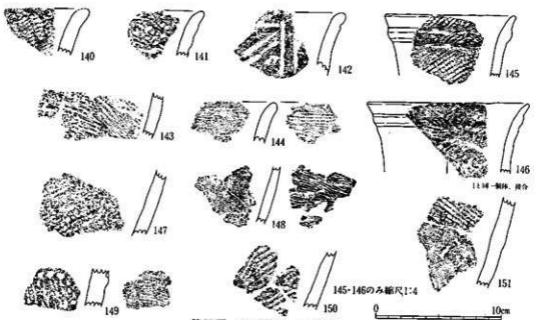
第33図 桜田遺跡 土器(7)



第34図 桜田遺跡 土器(8)



遺物包含層3



第35図 桜田遺跡 土器(9)

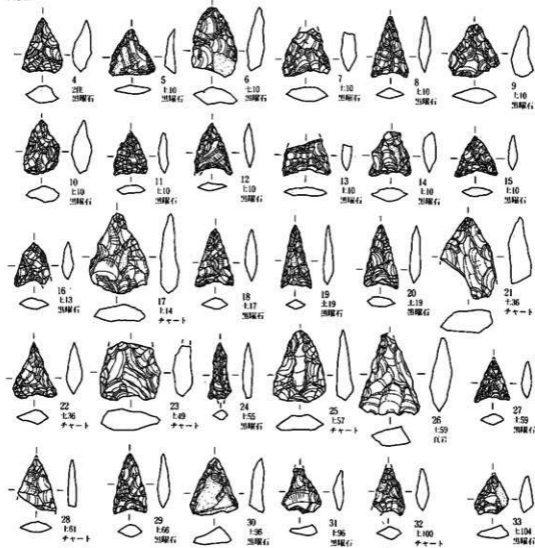




尖頭器



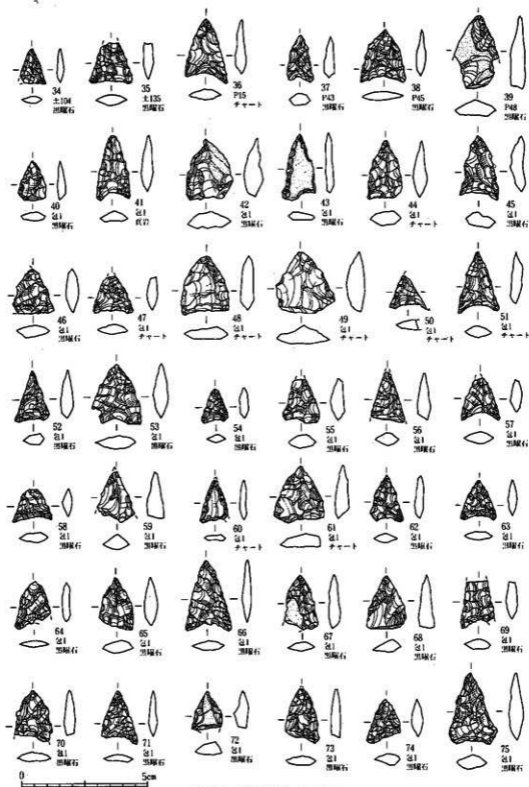
石鏃



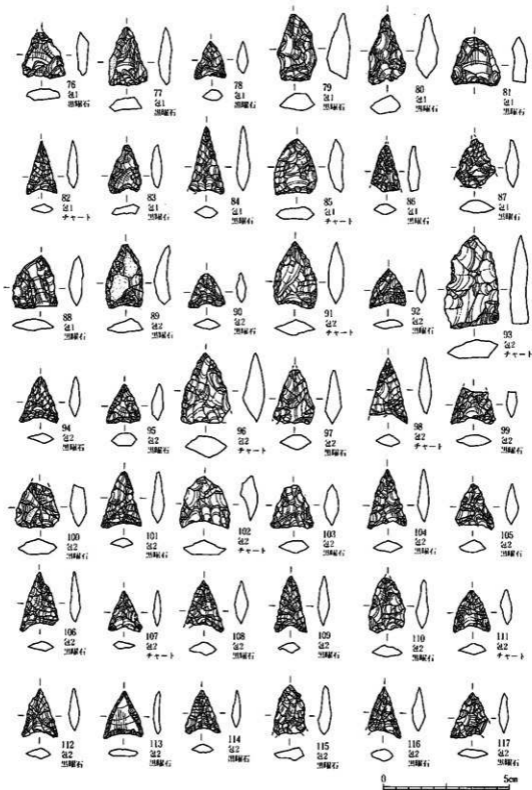
第36図 桜田遺跡 石器(1)



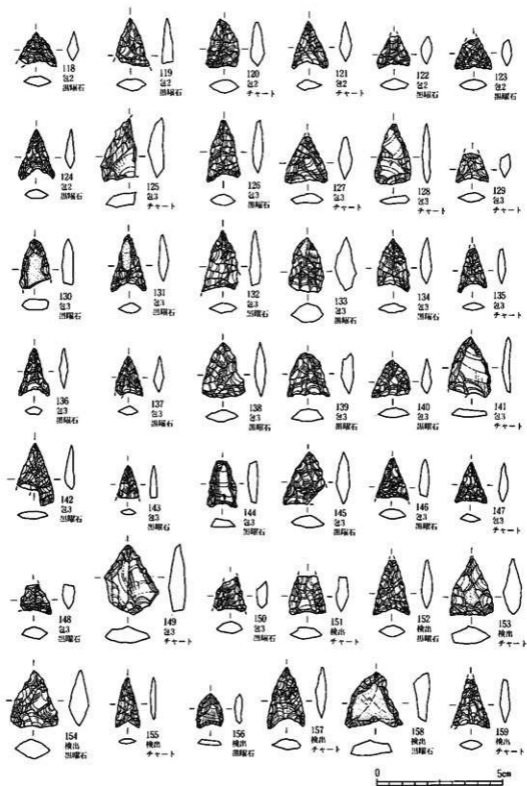




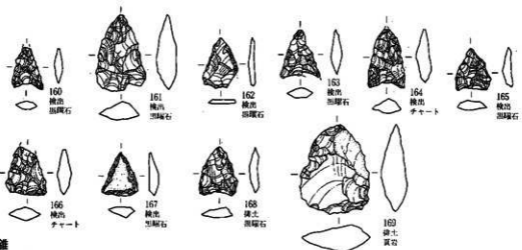
第37図 桜田遺跡 石器(2)



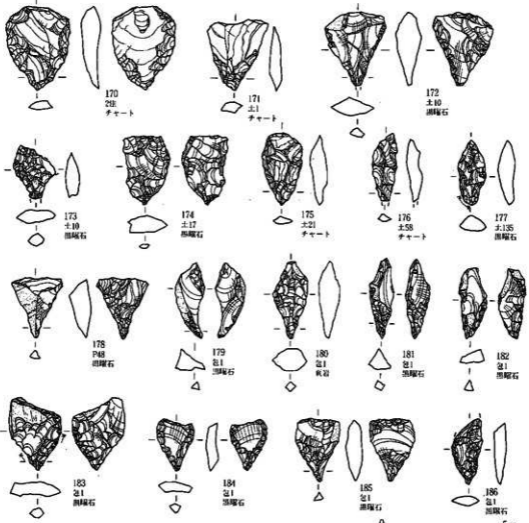
第38図 桜田遺跡 石器(3)



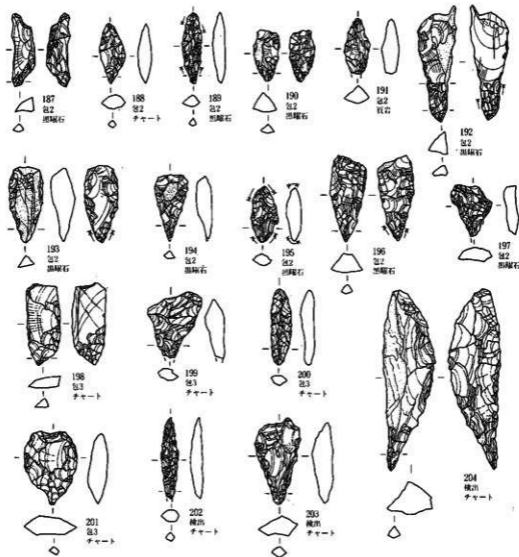
第39図 桜田遺跡 石器(4)



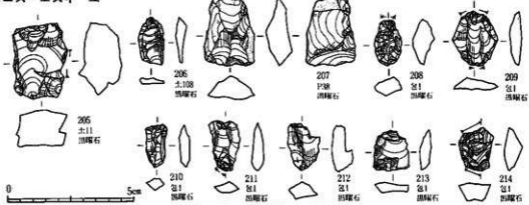
石錐



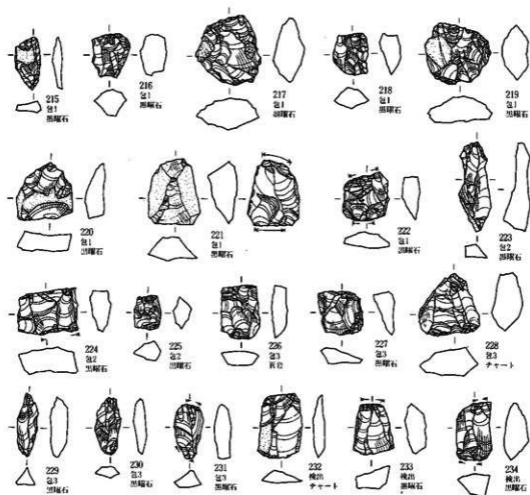
第40図 桜田遺跡 石器(5)



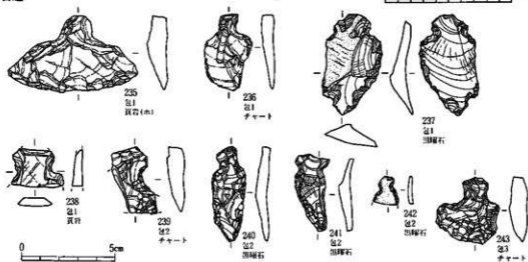
ビエス・エスキーユ



第41図 桜田遺跡 石器(6)

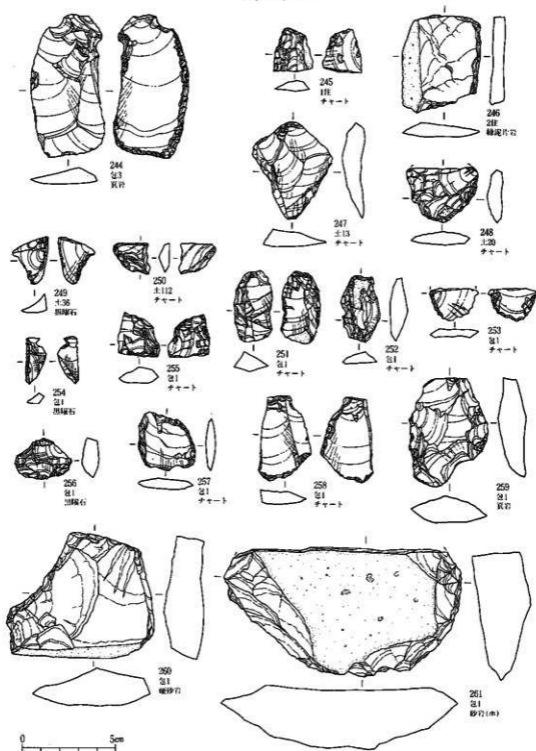


石匙

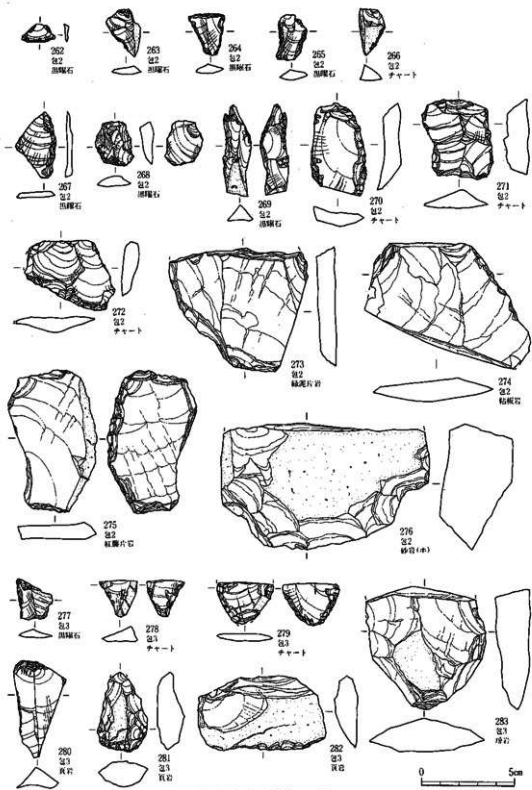


第42図 桜田遺跡 石器(7)

スクレイパー

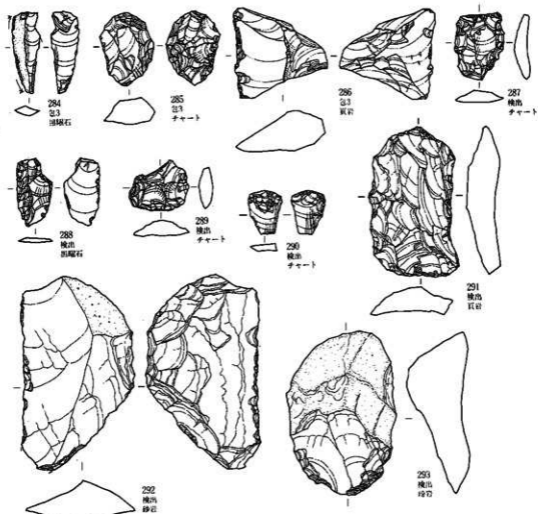


第43図 桜田遺跡 石器(8)

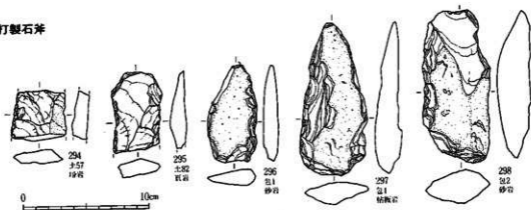


第44図 桜田遺跡 石器(9)

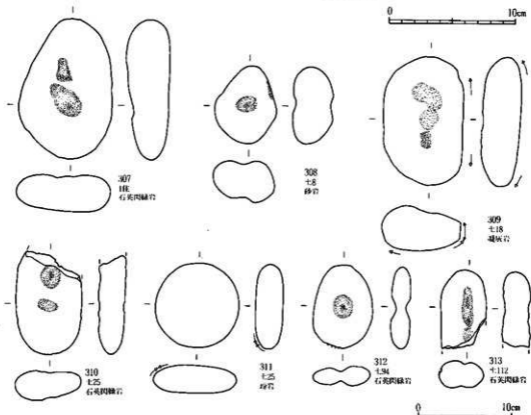
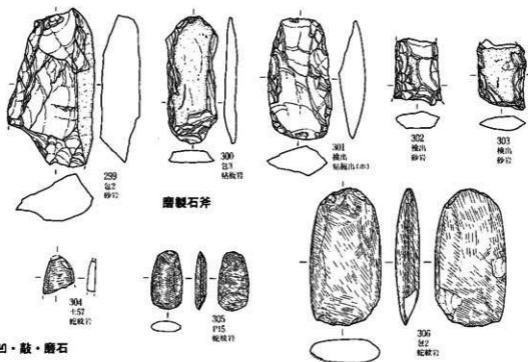




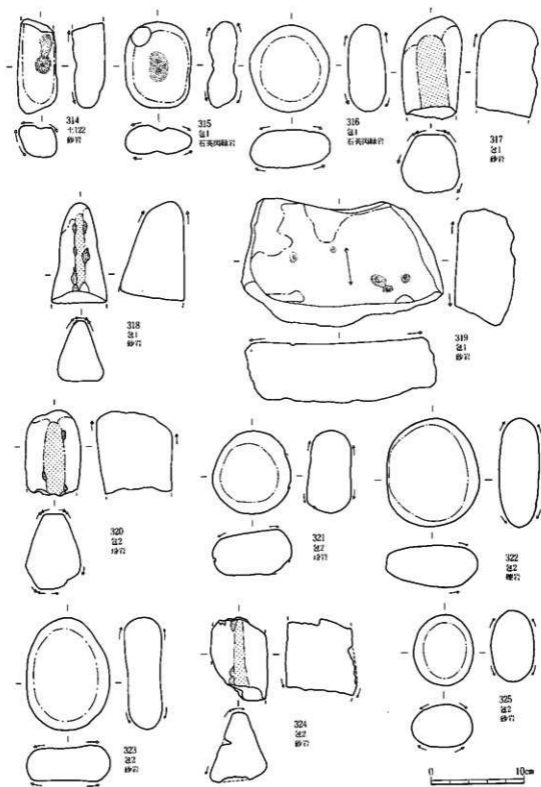
打製石斧



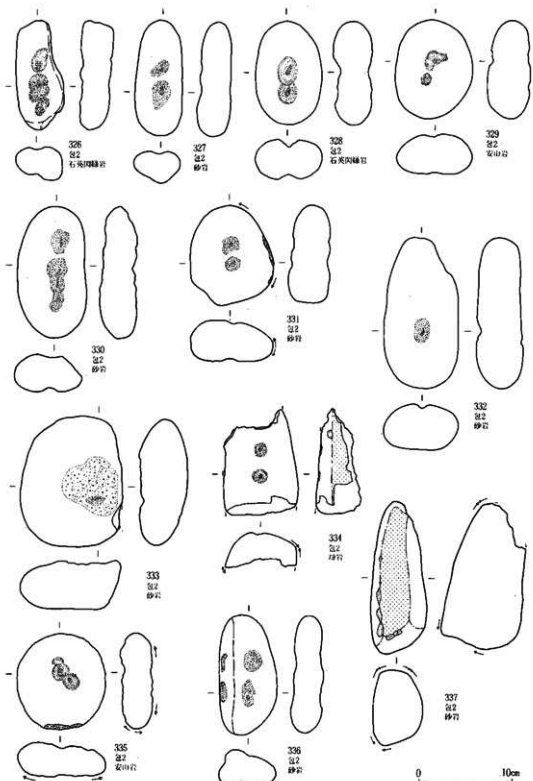
第45図 桜田遺跡 石器(10)



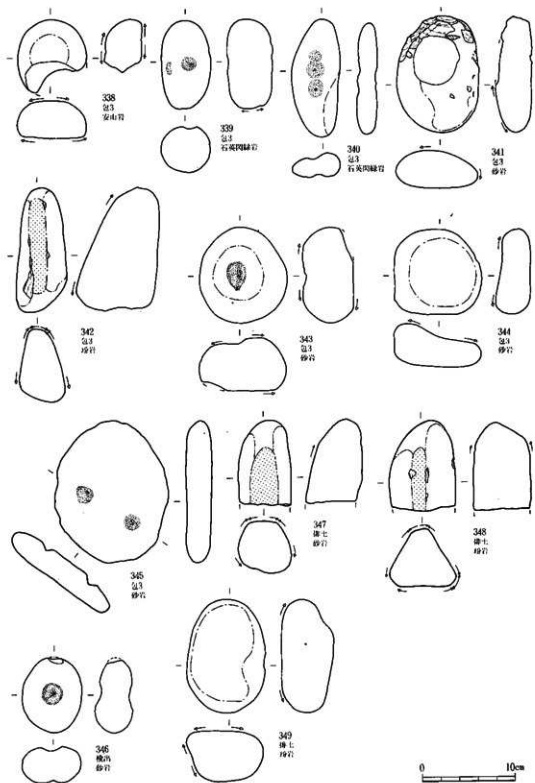
第46圖 桜田遺跡 石器(10)



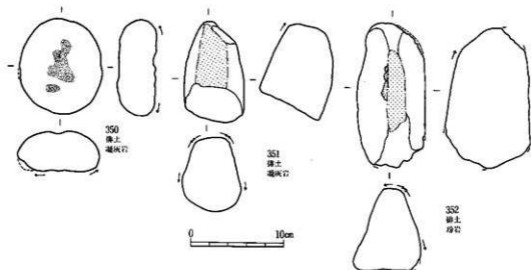
第47図 桜田遺跡 石器(1)



第48図 桜田遺跡 石器⑩

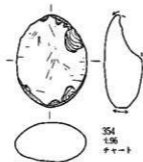
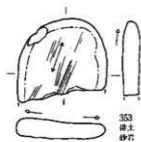


第49圖 桜田遺跡 石器14

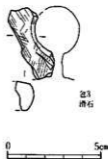


砥石

研磨機



袂状耳飾



第50圖 桜田遺跡 石器(19)・石製品

## 4 まとめ

今回の調査では図らずも松本平では希少な縄紋時代早期末の集落址、多量の遺物を出土することとなった。ここでは遺構・遺物について概観し、まとめとしたい。

まず集落の立地と周辺環境についてみるならば、集落は女鳥羽川と深沢川に挟まれた日当たりの良い南向きの段丘斜面の先端に営まれている。深沢川を渡り、馬飼峠を越せば四賀村へ、また女鳥羽川を渡り、三才山峠を超えて小県地方へと抜けるルート上の遺跡ということができる。これらのルート上の遺跡についてはほとんど実態が把握されていないが、本遺跡の北西600m、深沢川の左岸では神子柴型石斧が採集され、本遺跡の調査でも有舌尖頭器が出土している。また女鳥羽川を下り、横渡し遺跡ではナイフ形石器、岡田神社付近でも有舌尖頭器が採集され、断片的ながら旧石器～縄紋時代草創期の資料が得られている。しかし集落址は未検出であり、また早期前半の遺跡も未確認である。桜田集落成立以前の様相を語るには今後の資料蓄積を待たねばならない。

次に本集落と同時期、早期末～前期初頭の遺跡は矢作、塩辛等があり、遺構の検出はないものの土器・石器が出土しており、当遺跡とともに一遺跡群を構成していたものと考えられる。しかし続く前期中・後葉の遺跡もやはり判然とせず、明確な集落址が捉えられるようになるのは前期末、中期以降になってからである。

検出された集落の内容を見ると、傾斜面のより高い位置に2棟の住居が営まれ、あたかも対をなすかのように2基の集石炉が近辺に設けられている。さらにこれらを取り巻くように土坑群、とりわけ人為構築の確実なb・d類としたものが分布し、台地縁辺部の低地・窪地に廃棄場が設けられている。集落は北西、和田遺跡へと連続すると考えられるが、傾斜が急激となり、住居址も数軒程度と推察される。

さて、豊富に出土した遺物は数少ないこの時期の様相を知る上で貴重なものとなった。

まず土器は絡条体圧痕紋、刺突紋で飾られ、地紋に絡条体条痕や貝殻条痕を施した茅山上層式併行の土器群を主体に、東海系の粕畑式ないしはその影響の色濃い土器群が伴い、松本平をはじめ県内でもまだ不鮮明な早期末葉における土器様相の一端を示し得た。

土器を上回って豊富に出土した石器群は当時の生産状況をよく物語っている。なかでも石鏃は典型的な石器の約半数を占め、狩猟が重要な生産基盤となっていたことは確かである。一方凹石や磨石も全体の17%強と石鏃に次いで多く、植物質食料の比重も高かったことを示している。また石器の素材としては黒曜石が主体ながらもチャートの占める率が高く、中期の塩辛遺跡等とともに松本市北部の状況を示している。石器製作、殊に石鏃に関しては未製品が多く出土しており、原石も得られている。また遺物包含層や土坑の覆土には無数の微細な黒曜石片が観察され、集落内での石器生産が活発に行われた状況が窺い知れた。このほか、尖頭器、磨製石斧等少ないながらも良好な資料を得ることができ、土器とともに松本平の早期末葉の標式的な資料になろう。

## V 堂田遺跡の調査

### 1 調査概要

堂田遺跡は松本市岡田伊深60、61-1、65、113-1番地一帯に位置し、女鳥羽川中流域の右岸に立地している。荻谷原峠への登り口付近の北国脇往還（善光寺道）に西接し、現在の問屋原集落の南西に位置している。地形的には標高720～760mの北高-南低の山腹斜面に立地している。調査前の本遺跡は奈良・平安時代の遺物散布地として知られていただけで、その性格は不明であった。

調査対象は県営は場整備事業岡田本郷地区堂田工区の14,360㎡である。現在の地形は傾斜地での耕作地の造成と耕作のため、部分的に改変を受けていることが窺えた。そのため、調査地区は人為的な改変を余り受けていない緩傾斜地を設定し、遺跡の性格を捉えるため間隔をあけて北から順にA～C区を設定した。

各地区の検出面の標高は、A区が741.00～742.20m、B区が740.80～741.60m、C区が737.80～739.20mである。

本遺跡の基本土層（C地区南端地点）は次のとおりであり、各地区で層の厚さに違いはあっても層序の違いはほとんど認められなかった。

- I：灰色土 36cm（水田耕作土）
- II：黄灰褐色土 30cm（鉄分溶脱層）
- III：黄色～暗黄褐色土 51cm（2次堆積ローム：遺構検出面）
- IV：暗褐色土 15cm（C地区の谷状地形の堆積土）

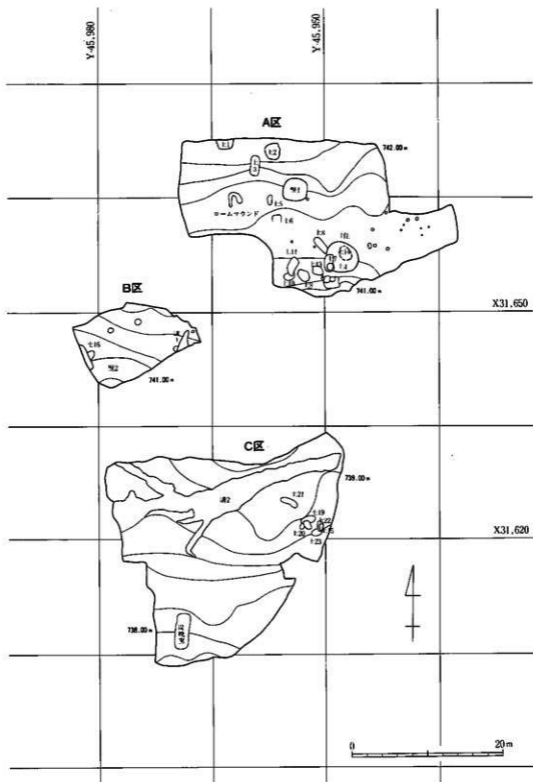
このうち、III層が遺構検出面で、A・C地区では礫混じりの部分が認められた。また、B地区では検出面が黄褐色～黄灰白色粘質土で、他地区と様相を異にしていた。なお、IV層はC区の南端で確認された谷状地形を埋没させた腐植土系の土層で、A・B地区には認められない。

調査にあたっては重機を使用して耕作土を除去している。測量は第Ⅷ系国家座標に基づいて、調査区内に1辺3mの方眼で区画設定して測量を行った。

各地区の調査面積および検出遺構、出土遺物は以下の通りである。

調査面積	A 区	496㎡
	B 区	116㎡
	C 区	609㎡
	合計	1221㎡
検出遺構	竪穴住居址	1基（縄紋）
	竪穴状遺構	2基（縄紋？・時期不明）
	炭焼窯	1基（平安）





第51図 堂田遺跡 遺構配置

	土坑	23基（時期不明）
	ピット	34基（時期不明）
	溝状遺構	2基（平安・時期不明）
出土遺物	縄紋時代	土器（前期） 石器（スクレイパー・磨石）
	平安時代	土器・陶器類（土師器・須恵器・灰釉陶器）
	中世	陶器類（山茶碗）

縄紋時代と推定される遺構はA区だけで、B・C区には及んでいない。土坑はA地区南端とC区東端に集中している。溝状遺構のうちC区では、東西に横切る自然流路から平安時代の遺物が出土している。炭焼窯はC区南端に位置し、平安時代以前と推定される。

遺物はいずれも少量の出土であり、遺構に本来伴うものは少なく、大半が遺構の埋没過程で混入したものと考えられる。

## 2 遺構

### 1 竪穴住居址

#### (1) 第1号住居址（第52図、図版21）

位置 A区 平面形 不整形円形 規模 長436×短404×深36cm  
床面積 10.5㎡(11.5㎡) 主軸方位 不明 炉 中央東南寄り・地床炉

遺構 覆土は単層で、炭化物と小礫を混入する暗褐色～黒褐色土である。特に、中央寄りで黒色の割合が増しているが漸移的な変化であり分層することはできなかった。また、北側と東側の床上18～30cmの覆土中から多量の中～大形礫が出土している。これらの礫は住居の埋没過程で、上方斜面から礫が流入したものと考えられる。なお、本址の東側は不整形な弧状を呈しているが、礫の流入に起因する可能性が考えられる。壁は斜めに立ち上がっているが、傾斜地に作られているため、南側の壁高は約10cmしか捉えることができなかった。

床面は部分的に礫が混じる黄～黄褐色土である。ピットは9基が確認されているが、いずれも浅い。このうちP1とP5～P9は壁際に沿って巡っていることから、柱穴の可能性が考えられる。

炉は住居中央からやや東南寄りに位置し、長径36×短径32cmの楕円形を呈する地床炉である。なお、本址は調査時に掘りすぎってしまったため、炉の深さはわずかに2cmしか捉えることができなかった。また、住居のはば中央で14×11cmの範囲で焼土面が認められている。

遺物 床面に接して出土した遺物はないが、覆土から縄紋土器の破片2点、スクレイパー1点、磨石1点、チャート原石1点（165g）、黒曜石の2次加工を含む剥片・砕片17点が出土している。

帰属時期 出土土器から縄紋時代前期末葉の遺構と考える。

## 2 竪穴状遺構

### (1) 第1号竪穴状遺構 (第52図、図版21)

A区に位置している。平面形は不整形円で、規模は長径324×短径292×深さ27cm、底面積7.2㎡を計る。遺構の新旧関係はP1よりも古い。

覆土は単層で、炭化物と礫を混入する暗褐色土である。壁はほぼ直に立ち上がっている。底面は黄色土で、地山中に中・大形礫がかんでいるため、多少の凹凸が認められる。

ピットは壁際付近で2基が検出されている。いずれも直径22cm前後、深さ10～14cmと浅い。なお、底面中央には風化した砂岩礫数個と若干の炭化物が検出されている。しかし、焼土がないため炉址とは認定できず竪穴状遺構として扱ったが、住居址の可能性も考えられる。

出土遺物は縄紋土器の破片1点が覆土中から出土ただけで、本址の時期は不明である。

### (2) 第2号竪穴状遺構 (第52図)

B区に位置している。西側が調査区域外になるが、平面形は方形と推定され、東壁が長さ328cm、残存底面積1.5㎡を計る。遺構の新旧関係は土16より新しい。

覆土は鉄分の集積が認められる灰白～灰色粘質土である。壁の立ち上がりは直に近いが、北半はなだらかに傾斜している。東南隅には周溝状の落込みが認められる。底面は起伏に富みながら、西下がりや調査区外へ傾斜していることから、住居址の可能性は少ない。

出土遺物はなく、本址の時期は不明である。

## 3 炭焼窯

### 第1号炭焼窯 (第53図、図版22)

C地区の南端に位置している。平面形が隅丸長方形を呈するが、焚口側(南側)は外湾している。長軸488×短軸184cmを計り、検出面からの最深部は33cmを計る。

本址は遺構検出の段階で、掘方外側に焼土、内側に多量の炭化物・焼土が認められた。覆土は5層に分層されている。最下層のV層は製炭時に生じた焼土(炭・暗灰色土を微量に混入している)である。IV層は炭・焼土をわずかに含むだけの暗黄灰色土であることから、土壁が崩落してできた層と考えたい。I～IIIは炭の取り出し後に堆積した土層で、下層にくるほど炭・焼土の混入量が増し、土色も黒色化が大きくなっている。

壁は残存高が浅いが、斜めに立ち上がっており、窯の横断面は皿状を呈している。なお、焚口付近は検出面が浅いため、わずかな立ち上がりしか捉えられなかった。窯床は雑泥じりの黄色土で、焚口付近はほぼ平らであるが、後述する焼土面付近から奥は傾斜角度3～4°で上昇している。

炭化木の出土状況は奥壁際の底面直上と両側壁際にまとまって出土している。炭化木は直径1.5～7cm、長さ数cm～60cmの範囲にあるが、土圧の変形を受けているものが多い。比較的遺存状況が良いものでは直径2～3cm、長さ20cm前後である。また、これらの内側には焼土面が広く認められ、奥側から徐々に幅を狭めながら焚口から1m付近にまで及んでいる。なお、焼土面には径5～8cm前後、深さ5cm位の小さな穴が多数認められている（小穴については図化していないので写真図版を参照されたい）。焚口部分には焼土面は及ばず、焼土・炭化材も余り見られない。最下端に長75×幅27×深さ11cmの落込みが認められる。

上記のことから、本址では製炭終了後の炭出しの際に、炭化木の取り残しがあり、焚口では灰や焼土の掻き出しが行われた可能性がうかがえる。

なお、炭焼窯の上部構造については、案内から窯壁の出土はなく、また堀方周辺に上部構造に関連するようなピットや煙道などの施設は認められなかったことから不明である。

出土遺物は検出面と覆土から須恵器の杯、黒色土器Aの破片が出土している。土器を出土した覆土が攪乱を受けていないことから、本址は平安時代には埋没過程にあったと考えられる。本址の築窯時期は平安時代以前と広く捉えておきたい。

#### 4 土坑（第53・54図）

概ね直（長）径80cm以上の大形の穴を土坑として捉えた。23基が検出されているが、すべて時期は不明である。土坑の分布は偏在しており、A地区では1住・堅1の西側に、B地区は調査地西端に1基、C地区は調査区の東端にまとまって検出されている。

土坑は平面形や深さ、底面形態など多様である。以下では、特徴的な土坑についてのみ略述する。

平面形が方形を呈し、底面が平らな人為的なものに土坑1・6・12がある。また、（長）楕円形を呈し、底面が比較的平らな大形土坑として土坑3・21がある。

このうち土坑3は礫混じりの底面中央が一段掘りくぼめられ、長51×幅44×厚さ29cmの大形礫が置かれていた。さらに、礫の周囲に暗灰色粘質土（粘土）が置かれてあり、一部は礫に覆いかぶさる様に盛り上げられていた。

なお、この他に底面中央に礫を有するものに土13がある。

土坑2は不整形の大形土坑である。底面は南西部がやや低く、この部分に20数個の礫がまとまって出土している。礫に被熱痕は認められない。なお、使用痕が認められなかったため石器として扱えないが、山石とは明らかに異なる円礫1点が出土している。また、本址は北東部にピット1基とコ字状の溝状の落込みが見つかった。

出土遺物は土坑3・14から黒曜石の削片・碎片、土坑7・9から縄紋土器の破片が少量出土している。これらはすべて覆土からの出土であり、土坑の時期を特定するものではない。

## 5 ビット

34基のビットが検出されている。分布はA地区では東側と1住の周辺、C地区では東側の土19・20の周辺に集中している。遺物はP34の覆土から須恵器の杯、土師器の甕の破片少量が出土しただけである。ビットの時期・性格を特定できるものは認められない。

特徴的なビットとしてP23・P24(B地区)がある。これらは斉一な円形を呈し、底面も平らな人為的なビットである。特に、P23は底面が上面よりも大きい袋状のビットである。覆土はいずれも2層からなり、上層が鉄分が集積している灰白色粘土、下層が暗灰色～黒灰色粘土である。このことから、P23・P24は粘土の貯蔵穴の可能性が考えられる。

## 6 溝状遺構

### (1) 第1号溝状遺構

B地区の東端に位置している。北北東(高)～南南西(低)、長さ2.3m、最大幅1.4mの溝であるが、南側は調査区域外になる。覆土は2層からなり、いずれも鉄分の集積が認められる。溝の横断面は浅い皿状を呈する。南端部分で大礫が底上8cm、拳大礫が底面直上から出土している。遺物の出土がなく、本址の埋没時期は不明である。

### (2) 第2号溝状遺構(第55図、図版23)

C地区の北寄りに位置する。長さ30.7m、幅1.6～3.9mの東北東(高)～西南西(低)に流下する自然流で、両側は調査区外になる。中央やや西寄りで溝の幅が最大となり、北西に1本(長さ7.8m)、南西に2本の溝(長さ3.5m、4.7m)が分流している。このうち南西側の2本は、後世の耕作で途中で消失している。溝の断面は掘り鉢状ないしは壘状を呈し、底面には鉄やマンガンの集積が観察される。覆土は地点によって若干異なるが、基本的には最下層に灰色砂が堆積し、砂-砂質土-粘質土の堆積が2～3回にわたって繰り返されている。また、鉄分の集積が間層を挟んで観察される。このことから本址は流水路で、数次にわたる氾濫で埋没したものと推定される。

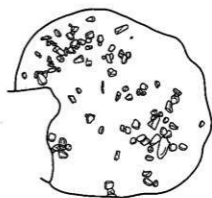
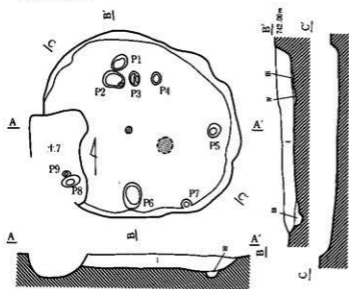
遺物は検出面とトレンチ内から須恵器の杯・甕、黒色土器Aの破片が出土している。また、下層の砂層を中心として炭化植物や生木が出土している。本址の埋没時期は、出土遺物から平安時代と推定される。

## 7 その他

A区の東側でルームマウンド1基が見つかっている。掘り下げの結果、遺物は認められず時期は不明である。

第1号住居址

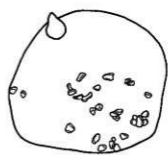
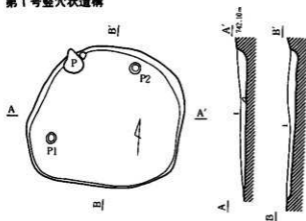
遺物出土状況



I : 2 (Ab, Kb)  
 II : 2 (Cb)  
 III : 2  
 IV : 17

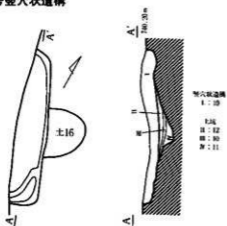
第1号壁穴状遺構

遺物出土状況



I : 2 (Ba, Ea)

第2号壁穴状遺構

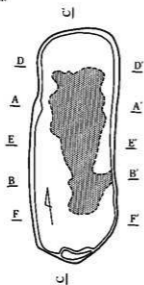


第2号壁穴状遺構  
 I : 10  
 II : 12  
 III : 30  
 IV : 11



第52図 堂田遺跡 住居址・壁穴状遺構

炭焼窯

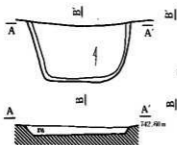


- I : 11(Ca, Ea)
- II : 11
- III : 14(Ch, Fb)
- IV : 14(Ca, Ua)
- V : 20(Ca, Ua)

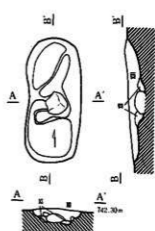
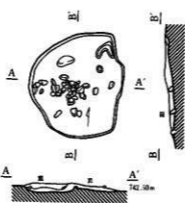
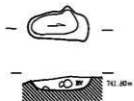
第1号土坑

第2号土坑

第3号土坑



第5号土坑



- I : 2
- II : 2(Ha, Ha)
- III : 2(Ha)
- IV : 6
- V : 12
- VI : 12(Aa)
- VII : 17(Ha)
- VIII : 17(Ua)
- IX : 18
- X : 10
- XI : 11
- XII : 11(Ha, Ea)
- XIII : 14
- XIV : 14(Ea)
- XV : 12
- XVI : 19(Vc)



第53图 堂田遺跡 炭焼窯・土坑(1)

第6号土坑



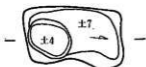
第9号土坑



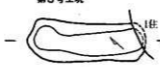
第13号土坑



第4・7号土坑



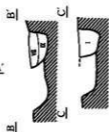
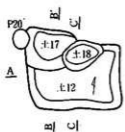
第8号土坑



第10・11号土坑



第12・17・18号土坑



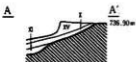
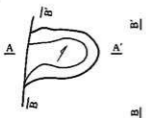
第14号土坑



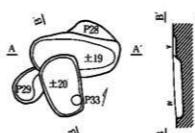
第21号土坑



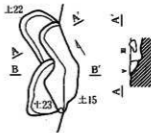
第16号土坑



第19・20号土坑



第15・22・23号土坑

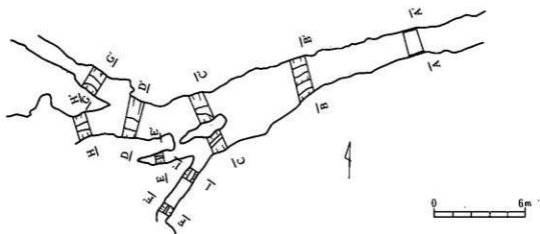


第54图 堂田遺跡 土坑(2)





第2号溝状遺構



I : II	III : II (Os, Pst)
II : II (Pc, Ycl)	III : III (Os, Vb)
III : III	IV : III (Pst)
IV : III (Ycl)	V : III (Pst)
V : III (Ab, Pst)	VI : I
VI : III	VII : 4



第55図 堂田遺跡 溝状遺構

### 3 遺物

#### 1 縄紋時代の遺物

##### (1) 土器 (第56図)

1住出土の1点のみを拓影で示し得た。他にも堅穴状遺構、土坑から若干の破片の出土があるが、無紋であったり、磨滅が著しいものばかりで図示するに至らない。

1は深鉢の口縁波状部の破片で、波頂部には一對のコブ状突起が付されている。外面には口唇に沿って斜位に、また波頂部から垂下して集合沈線紋が施紋される。胎土は長石の砂粒を含み、焼成良好、橙褐色を呈する。他に同一個体の頸部の屈曲部分の小破片が出土している。施紋・器形からみて前期末葉に位置付けられよう。

##### (2) 石器 (第56図)

定形的な石器は2点が出土しており、いずれも1住からの出土である。このほかに黒曜石・チャートの原石・剥片類が出土しているが、これらについては報告を割愛する。石質については太田守夫氏にご教示をいただいている。

1は黒曜石製のスクレイパーで、完形品である。縦長剥片を素材にし、片側縁に背面側から刃部調整を施して直刃を作り出している。また、背面の末端付近には連続する微細な剝離面痕があり使用痕と考えられる。

2は石英質岩製の磨石で、完形品である。不整な楕円礫を素材にしている。右側縁の下方は敲打されており、その敲打面に接した下端に4.0×2.5cmの磨面を有している。

#### 2 平安時代以降の遺物 (第56図)

遺物出土量は大変少なく、土器・陶器類を4点のみ図示し得た。

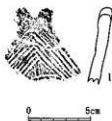
2・3は平安時代の須恵器で、第2号溝状遺構から出土した。器形は壺類、おそらく四耳壺等の底部破片である。外面に縦位の平行タタキ目紋が観察され、褐色の自然釉が薄く付着する。底面はナデ仕上げしている。平安時代に係るものとしては他に土師器、黒色土器A、須恵器の杯類の小破片があるが、図示は不可能であった。そのほとんどは第2号溝状遺構、炭焼窯から出土している。

4は中世の山茶碗の底部破片で、C区検出面からの出土である。白色の精良な胎土が用いられ、断面三角形の低い貼付高台の下面には糞・糶の圧痕が、また底面には回転糸切り痕が観察される。

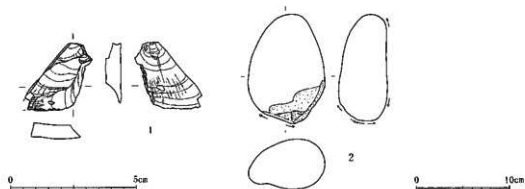
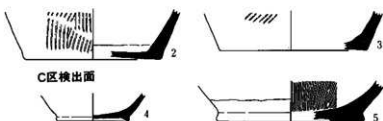
他に中世の遺物としては内耳鍋の小破片が出土しているが、図示不可能である。

5はすり鉢の底部破片で、体部外面に褐色の鉄釉が施され、削り出しの底部は無釉軸である。内面の篩目は密に施され、使用による磨滅が著しい。篩目や釉のあり方から見て、近世以降に位置付くものと考えられる。

第1号住居址



第2号溝状遺構



第56図 堂田遺跡 出土遺物

#### 4 まとめ

今回の調査で、堂田遺跡が縄紋・平安時代の複合遺跡であることが確認できた。特に、縄紋時代前期末葉の集落の一端と、平安時代以前の炭焼窯の発見は貴重である。

縄紋前期末の集落址はこれまで市内では赤木山遺跡群の白神場遺跡で検出されているだけであり、遺物の出土こそ非常に少なかったものの貴重な遺構資料を提供することとなった。

炭焼窯は中山古墳群内で確認された2基の窯（奈良時代と推定される）に次いで市内では3例目の発見である。しかし、ごく狭い範囲での調査であったため、遺構の目的、遺跡の性格を捉えるまでには至らなかった。遺物の分布状況から見て古代の遺跡の主体は調査地の南方に求められ、塩辛遺跡へと連続していくものと考えられよう。

## VI 縄渡し遺跡の調査

### 1 調査概要

縄渡し遺跡は松本市岡田町・洞に所在し、女鳥羽川が大きく東に膨らむ右岸の段丘上に立地する。遺跡の標高は690～705mを測り、東端部では女鳥羽川に向かい強く傾斜し、小段丘陵が数段形成されている。遺跡中心部(国道)と現河床との比高は14mを測る。

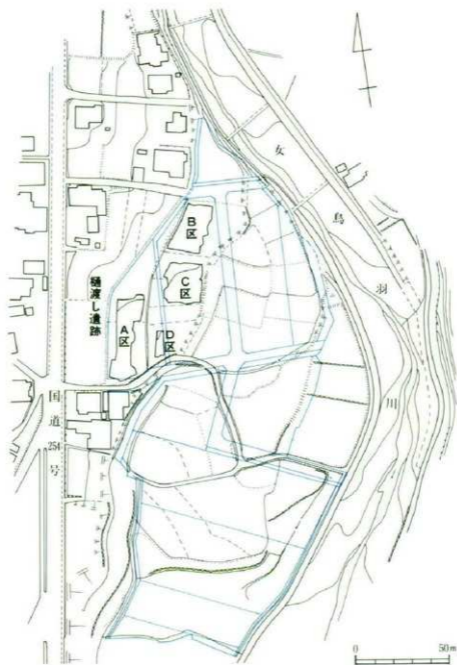
今回の調査は国道254号線の東側、女鳥羽川に挟まれた洞地区一帯が対象となった。分布調査の結果から国道寄りの高い地点に遺構が存在するものと想定して4ヶ所の調査区を設定、本調査を実施することとした。

調査の方法はバックホーにより表土を除去した後、人力により遺構検出作業、掘り下げを行った。また遺跡の測量については国土座標を導けなかったため、磁北を基に真北方向を割り出し、任意に3mの方眼区画を設定した。

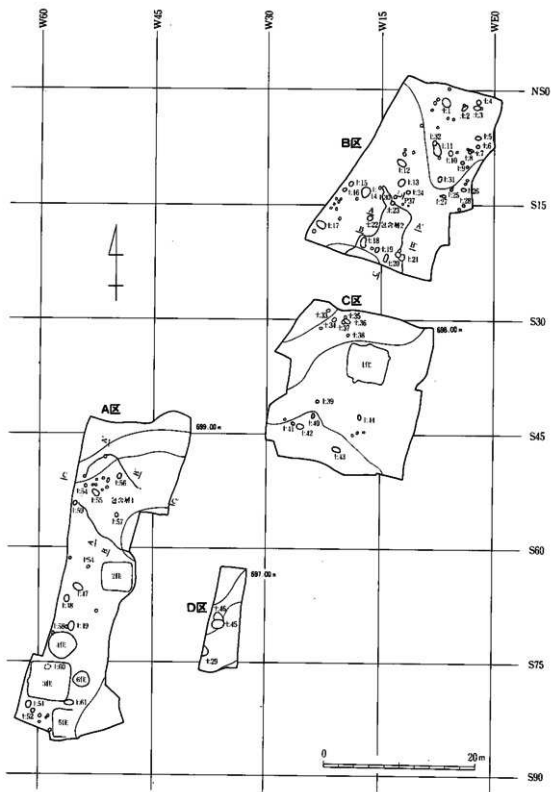
本調査の結果、縄渡し遺跡は縄紋時代中期、奈良・平安時代の集落址であり、今回の調査地点はその東縁部にあたることが判明した。遺構・遺物等の内容については下記、および本文に詳述することとする。

なお、土坑については調査時に欠番が生じており、土坑一覧表に明記している。またピットは必要なもの以外本報告では番号を付さないものとした点を記しておく。

調査面積	A地区	460㎡
	B地区	380㎡
	C地区	375㎡
	D地区	50㎡
	合計	1265㎡
検出遺構	竪穴住居址	6基(縄紋2・奈良1・平安3)
	土坑	59基(縄紋)
	ピット	58基(縄紋・平安)
	遺物包含層	3基(縄紋)
出土遺物	旧石器時代	石器(ナイフ形石器)
	縄紋時代	土器(中・後期) 石器(石鏃・石錐・ピエスエスキュー・スクレイパー・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿)
	奈良・平安時代	土器類(土師器・須恵器・灰釉陶器) 鉄製品(鏃・釘)



第57区 橋渡し遺跡 調査範囲



第58図 極波し遺跡 遺構配置

## 2 遺構

### 1 竪穴住居址

#### (1) 第1号住居址 (第59図、図版24)

位置 C区 平面形 隅丸長方形 規模 長524×短468×深26cm

床面積 21.8㎡ 主軸方位 N-100° -E カマド 東壁北端・石組

遺構 黄褐色土中に構築され、四壁とも完存する。覆土は礫混じりの黒褐色～暗黄褐色土が堆積する。覆土中にはカマド周辺を中心に全面に礫が投げ込まれている。床面は暗黄褐色の砂利層中にあり、平坦だが軟弱であった。カマドは両楯の基部、火床面を残し、構築材の大半はカマド周囲に廃棄されている。カマドに接して北側には浅い円形ピットがあり、さらにピットから西側にかけて炭が多く見られた。その他2基のピットが床面上に見られるが、柱穴は検出されなかった。

遺物 全体に遺物の出土は希薄である。カマド内に土師器杯(2・6)が、また西北寄りの床面から土師器杯(4)、鉄鏝(1)が出土した程度である。土器類の器種器形は土師器杯(2～6)・皿(1)のみで、4の内面に漆、3・6の内面には煤の付着が認められた。

時期 土器群の様相は平安時代でも新しく14期の様相を呈し、本遺構の帰属時期を示している。

#### (2) 第2号住居址 (第60図、図版25)

位置 A区 平面形 方形 規模 長396×短380×深20cm

床面積 13.6㎡ 主軸方位 N-90° -E カマド 東壁中央・石組

遺構 暗黄褐色礫土中に構築される。覆土は礫混じりの黒色土が堆積し、全面に礫の投げ込みが見られる。床面は黄褐色土を貼床するが徹底せず、軟弱な部分が多い。カマドの残存状況は非常に悪く、火床面が観察されただけであった。カマド南側から中央部にかけて構築材が散乱している。ピットは4基が検出された。北東隅には大形の円形ピットがあり、礫が詰め込まれている(P2)。P3・4は特に柱穴とは断定できない。

遺物 遺物出土量は少ない。カマド南側に黒色土器A杯、須恵器杯がまとまっていた程度である。土器類の器種器形は土師器甕(13・14)、黒色土器A杯(7～9)、須恵器杯(10・11)・鉢(12)等がある。土師器甕はいわゆる武蔵型、土師器・須恵器の杯は底部に糸切り痕を残す。

時期 遺構の帰属時期は土器様相から平安時代、7期と考えられる。

#### (3) 第3号住居址 (第61図、図版26)

位置 A区 平面形 方形 規模 長540×短508×深30cm

床面積 24.4㎡ 主軸方位 N-90° -W カマド 西壁中央・石組

遺構 黒色土中に構築され、壁下半～床面は黄褐色土中に設けられている。覆土も黒色土のため、

上層での地山との分別は困難であった。覆土中への礫等の廃棄はほとんど見られない。床面はほぼ全面非常に堅緻なタタキ床で、中央部で10～20cm程度黄褐色土、黒色土の混土で貼床している。北壁西隅には壁溝が見られた。カマドは天井部を除き残存状況は良好である。袖の基部は地山を削り出し、1～2石を芯材とする。内部にはおそらく廃絶時に持ち込まれたと考えられる須恵器杯2点(15・16)が遺されていた。主柱穴は4基が検出された。いずれも掘り込みは大きく深いが、貼床面上では柱痕が確認されたのみである。柱を立てた後に貼床を行ったためであろう。また北東隅のP6は底面に平石が敷かれている。

**遺物** カマド内からの須恵器杯2点の他はほとんど遺物の出土がない。土器類の器種器形は土師器甕(19・20)・小型甕(17・18)、須恵器杯(15・16)である。18は粘土に金雲母を多量に含み、紫地、調整技法等地元産の土師器には見られない特徴を有している。また土師器甕も在地産に加え武蔵型が存在する。須恵器杯はいずれも底面へラ切り未調整である。

**時期** 出土土器から本址は奈良時代、2期の遺構と推定される。 **備考** 土60を切る。

#### (4) 第4号住居址(第59図)

**位置** A区                    平面形 不整形                    規模 長364×短344×深23cm

**床面積** 8.3㎡                    炉 なし

**遺構** 黒色～暗黄褐色土中に構築される。覆土は黒色を呈し、地山との分別は困難であった。床面は中央部に向かってゆるやかに窪み、軟弱である。

炉と思われる焼土面、掘り込み等は検出されず、南北に2基の円形ピットが検出されただけである。また南側のP2の脇には長方形の礫が置かれていた。

**遺物** 覆土中から縄紋土器片、石器類が少量出土したのみで、一括遺物は見られない。土器は中期中葉～末葉のものが混在し、量的にも少ない。また一括遺物もないため遺構の帰属時期を特定するに至らない。

**時期** 縄紋時代中期                    **備考** 土58に切られる。

#### (5) 第5号住居址(第59図、図版26)

**位置** A区                    平面形 (方形)                    規模 長376×短?×深23cm

**床面積** 不明                    主軸方位 N-90° -E                    カマド 東壁中央?

**遺構** 攪乱により東半部を失う住居址である。黒色土層中に構築されるが床面は黄褐色土中に設けられている。覆土も黒色土のため、検出時の遺構の把握は困難であった。覆土中への礫等の廃棄はほとんど見られない。床面はタタキ床をなし、堅緻である。カマドはおそらく東壁に位置し、東西に主軸をもつものと推察される。床面上からは10基のピットが検出されたが、そのうちP1・8・3・6が主柱穴と考えられよう。



遺物 北西隅にあるP2の脇に黒色土器A杯(29)、西壁下から土師器甕片(30)が多く出土した他、覆土中からの破片の出土が多い。土器類の器種器形は土師器甕(30)、黒色土器A杯(27~29)・皿(26)、須恵器杯(25)・広口壺等が見られる。

時期 出土土器から平安時代7期の遺構と考えられる。

#### (6) 第6号住居址 (第60図、図版26~28)

位置 A区 平面形 円形 規模 長346×短344×深20cm  
床面積 4.7m<sup>2</sup> 主軸方位 N-12°-W 炉 中央・(石組)

遺構 黒色土中に検出された敷石住居址である。覆土は黒色土で、土色の識別が困難なため敷石のあり方からプランを確定させていった。覆土中には多量の礫が見られ、これらの大半は構築材として用いられたものと考えられる。壁には平石を立てて囲む状況が西側を除き良好に観察され、部分的に裏込めを行う。床面の敷石は壁下以外、廃絶時に抜き取られているが、北側では40~50cm大の石材を配置した後小隙で隙間を埋める状況が観察される。また石材は大半が川原石をそのまま用い、いわゆる鉄平石や割石はわずかしは見られない。これらの敷石、壁のなす平面形状は方形基調であり、炉と軸を揃えている。炉は石材が抜き取られているため上部の状況が不明だが、長楕円形の掘り方が確認された。南端が円形ピット状に深く掘り込まれ、東側にわずかに縁石が残される。炉内全体に被熱痕はほとんど観察されない。柱穴、その他のピットは石材をすべて除去した後暗黄褐色土面で検出された。合計8基のうちP1・7・5・8の4基が主柱穴と考えられ、掘り込みが非常に深い。またその位置は壁の外側にあたり、ピット上部に壁の石材が及んでいることから少なくとも主柱を立てた後に敷石を行っていることが窺える。

遺物 北東隅、P7内側の敷石上に石皿(34)が伏せられ、また南壁に沿って打製石斧2点が置かれた状態で出土したが、土器類は覆土中からの破片に出土が限られる。構築材として用いた石材のなかには打製石斧、石皿、凹石、磨石等が散見された。土器は中期後葉(25~29)・末葉(9~24)のものが出土しているが、後者が主体である。器形は深鉢が多く、1点蓋(9)が出土している。石器は石鏃(3)・打製石斧(18)・磨石類(30・31)・石皿(34)等がある。

時期 縄紋時代中期末葉

## 2 土坑 (第62図、第6表、図版29)

### (1) 形態

ここでは検出された土坑59基について大雑把な形態分類を行って概観し、個々のデータは一覧表に示した。本遺跡で検出された土坑は概ね以下の形態に分類される。

a類 長径50~170cm、円形ないし楕円形プランで、覆土内に礫・遺物を多く含む一群。掘り込みは明瞭で底面は概して平坦である。土47・49等が該当する。礫のあり方は土12・49等下層~底面に

集中するもの、土48等上層に集中するもの、覆土中に散在するもの等が存在する。遺物は土48で完形の深鉢が壁に立てかけられて出土した他は破片での出土が多い。その他特異なものとしては、土47で覆土中に焼土面が存在した。

b類 a類以外のものを一括した。基本的には円ないし楕円形プランで、底面が平坦なものが多い。遺物や礫が伴わないものがほとんどである。

## (2) 時期・分布

a類の遺構はほとんどがA区に所在し、住居址とともに集落を構成していたものと考えられる。遺物も縄紋時代中期末葉～後期初頭のものが出土しており、住居址の所見と違わない。

b類も出土する遺物は同じであり、同時期の所産と捉えられるが、必ずしも人為的に構築されたものばかりでなく、特にB地区に関しては黒色土のシミ、つまり元々全面に広がっていた黒色土の遺物包含層(後の開墾で削平され、深い部分が包含層3として残存している)下面の凹凸を遺構として拾った可能性が高い。

## 3 ビット(第58図)

A～Cの各地区で検出されている。A地区では5住西側に平安時代と考えられる5基、また包含層1内に縄紋時代中期のものが13基集中する。B地区では土坑群に混在して多数が検出されたが、その成因は前述の土坑と同様と考えられる。C地区では1住北西に集中があり、これらは平安時代に構築されたものと考えられる。平安時代のものは整った形態で掘り込みも明瞭である。

## 4 遺物包含層(第58・63図)

A・B・D区で存在が確認された。

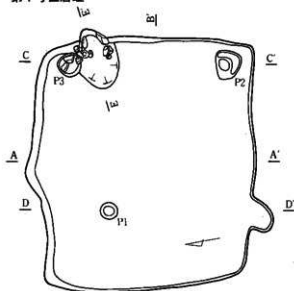
A地区の包含層1は傾斜方向に広がって下降しており、沢状の窪地に黒色土の堆積が加わったものと考えられる。遺物の包含量は少ないが、南寄りに細片化した1個体分の縄紋土器が遺されていた。また平安時代の遺物も多く含んでおり、同時代に埋没したものと捉えられる。

包含層2・3はいずれもA地区より低位の段丘面に存在し、元々B～C地区全体に広がっていたものと解釈される。B・C地区では開墾時に削平されたため、深い部分のみ残存したと考えられる。遺物の大半は縄紋時代中期末葉～後期初頭で、同時代以降に自然形成されたものと考えられる。

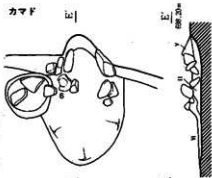
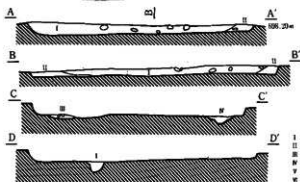
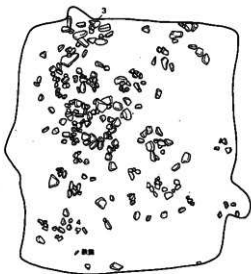
第6表 橋渡し遺跡 土坑一覽表

No	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	類 型	備 考	No	規 模 (cm) 長軸×短軸×深さ	平面形	類 型	備 考
1	132×100×12	楕円形	b類		32	68×64×20	不整円形	b類	土11より新
2	88×36×28	楕円形		P8より古	33	48×32×16	楕円形		
3	96×60×11	不整楕円形	b類		34	60×48×31	楕円形	b類	
4	64×52×21	楕円形			35	52×40×21	楕円形		土36より古
5	76×58×21	楕円形			36	88×52×35	隅丸長方形	b類	土35-37より新
6	56×44×17	楕円形			37	64×48×29	楕円形		土36より古
7	64×24×15	楕円形		土8より新	38	40×32×28	楕円形		
8	36×44×16	楕円形		土7より古	39	44×40×9	円形		
9	48×44×15	円形			40	68×36×6	不整楕円形		
10	76×48×20	不整楕円形			41	60×40×16	不整楕円形		
11	168×98×28	不定形	b類	土32より古	42	92×64×14	隅丸長方形		
12	136×76×12	楕円形	a類		43	120×68×10	不定形	b類	
13	92×88×24	不整楕円形	a類		44	72×48×7	不整楕円形	b類	
14	136×116×19	不定形	a類		45	157×105×42	楕円形		土46より新
15	88×56×14	不整楕円形			46	127×95×20	不整楕円形		土45より古
16	60×40×15	隅丸長方形			47	128×92×32	楕円形	a類	埴土面・土器多
17	132×88×17	不整楕円形	b類		48	88×68×18	不整楕円形	a類	深鉢立位出土
18	140×72×17	不定形	b類	包3より新	49	112×80×31	楕円形	a類	
19	72×52×15	楕円形		包3より新	50				欠番
20	118×52×12	不整長方形		包3より新	51	92×72×29	不整楕円形	b類	
21	88×72×12	不定形		包3より新	52	56×52×27	円形		
22	72×68×28	楕円形			53				欠番
23	64×40×20	楕円形		包3より新	54	44×40×15	楕円形		包1内
24	56×40×10	楕円形			55	120×76×7	不整楕円形		包1内
25	40×36×25	円形			56	92×48×21	楕円形	a類	包1内
26	76×52×23	楕円形	b類		57	60×36×21	隅丸長方形		包1内
27	52×32×25	楕円形			58	48×36×23	楕円形	a類	
28	44×32×18	楕円形			59	64×48×25	円形		
29	100×?×20	(楕円形)			60	?×60×13	(楕円形)		3住より古
30	52×48×14	楕円形			61	168×108×27	不整楕円形	a類	
31	80×60×25	不整楕円形	b類						

第1号住居址

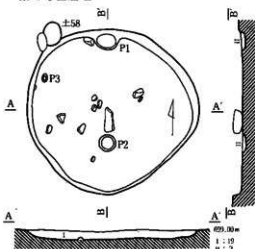


遺物出土状況

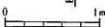
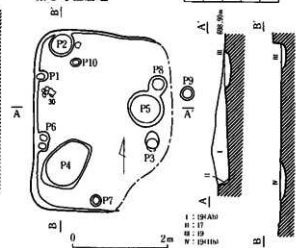


- I : 2 (Ab, Hb)
- II : 17
- III : 3 (C, E)
- IV : 2 (H)
- V : 3
- VI : 2 (C, E)

第4号住居址



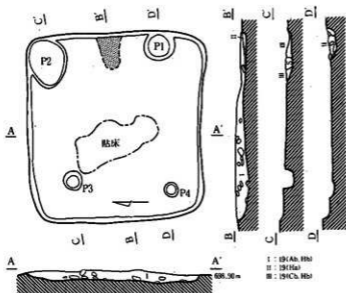
第5号住居址



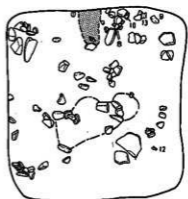
- I : 1 (H)
- II : 17
- III : 19
- IV : 1 (H)

第59図 縄文遺跡 第1・4・5号住居址

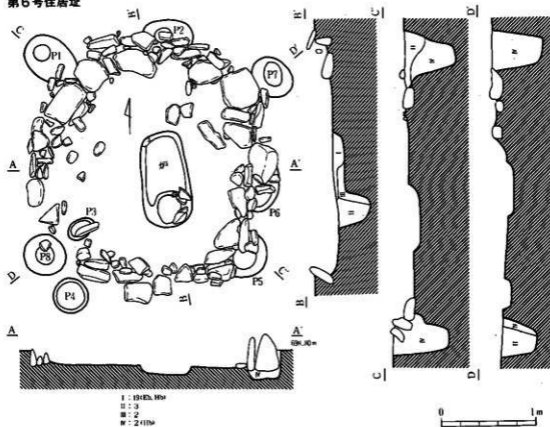
第2号住居址



遺物出土状況

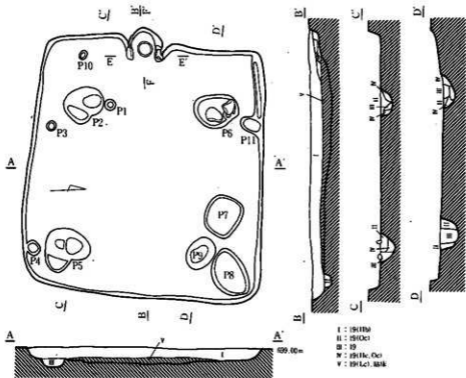


第6号住居址

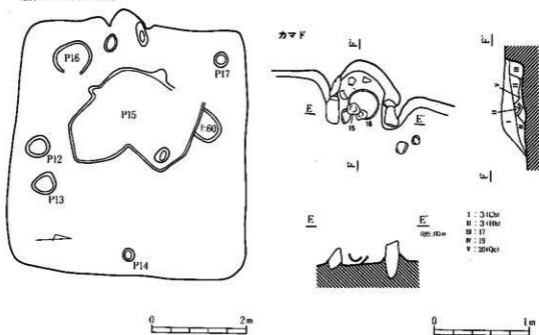


第60図 縄渡し遺跡 第2・6号住居址

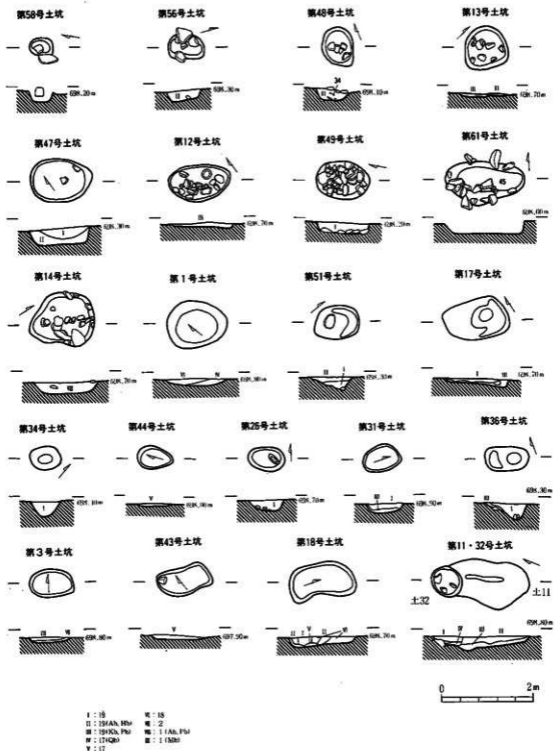
第3号住居址



貼床下ビット出土状況

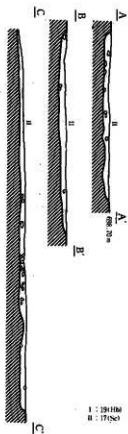


第61図 種渡し遺跡 第3号住居址

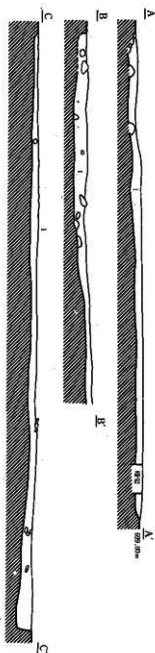


第62图 福渡L遺跡 土坑

第2号遺物包含層



第1号遺物包含層



土層記号説明

土色	混入物
1 褐色	A 小礫
2 暗褐色	B 礫
3 黑褐色	C 焼土粒
4 明褐色	D 焼土塊
5 赤褐色	E 炭化物粒
6 黄褐色	F 炭化物塊
7 茶褐色	G 炭化材
8 灰褐色	H 黄色土粒
9 橙褐色	I 黄褐色土粒
10 灰色	J 橙褐色土塊
11 暗灰色	K 茶褐色土粒
12 黑灰色	L 黄色土塊
13 赤灰色	M 黄褐色土塊
14 黄灰色	N 橙褐色土塊
15 紫灰色	O 茶褐色土塊
16 黄色	P 砂粒
17 暗黄褐色	Q 黑色土粒
18 暗茶褐色	R 黑色土塊
19 黑色	S 暗褐色土粒
20 烧土	T 暗褐色土塊
21 砂	U 灰色土粒
22 砂礫	V 灰色土塊
23 綠灰色	W 赤褐色土粒
	X 赤褐色土塊
混入物量	Y 鉄分
a 微量	
b 少量	
c 多量	

標記法：土色(混入物、量)

第63図 福波L遺跡 遺物包含層



### 3 遺物

#### 1 旧石器・縄紋時代の遺物

##### (1) 土器 (第64～68図、図版30)

今回出土した土器は大半が破片での出土で、残存状況の良好なものは少ない。以下、時期毎に概観する。

##### ① 中期中葉の土器 (2・8・87)

浅鉢(8)・深鉢(2・87)の3点を図示した。8は波状部の口縁部内面に沈線により玉抱き三叉紋を施紋する。2は台付深鉢の脚部で、縄紋地紋に円形の透かしが施される。87はキャリバー形の口縁部、さほど膨らまない円筒状の胴部をなす深鉢で、胴部にのみ縦位基調の沈線紋、隆帯紋が施紋される。中葉末に位置付けられよう。

##### ② 中期後葉の土器 (4・27・28・29・49・53・71・88)

8点を図示した。いずれも唐草紋系の深鉢の破片である。28・29・71・88は隆帯による横帯区画紋が施される口縁部付近の破片で、区画内に斜走沈線紋、縦位沈線紋、交互刺突紋等を充填する。4は頸部破片、27・49・53は胴部の破片である。縦位隆帯と斜走あるいは綾杉状に沈線紋を施紋する。

##### ③ 中期末葉～後期初頭の土器 (1・5・6・9～24・30～48・50～69・72～86・89～102)

出土土器の主体を占める。断片的な資料のため時間的に幅をもたせ、一括して概観する。器形的には深鉢が主体を占め、鉢、蓋(9・35)、橋状把手付深鉢(68・101)等もみられる。紋様のあり方に以下のバラエティーがあり、口縁部直下に横走沈線を巡らせ、以下に縦位沈線、粗い綾杉紋を充填するもの(15・17等)、横走沈線より以下に条線紋を間隔を開けて縦走させるもの(1・34・77等)、横走および縦位隆帯(沈線)区画内に縄紋を充填するもの(23・59・64・66等)、逆U字状の隆帯区画あるいはその退化した沈線区画内に勾玉紋、綾杉紋を充填するもの(12・13・37・38・90等)、キャリバー形の口縁部に縄紋を充填する楕円区画紋を蕨手状の縦位沈線と交互に横帯させるもの(22・72等)、2本1組の隆帯で逆U字状の区画をし、内部に縄紋を充填するもの(51)、2本の沈線により逆U字状、あるいはJ字状の区画をし、縄紋を充填するもの(30～32・42・43・45・47・56・63・67・82・92・96・98等)、縄紋を地紋とし、沈線による曲・直線で構図を描くもの(78・79・80・84・85・86等)がある。

これらは概ね唐草紋系土器のⅣ段階～称名寺式期に位置付けられよう。

##### (2) 石器 (第71～73図、図版31・32)

定形的な石器が34点出土している。このほかに2次加工を含む黒曜石・チャート等の剥片類が出土しているが、これらについては報告を割愛する。

実測図の右下には上段に通番、中段に出土地点、下段に石質を記載しており、文中の石器番号は通番に対応している。なお、石質の一部については太田守夫氏にご教示をいただいている。

### ① ナイフ形石器 (1)

頁岩製の完形品が1点出土している。石刃状の縦長剥片を素材としており、背面には左側縁には平行する1本の稜が伸びている。片側縁調整で、主要剥離面（腹面）側から打撃角が90°前後の急斜度調整が施されている。この調整は素材剥片の末端側が尖るように施されているが、基部の打面には及んでいない。急斜度調整が施されない縁辺側には、連続する微細な剥離面が観察される。これは尖端付近と基部寄り約1/3は背面側に、その間は腹面側に連続して認められることから、刃部調整の一種と考えられる。

### ② 石 錐 (2~6)

5点が出土している。2は黒曜石製の円基錐で、完形品である。側辺は外湾し、最大幅は中程にある。整形加工が粗く、横断面が比較的厚いことから木製品の可能性も考えられる。3は黒曜石製で、石錐の未製品と推定される。縦長剥片の縁辺に整形加工を施して、錐の上半部と基部の一部を作り出している。4はチャート製の凹基有茎錐で、完形品である。側辺はわずかに外湾し、最大幅は下方にある。逆剥は比較的浅く、その端部は丸みを帯びている。5はチャート製の凹基有茎錐で、片脚を破損している。側辺はわずかに外湾し、最大幅は下方に認められる。6は黒曜石製の凹基有茎錐で、先端部と片脚を破損している。側辺は直線的で、最大幅は下端になる。

### ③ 石 錐 (7-8)

チャート製の完形品が2点出土している。7はつまみを有する小形品で、礫の自然面を打面とする縦長剥片を素材としている。錐部は両側縁に錯交剥離を施して作り出しているため、断面は四辺形を呈している。8は棒状錐で、中央に素材剥片の剥離面をわずかに残すだけで、ほぼ全面に両面加工が施されている。錐部の断面は扁平な紡錘形を呈している。

### ④ ビエス・エスキーユ (9)

チャート製の完形品1点が出土している。平面はわずかに隅丸の台形を呈し、縦断面は紡錘形である。上・下端に両極剥離が認められるほか、両側縁にもやや粗い整形加工が施されている。

### ⑤ スクレイパー (10~15)

6点が出土している。10はチャート製で、完形品である。礫の自然面を打面とする不定形剥片の片側縁に両面加工を施してわずかに外湾する刃部を整形している。

11はチャート製で、両側を破損している。素材剥片の形状は不明であるが、上辺には自然面が観察される。わずかに外湾する刃部には両面加工が施されている。

12は砂岩製で、片側を破損している。不定形な剥片を素材としており、背面の一部には自然面が残存している。刃部は両面加工でわずかに外湾しているが、腹面側が深くて角度のある剥離調整が施されているため、刃部断面は片刃状を呈している。

13はチャート製で、上部が破損している。素材剥片の形状は不明で、押圧剥離による深い平行調整が全面に施され、平面は拇指状に整形されている。刃部は片面加工で外湾しており、その断面は

片刃状を呈している。

14は黒曜石製で、完形品である。自然面を打面とする横長剃片を素材としており、平面が方形に整形されている。このうち2辺は、腹面側から刃部調整が施されており、わずかに外湾する刃部が作り出されている。15はチャート製で、完形品である。縦長剃片を素材とし、片側縁に粗い両面加工が施されており、わずかに外湾する刃部が作り出されている。

#### ⑥ 打製石斧 (16~27)

12点が出土している。石材は頁岩(ホルンフェルス)5点、砂岩3点(内ホルンフェルス2点)、粘板岩2点、安山岩1点、凝灰岩1点である。

形態的には平面が楕形の18、短冊形の17・19・21がある。確実な分銅形は認められないが、22~24・26は片側縁にくびれが認められる。特に、23・24・26は他の片側縁が直線的であることから、楕形と分銅形の中間的な形態を呈している。刃部は、円刃が6点(16・19・21・22・24・26)、偏刃が3点(17・18・20)である。

破損状況を見ると、完形品は2点(17・19)だけで、頭部を破損しているものが多く、23・25は胴~刃部を破損している。なお、22は長軸方向に沿って半折していることから、使用時の加撃による破損と推定される。使用による刃部の摩耗は17・18・21・26、着柄による側縁の摩耗・つぶれは17・23で観察されている。

#### ⑦ 磨製石斧 (28)

蛇紋岩製の定角式磨製石斧が1点出土している。刃部の一部が破損しているが、この破損(剝離)面の稜が摩耗していることから、刃部の破損後も使用が続けられたことが推定される。

#### ⑧ 凹・敲・磨石 (29~33)

5点が出土している。29は石英閃緑岩の円礫を素材とし、両面に磨面を有している。約1/2を破損しているが、器面・破損面ともに被熱によって表面が部分的に赤色化している。30は砂岩の楕円礫を素材とし、右側面に凹部が2箇所、片面に磨面を有する完形品である。

31は約1/2を破損しているが、砂岩製の直方体を呈する礫を素材としている。先端部に敲打面、片面に磨面を有している。32は石英質岩の比較的小形の長楕円礫を素材とし、片面に磨面を有する完形品である。33は砂岩の比較的水平な円礫を素材とし、両面に各1つの凹部が観察される。側面の一部が剥落しているが、意図的な敲打によるものかは不明である。

#### ⑨ 石皿 (34)

石英閃緑岩製の完形品が1点出土している。全長29.8cm、最大幅25.5cm、厚さ6.5cm、重量6050gを計る。比較的扁平な大形の河原石を素材とし、両側縁は敲打によって直線的に整形されている。平面形は方形を呈するが、掻き出し口側の辺は斜行している。磨面(使用面)は上端部分で15.5×24.5cmを計る。また、磨面の縁辺部も研磨されており、上面は平坦に仕上げられている。

### (3) 土製品 (第68図)

4点が出土している。いずれも遺物包含層からの出土品である。

1～3は土製円盤で、いずれも深鉢胴部の破片を利用している。1は直径4.5cm、2は2.6×3.0cm、3は直径3.5cmをそれぞれ計る。2は中央部に直径0.4cmの孔を穿っている。

4は土偶で、胴(腰)部の破片である。沈線による装飾が施され、脚部との接合面には孔が見られる。形態・紋様から中期後葉のものと考えられる。

## 2 奈良・平安時代の遺物

### (1) 土器 (第69・70図、図版30)

奈良・平安時代の遺物は住居址、および包含層1上面、検出面から出土している。

器種・器形は土師器杯A(2・5等)・皿A(1)・小型甕A(17)・甕B(30等)・甕C(20等)、黒色土器A杯A(8等)・皿B(26)、須恵器杯A(10・15等)・杯B(11等)・鉢A(12)等があり、各器形の特徴や器種構成から3時期に区分できる。

一つは3住出土品で、底部へら切りの須恵器杯Aを主体に土師器小型甕A・甕C、関西系と思われる甕(18)で構成され、松本平土器編年の2期、8世紀前葉の様相を呈する。

次に2・5住出土土器群で、黒色土器A杯A・皿B、須恵器杯A・Bで構成され、編年の7期、9世紀後半の特徴を示している。

もう一つは1住出土品で、大小2種の土師器杯A、皿Aで構成され、14期、11世紀後葉に位置付けられるものである。

これらの土器のあり方は当該期の一般的な特徴を示している。

### (2) 金属製品 (第70図、図版32)

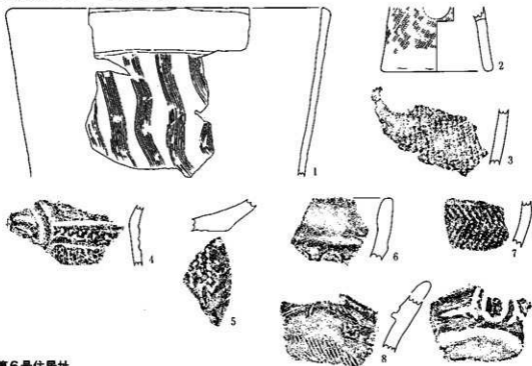
鉄製品が4点出土している。

1は1住から出土した鍔である。縁辺をわずかに欠くがほぼ完形で、全長11.8cmを計る。鍔身部は長さ6.5cm、最大幅2.0cmの細身の長三角形式で、側辺はわずかに内湾し、斜めに立上る鬨を有している。寛披部は長さ2.1cmで、闊披を有している。基部は長さ3.3cmを計る。

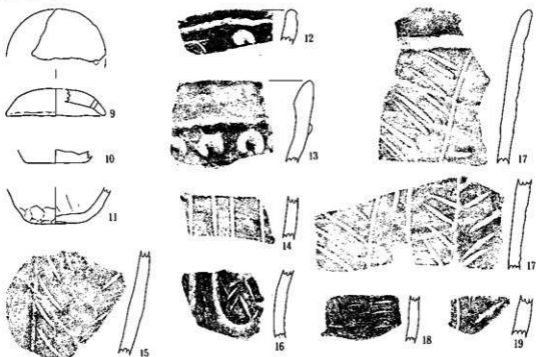
2はA区の遺物包含層1から出土した残存長3.8cmの棒状を呈する鉄製品である。片側が破損し、さらに残存部の中央が錆化によって剥落しているが、断面が不整な方形を呈することから釘の可能性が考えられる。

3・4はA区の検出面から出土した釘である。3は頭部と下端を破損している。残存長4.8cmを計り、上端で6.5×5.8mmの隅丸方形の断面を有している。4は上部の破損部付近がわずかに厚さが減じ、湾曲していることから頭部に近い部分で折れたものと推定される。残存長5.9cm、最大幅6.7mmを計り、方形断面を有している。

縄紋時代の土器 第4号住居址



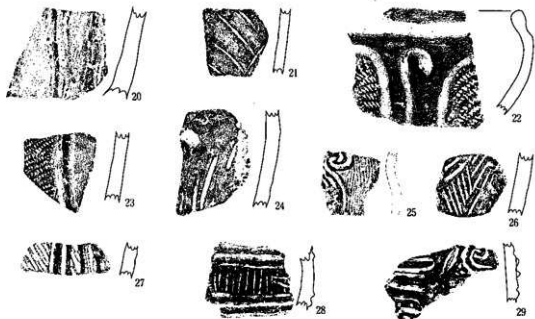
第6号住居址



1・2・9・10・11断尺1:4

0 10cm

第64図 稲波し遺跡 土器(1)



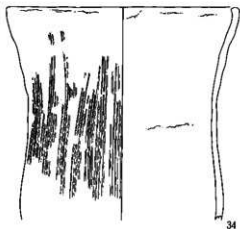
土坑11



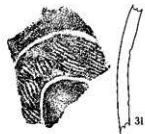
土坑31



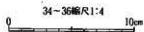
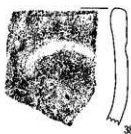
土坑48



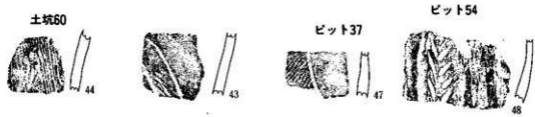
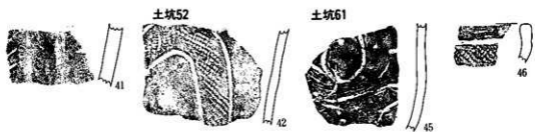
土坑32



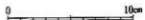
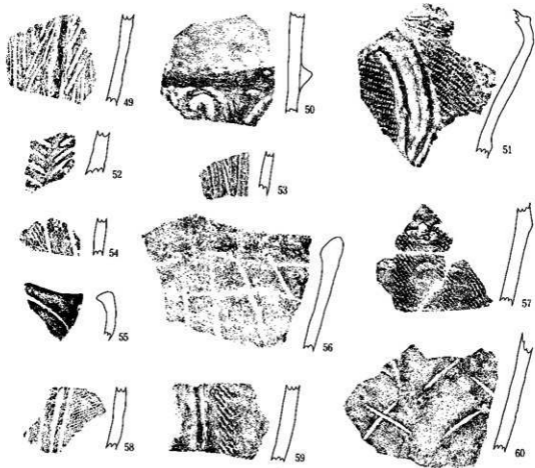
土坑47



第65圖 繩波L遺跡 土器(2)

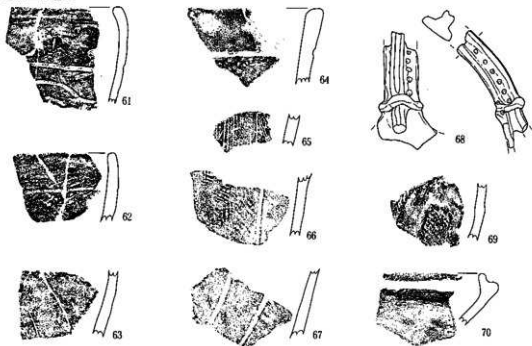


遺物包含層 I

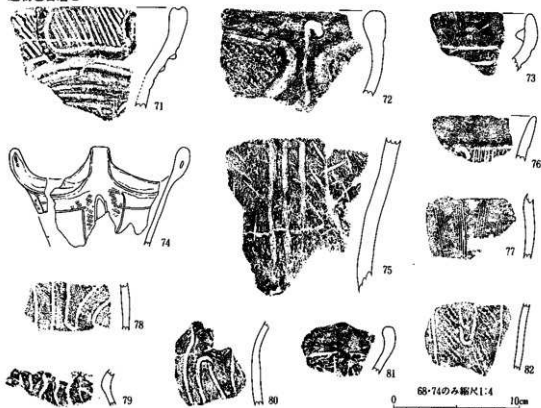


第66図 稲渡し遺跡 土器(3)

遺物包含層2



遺物包含層3

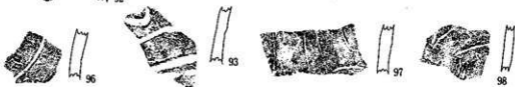


第67図 種渡し遺跡 土器(4)

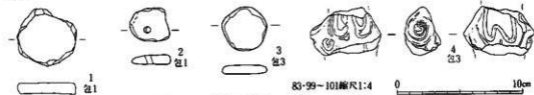




A区検出面



土製品

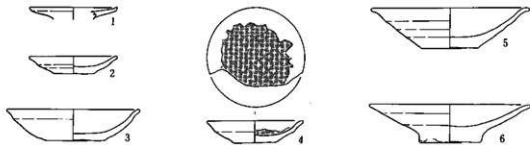


83-99-101画尺1:4

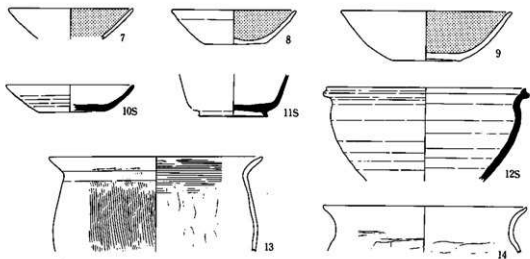
0 10cm

第68回 稲波し遺跡 土器(5)・土製品

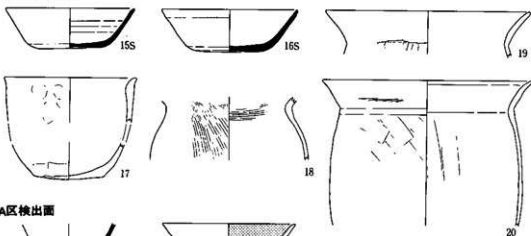
古代の土器 第1号住居址



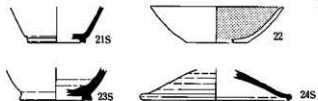
第2号住居址



第3号住居址



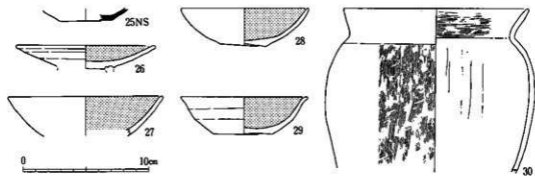
A区検出画



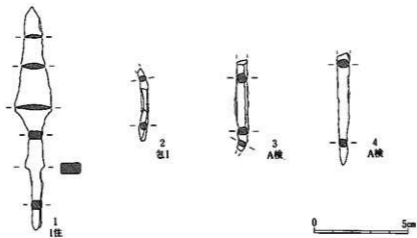
第69図 編波し遺跡 土器(6)

0 10cm

第5号住居址

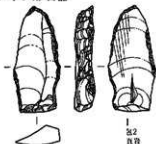


金属製品



第70図 縄渡し遺跡 土器(7)・金属製品

ナイフ形石器



石鏃

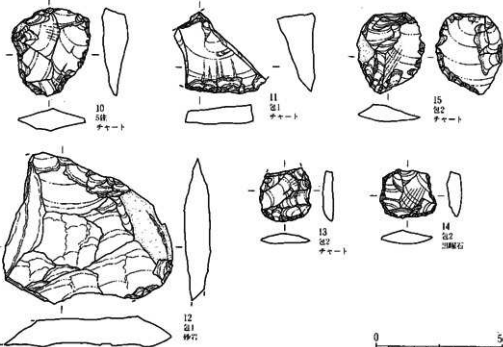


石鏃



ピエ・エスキュー

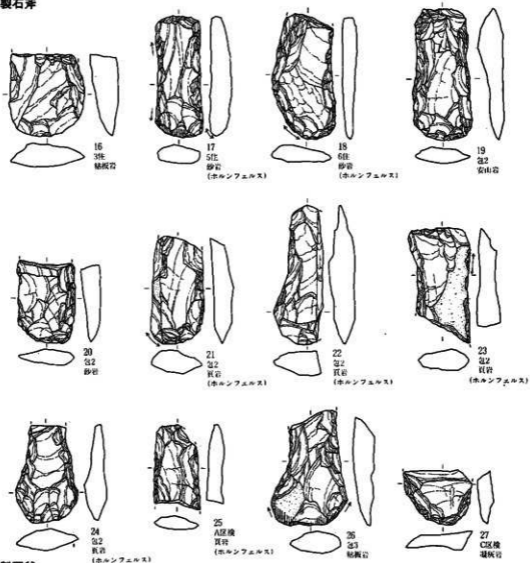
スクレイパー



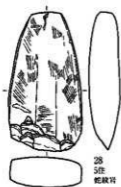
第71図 福渡し遺跡 石器(1)



打製石斧

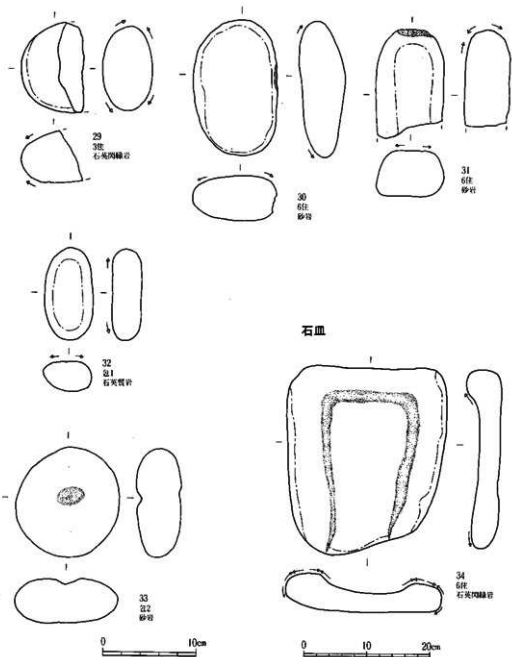


磨製石斧



第72図 縄波し遺跡 石器(2)

凹・敲・磨石



第73圖 縄渡し遺跡 石器(3)

## 4 まとめ

今回の調査では縄紋時代および奈良・平安時代の遺構・遺物を得ることができたが、その密度は必ずしも濃いとは言えなかった。その理由は各時代共に集落の中心が西側のより高い位置に存在すると考えられるからである。しかしながら、縄紋時代においては中期後葉～後期初頭の集落の存在と東縁部の状況、奈良・平安時代においては岡田町遺跡から連続する大形集落の東端部の様相が把握でき、有意義な結果となった。

遺物包含層2からは1点だけがナイフ形石器が出土した。遺構に伴うものではなく流れ込みと考えられるが、確実に後期旧石器時代に遡るものである。本遺跡内、あるいは近辺に当該期の遺跡の存在が予想され、1点とはいえ重要な発見となった。

縄紋時代の6住は中期末の敷石住居址であった。壁、および壁際の敷石が良好に残存しており、柱穴が壁外に位置することが明瞭に捉えられた。黒色土層中の構築のため、敷石、炉、柱穴以外の施設はあまり捉えられなかったが、敷石部の規模が小さく、外側に深く掘り込まれた柱穴があることから実際の建物はより規模の大きなものであった可能性が高い。周囲に土間状の施設、一段低まって敷石床といった構造も想起されるのである。

古代の遺構のなかで、平安時代後期に下るものとして第1号住居址が検出された。岡田本郷地区では平安時代の集落は9世紀後半代をもって突如消滅する状況を呈し、10世紀代に下る遺構・遺物は今のところほとんど確認されていない。しかし、11世紀代に入ると当遺跡や宮の上遺跡等に住居址が分布するようになる。ただしかつてのような大集落を形成することは決してなく、むしろ非常に散発的で村としての体裁すら持たないかのようである。こうした現象が何を物語っているのか、土器生産終了後のこの地を取り巻く歴史的状況について今後検討してゆかなくてはならないだろう。

これまで触れたように、今回の調査で遺跡の縁辺部の様相が明らかになったが、各時代の集落中心部、すなわち国道を挟んだ西側のより高い安定した面の状況は今後の調査を待たねばならない。本遺跡を超えて、岡田本郷地区の古代を語るためには今少し調査の手を広げ、塩辛～岡田町、西裏遺跡一帯の現街道・岡田町集落の存在する地域、松岡遺跡を中心とする南部の地域、あるいは東西の山間部の須恵器窯跡群、古墳群等の総合的な調査・研究が不可欠であり、今後に残された課題と言えよう。

和田・桜田・堂田・樋渡し遺跡発掘調査報告書抄録

ふりがな	まつもとしわかないせき・さくらだいせき・どうだいでき・ひわだいでききさきあきほうつちようきほうこくし
書名	松本市和田遺跡・桜田遺跡・堂田遺跡・樋渡し遺跡緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	No117
編著者名	竹原 学・関沢 聡・島田哲男・森 義直
編集機関	長野県松本市教育委員会（松本市立考古博物館）
所在地	〒390 長野県松本市中山3738-1 TEL.0263-86-4710
発行年月日	平成7(1995)年3月22日（平成6年度）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
和田	長野県松本市 稲倉字和田	20202	043	36度 17分 06秒	137度 59分 23秒	19930525～ 19930824	3660	県営ほ場整備事業に伴う事前調査
桜田	長野県松本市 稲倉字桜田	20202	044	36度 16分 58秒	137度 59分 24秒	19930525～ 19930824	2620	同上
堂田	長野県松本市 岡田伊瀬字堂田	20202	001	36度 17分 04秒	137度 59分 18秒	19931116～ 19931224	1221	同上
樋渡し	長野県松本市 河字火渡し	20202	055	36度 16分 32秒	137度 59分 09秒	19931123～ 19931224	1265	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
和田	集落跡	縄紋 平安 中世 不明	住居址 1基 土坑 50基 住居址 11基 土坑 7基 溝状遺構 2基 — ピット	土器・石器(早期末)	平安時代、9世紀後半の集落址を検出。 特殊遺物として石製巡方・樹皮土器・刻割土器を得た。
桜田	集落跡	縄紋 平安 近世	住居址 2基 土坑 139基 ピット 遺物包含層 3基 — 溝状遺構 1基 ピット	土器・石器(早期末・晩期) 土師・須恵・灰輪	縄紋早期末の集落址を検出した。 多数の土器・石器資料を得た。 縄紋草創期の有舌尖頭器も出土。
堂田	集落跡	縄紋 平安 中世 不明	住居址 1基 壑穴状遺構 1基 炭焼窯 1基 溝状遺構 1基 — 壑穴状遺構 1基 土坑 23基 ピット 34基 溝状遺構 1基	土器・石器(前期末) 土師・須恵 陶器	縄紋前期末の集落址、および平安時代の炭焼窯、溝状遺構を検出。
樋渡し	集落跡	旧石器 縄紋 奈良・平安	— 住居址 2基 土坑 59基 遺物包含層 3基 ピット 住居址 4基 ピット	ナイフ形石器 土器・石器(中・後期) 土師・須恵・灰輪・鉄製品	縄紋中期末～後期初頭、奈良・平安時代の集落址を検出。 ナイフ形石器、数石住居址等を得た。



图 版

和田遺跡

A区遠景（北から）



A区住居址群（東から）



同上（南東から）

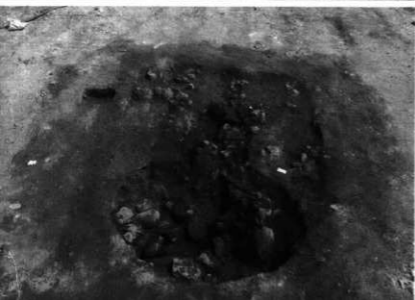




和田遺跡  
第1号住居址 (南かへ)



第2号住居址 (南かへ)



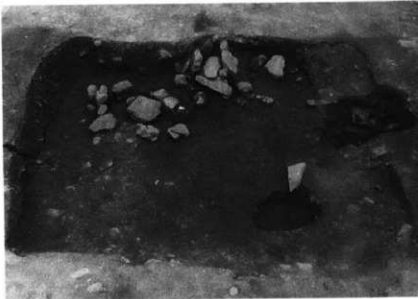
第3号住居址 (南かへ)

和田遺跡

第4号住居址 (東から)



第5号住居址 (南から)



同上 カマド





和田遺跡

第5号住居址門遺物出土状況



第6号住居址（東から）



同上 カマド-南西側遺物出土状況

和田遺跡

第6号住居址石製造方出土状況



第7号住居址（東から）



同上 カマド

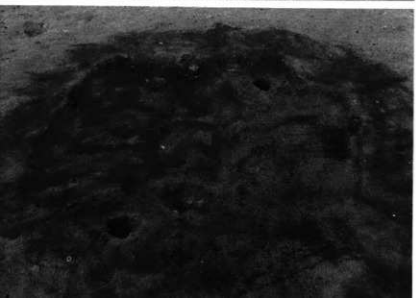




和田遺跡  
第8号住居址（東から）

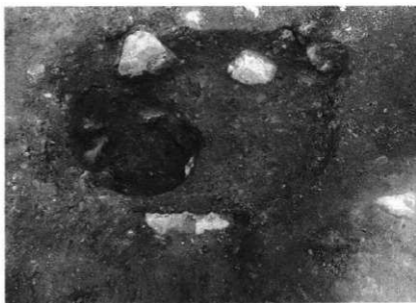


同上 遺物出土状況



第9号住居址（東から）

和田遺跡  
第17号土坑



第21号土坑



第1号溝状遺構 (A区・南6・6)







3



19



4



17



1



22



8



23



6



16



20



24





石方



金属製品

石類 他



石斧 他



## 桜田遺跡

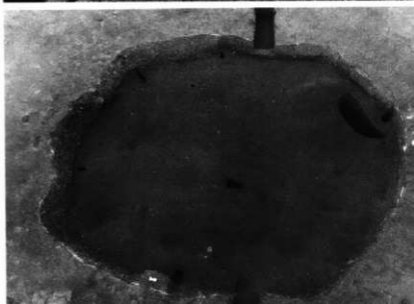
調査区全景（北から）



第2号住居址付近（北から）

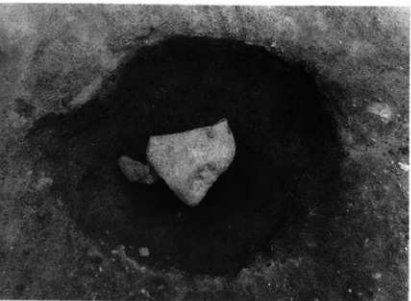


第2号住居址（南から）





桜田遺跡  
第18号土坑照り方

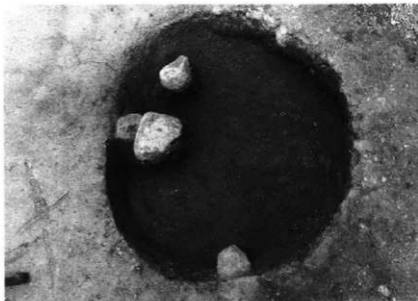


第5号土坑

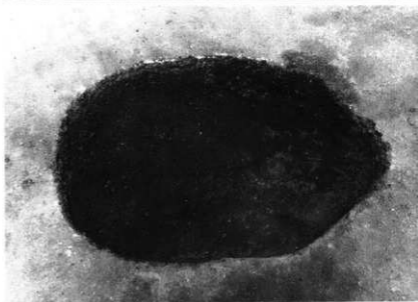


第10号土坑

松田遺跡  
第12号土坑



第19号土坑

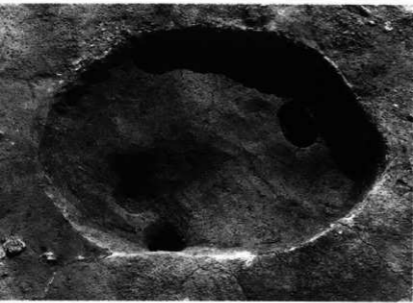


第53号土坑

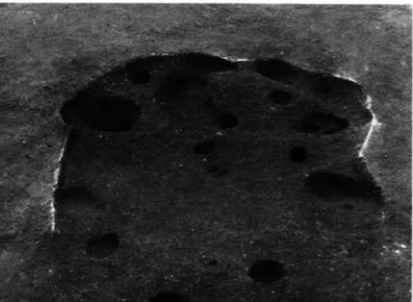




桜田遺跡  
第54号土坑



第55号土坑



第58号土坑

松田遺跡  
第59号土坑



第96号土坑



第2号遺物包含層完掘状況(南から)

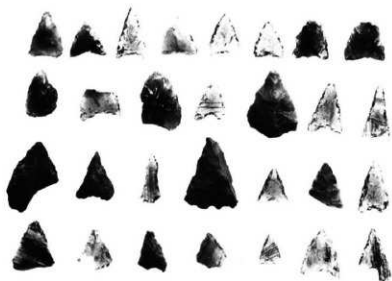




有舌尖頭器  
尖頭器  
塊状耳飾



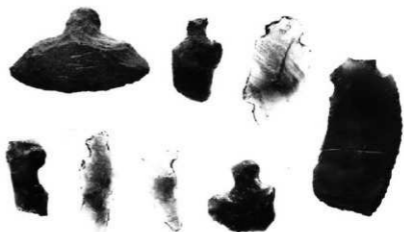
石 錐



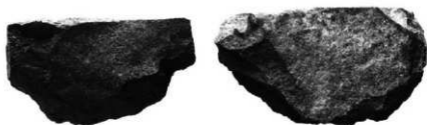
石 錐  
ピエス・エスキーエ



石 匙



スクレイパー  
(埋器)



打製石片





磨製石斧・砥石  
特殊磨石



堂田遺跡

A区遺構検出状況（西から）



A区遺構完掘状況（西から）



B区遺構完掘状況（南西から）





堂田遺跡  
C区遺構検出状況（西から）

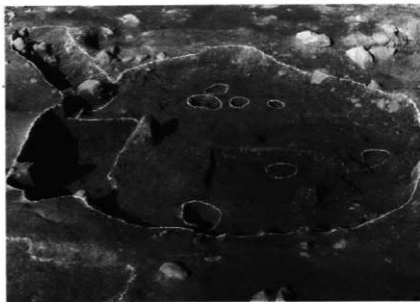


C区遺構完形状況（東から）



第1号住居址・土坑群（西から）

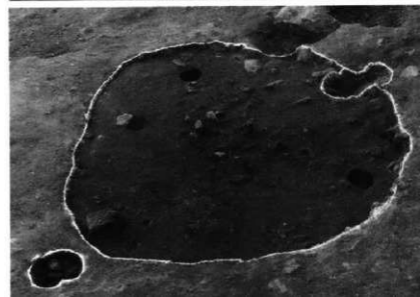
堂田遺跡  
第1号住居址（南から）

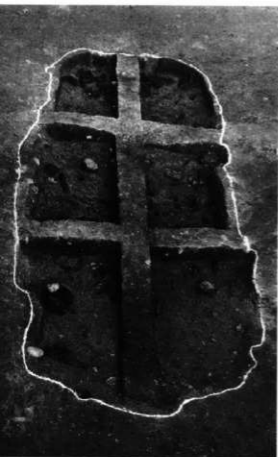


同上 遺物出土状況



第1号竪穴状遺構（東から）





堂田遺跡  
炭焼室土層・掘出土状況（南から）



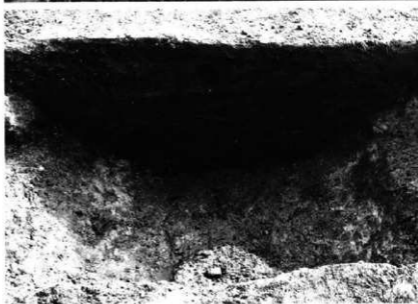
同上 完整状況（南から）

堂田遺跡

第2号溝状造構（西6・5）



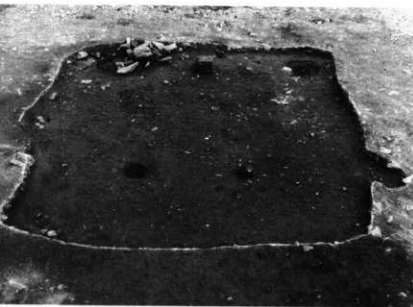
同上 土層断面



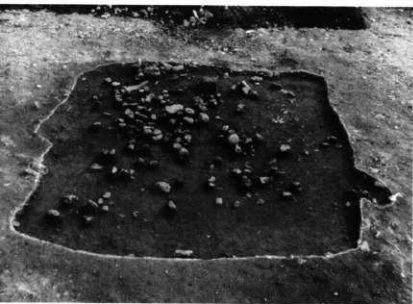
同上 木製品出土状況







稲波し遺跡  
第1号住居址(西6・5)



同上 埋・遺物出土状況



同上 カマド

種漕し遺跡  
第2号住居址（西から）



同上 北東隅ピット



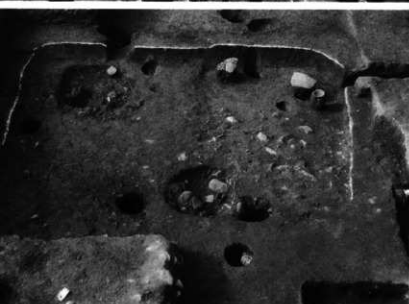
同上 カマド南側遺物出土状況





稲波し遺跡

第3号住居址 (東から)



第5号住居址 (東から)



第6号住居址 (南から)

橋渡し遺跡  
第6号住居址が



同上 南東部の敷石

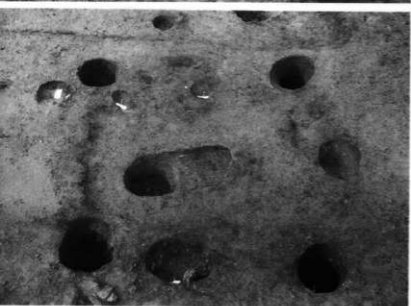


同上 北西部の敷石

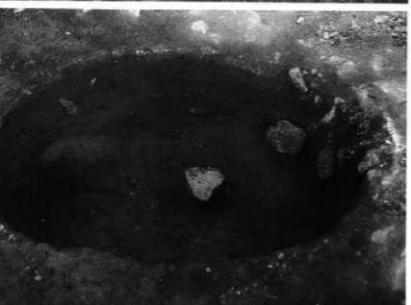




稲波し遺跡  
第G号住居址 南部の敷石  
(打製石斧出土状況)



同上 柱穴 (東から)



第47号土坑

橋渡し遺跡  
第48号土坑



第49号土坑



第2号遺物包含層 (南から)





34



10



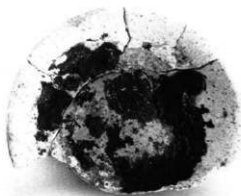
16



6



15



4



18



4



29



2



26

ナイフ形石器



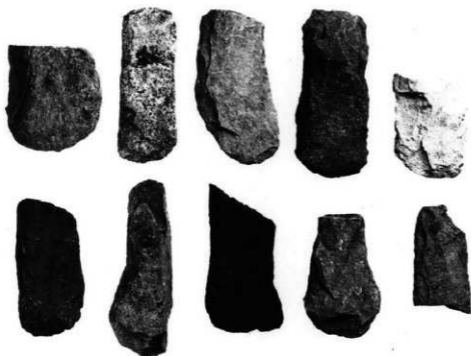
石錐・石鏃・スクレイパー  
 ビエス・エスキューユ 他



打製石斧・磨製石斧







打製石斧  
石 皿

鉄製品 (鉄条他)



---

松本市文化財調査報告 No117  
松本市和田遺跡・桜田遺跡・堂田遺跡・樋渡し遺跡

—緊急発掘調査報告書—

平成7年3月22日 印刷

平成7年3月22日 発行

編集 長野県松本市教育委員会  
(松本市立考古博物館)

〒390 長野県松本市中山3738-1

TEL 0263-86-4710

発行 長野県松本市教育委員会

印刷 株式会社 綜合印刷

---